佐久市埋蔵文化財調査報告書　第190集

岩村田遺跡群

西一本柳遺跡ⅩⅧ

長野県佐久市岩村田西一本柳遺跡　第18次調査

2011. 3

佐　久　市
佐久市教育委員会

D10号土坑出土鉄瓶

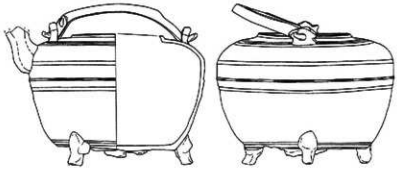
鉄瓶は井戸枠内検出面下50cmから出土した。脚～蓋の器高19.5cm釜の肩幅18.4cmを測る。共伴遺物には、中世の珠洲の壺、須恵質鉢、土師質の茶釜がある。（森泉）【注口があり、肩の上に張鐶付が付けられ、底に三つ足がみられる。蓋の部分には鎖状のものがみられる。茶の湯の中では、三足手取釜といわれるものに相当する。

底裏には、中世に栃木県佐野市で作られた天明釜によくみられる一文字湯口の形状が見て取れ、天明釜やその系譜を引く工人によって作られたと考えられる。茶会記録である『天王寺屋会記』天文18年（1549）の記録には「てとり」との記載がみられることなどから、16世紀中頃にはこの形状のものが茶の湯の釜として認識されていたことがわかる。】

（裏千家　（財）今日庵茶道資料館）降矢　哲男

D10号土坑

D10号土坑鉄瓶出土状態



D10号土坑鉄瓶実測図

例　言

1．本書は、佐久市が行う道路工事（まちづくり交付金事業　S２－277号線）に伴う岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅧの発掘調査報告書である。
2．調査原因者　佐久市都市計画課
3．調査主体者　佐久市教育委員会
4．遺跡名及び所在地　西一本柳遺跡ⅩⅧ（INPⅩⅧ）　佐久市岩村田2338-4外
5．調査期間及び面積　発掘調査　平成21年12月22日～平成22年３月26日
　整理調査　平成22年４月16日～平成23年３月25日
　開発面積　1,500㎡　調査面積　1,017㎡
6．本遺跡の調査は林・小林・冨沢・佐々木、報告書作成は林・佐々木、石材鑑定は羽毛田が行った。陶磁器類は(財)長野県埋蔵文化財センター　市川隆之氏にご教授いただいた。また、鉄瓶は、(財)裏千家今日庵 茶道資料館　降矢哲男氏にご教授いただいた。
7．本書及び関係資料等は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

1．遺構の略記号は、竪穴住居址（H）・竪穴状遺構（Ｔａ）・掘立柱建物址（Ｆ）・土坑（Ｄ）・溝状遺構（Ｍ）・単独ピット（Ｐ）である。
2．挿図の縮尺は、遺構１/80・遺物１/４である。挿図中にスケールを示した。
3．遺構の海抜標高は各遺構毎に統一し、水糸標高を標高として記した。
4．土層の色調は1988年版「新版　標準土色帖」に基づいた。
5．遺物挿図番号と遺物写真番号及び遺物観察表番号は一致する。
6．調査区は公共座標の区割りにしたがい、間隔は４m×４mに設定した。
7．遺構名は変更等により欠番が生じている。
8．挿図中のスクリントーンは、以下のことを示す。

目　次

例言・凡例・目次
第１章　発掘調査の経緯
　第１節　立地と経過 …… 1
　第２節　調査体制 …… 2
　第３節　調査日誌 …… 2
　第４節　基本層序 …… 2
　第５節　検出遺構・遺物の概要 …… 2
第Ⅱ章　遺構と遺物
　第１節　竪穴住居址 …… 5
　第２節　竪穴状遺構 …… 70
　第３節　掘立柱建物址 …… 76
　第４節　土坑 …… 76
　第５節　溝状遺構 …… 87
　第６節　ピット …… 92
　第７節　遺構外出土遺物 …… 96

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

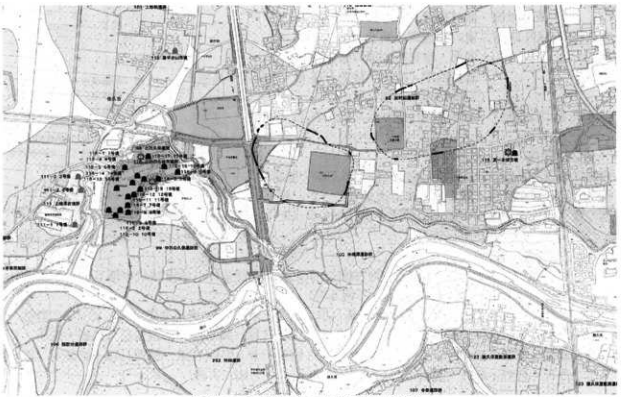
1．経過と周辺遺跡

岩村田遺跡群は、佐久市岩村田湯川右岸台地上に有る。西一本柳遺跡は遺跡群の南西端に位置し、数々の公共事業や民間開発が続き本調査は18回目を数える。今回、佐久市が道路工事（まちづくり交付金事業Ｓ２－227号線）を計画した。佐久市都市計画課と当教育委員会の保護協議の結果、記録保存目的の発掘調査を行う事となった。

西一本柳遺跡及び周辺遺跡は、弥生時代中期～中世の大複合遺跡である。北西の久保遺跡、五里田遺跡、西一本柳遺跡Ⅰ～ⅩⅦ、東一本柳遺跡Ⅰ・Ⅱ、北一本柳Ⅰ～Ⅲ、東大門遺跡、東大門先遺跡Ⅰ・Ⅱの調査では、弥生時代中期・後期、古墳時代中期・後期、奈良時代、平安時代・中世の集落・墓域が調査されていて、遺構・遺物を述べるには枚挙に遑がない。この多くの検出遺構中で弥生時代の環濠であろうと指摘されている溝状遺構が多数検出されている。西一本柳遺跡Ⅲ・ⅣのＭ１、西一本柳遺跡ⅦのＭ１、西一本柳遺跡ⅥのＭ２、西一本柳遺跡ＸⅠのＭ１、西一本柳遺跡ＸⅣのＭ12である。

今回の調査範囲のＭ２・Ｍ８号溝状遺構がこれらに関連がありそうである。図上でみると、南北280m東西200mの楕円形に結ばれそうである。いずれも弥生時代後期の土器が多量に出土している。岩村田高校第２グランドから国道141号バイパスにかけて展開する総面積５万㎡を超える弥生時代後期の環濠集落である。さらに、市営住宅、旧児童公園、市道Ｓ、市道にも溝が検出されていて、東西南北の楕円形になりそうである。（第２図）

第１図　西一本柳遺跡ⅩⅦ位置図（１：50,000）


第２図　西一本柳遺跡ⅩⅦ周辺遺跡（1:10,000）

2．調査体制

調査主体者　佐久市教育委員会　教育長　木内　　清（平成21年６月退任）
　　土屋　盛夫（平成21年７月就任）

事　務　局　社会教育部長　　内藤　孝徳（～平成21年６月）工藤　秀康（平成21年７月～）
　　文化財課長　　森角　吉晴
　　文化財係長　　三石　宗一
　　文化財調査係　　林　　幸彦　　並木　節子　　須藤　隆司　　小林　眞寿
　　羽毛田卓也　　冨沢　一明　　神津　　格（～平成21年10月）
　　上原　　学　　井出　泰章（平成21年10月～）出澤　　力

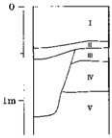
調査体制

調査担当者　林　幸彦　　佐々木宗昭

調　査　員　赤羽根充江　浅沼勝男　安部和人　飯塚一男　飯森成英　磯貝律子
　　市川光吉　岩崎重子　岩松茂年　臼田絢佳　臼田　猛　小沢稔幸
　　柏木義雄　加藤ひろ美　狩野小百合　河原田三男　河原田憲子　神津和子
　　神津千春　小井戸厚子　小井戸秀元　小林節子　小林千勝　清水澄生
　　清水律子　坂井一夫　堺　益子　佐々木靖夫　里見理生　澤井知春
　　副島充子　大工原達江　田中ひさ子　土屋邦子　中澤　登　中山清美
　　羽毛田利明　花里佐恵子　広瀬梨恵子　本田慶二　堀籠保子　宮川真紀子
　　横尾敏雄　依田三男　柳沢孝子　山口ひとみ　渡辺　真

3．調査日誌

平成21年12月22日　器材搬入、重機による表土除去。遺構確認。
平成22年　1月　4日　遺構確認・掘り下げ・記録。
　　3月24日　埋め戻し終了。
　　3月26日　器材撤収。
平成22年　4月16日　室内整理調査開始。
　　図面・写真等記録の整理及び修正。
　　遺物洗浄・注記・接合・復元・実測・写真撮影。
　　原稿の執筆、報告書の作成。
平成23年　3月25日　報告書刊行をもって調査終了。



I層　暗褐色土（10YR3/4）
　　排作土、粘性弱い。
II層　黒褐色土（10YR2/3）
　　小礫少量、粘性ややあり。
III層　暗褐色土（10YR3/3）
　　しまり弱く、やや粘性あり。
IV層　褐色土（10YR4/6）
　　しまり、粘性弱い。
　　小礫・黄色砂。
V層　にぶい黄橙色土（10YR6/3）
　　粘性弱い。砂層

第３図　西一本構遺跡XⅧ基本土層模式図

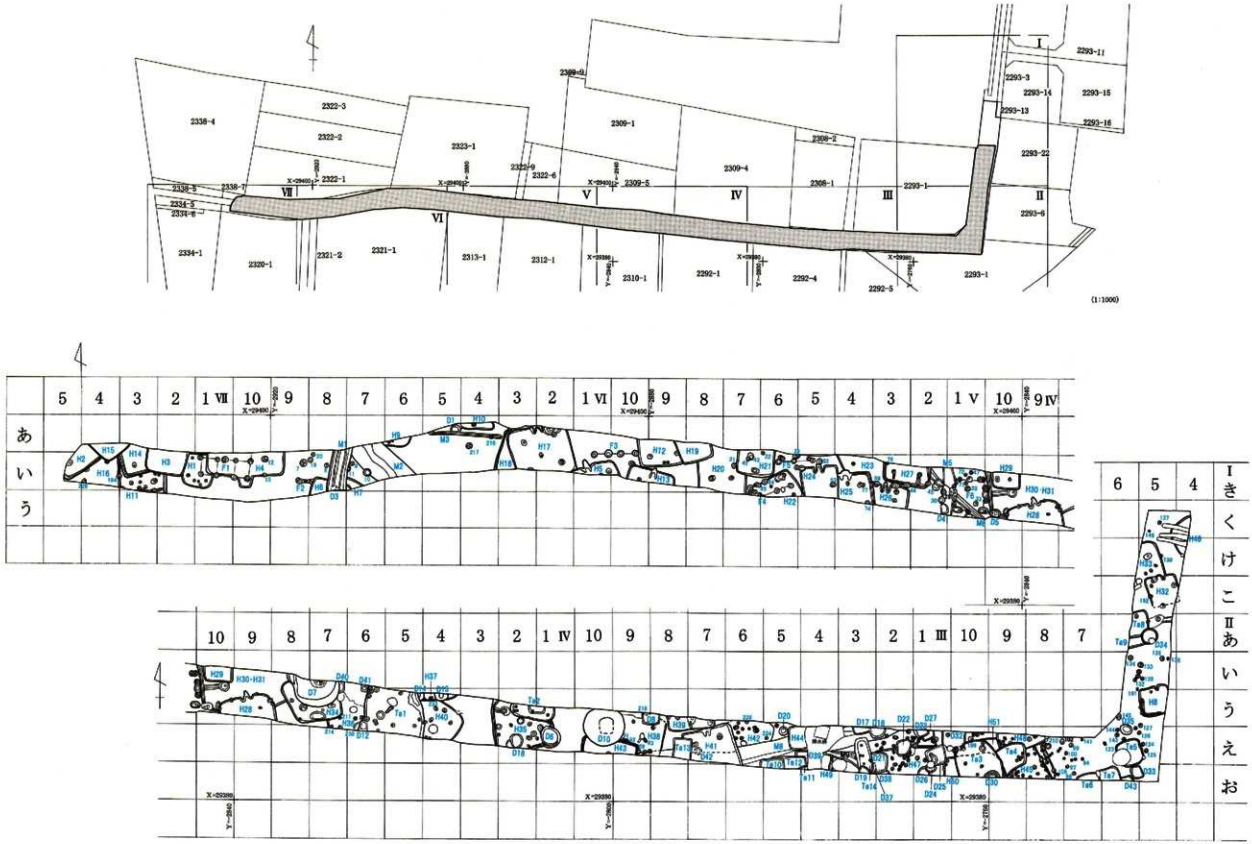
4．基本層序

遺構は地表下30～50cmの第Ⅲ層暗褐色土の上面で確認された。第Ⅱ層が覆土１層に見られる遺構もあった。各遺構の壁下部や底面は、砂層となり脆く崩れやすかった。

5．検出遺構・遺物の概要

遺構　竪穴住居址50軒（弥生時代中期10軒、弥生時代後期２軒、古墳時代中期５軒、古墳時代後期16軒、奈良・平安時代13軒、不明４軒）
　　掘立柱建物址２棟、竪穴状遺構14基（中世）、土坑43基、溝状遺構７本、ピット235基

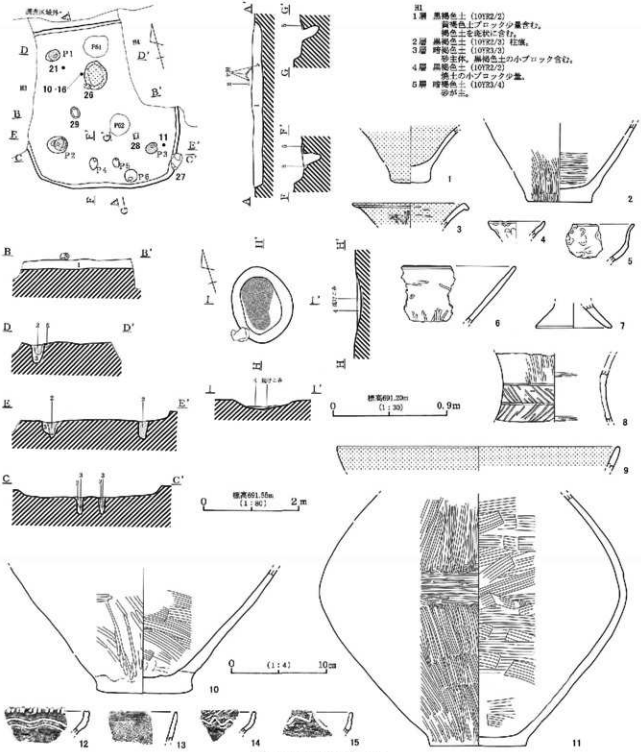
遺物　弥生中期・後期土器、土師器、須恵器、埴輪、灰釉、陶磁器類、鉄製品（鉄鏃・刀子・鎌・燧鉄・鉄瓶・鉄釘）、石製品（磨製石斧・打製石斧・打製石鏃・磨製石鏃・紡錘車・砥石・台石・敲石・磨石・凹石・石臼）、石製模造品、玉類、古銭。



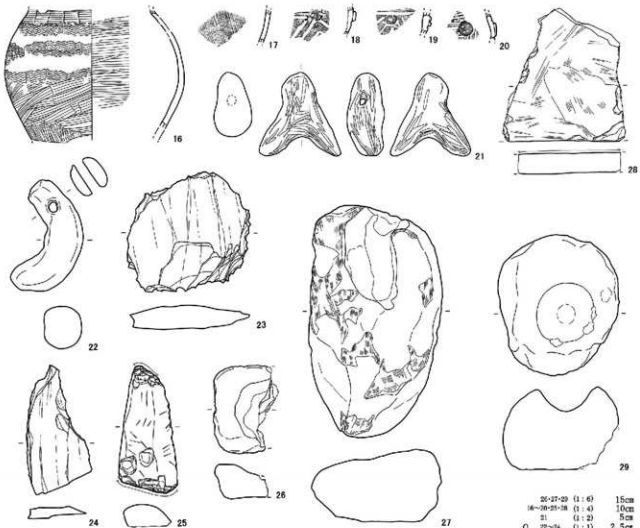
第４図　西一本柳遺跡Ⅹ Ⅷ調査範囲・全体図（1:400）

1．竪穴住居址

H1号住居址

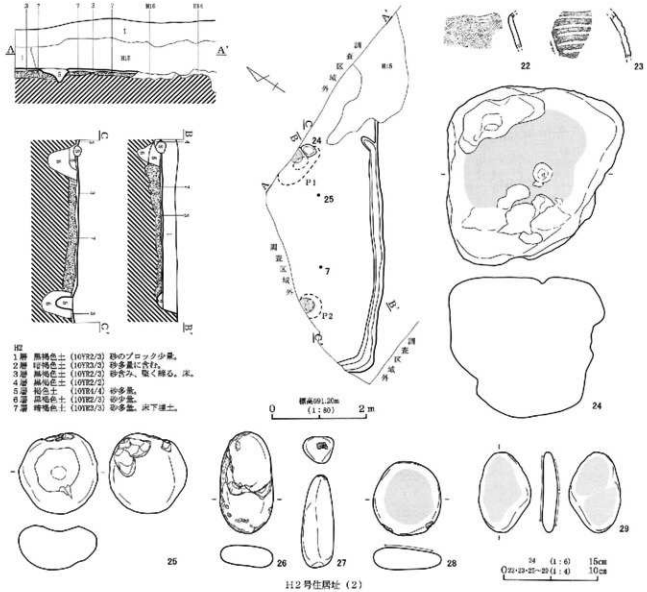


第5図　H1号住居址（1）



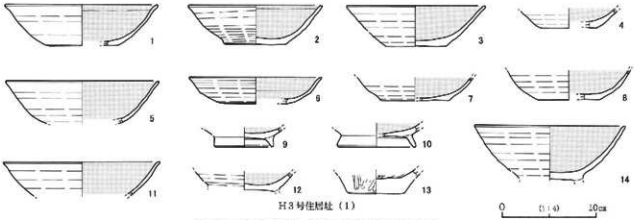
H2号住居址

第6図　H1号住居址（2）・H2号住居址（1）



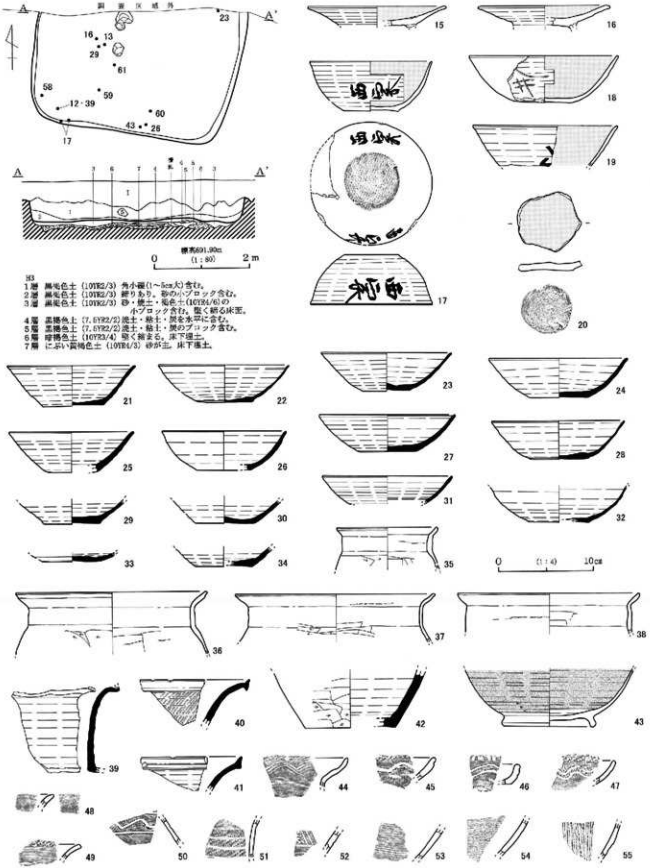
H2号住居址（2）

H3号住居址

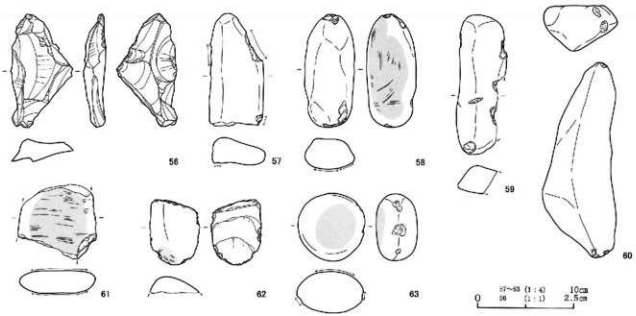


H3号住居址（1）

第7図　H2号住居址（2）・H3号住居址（1）

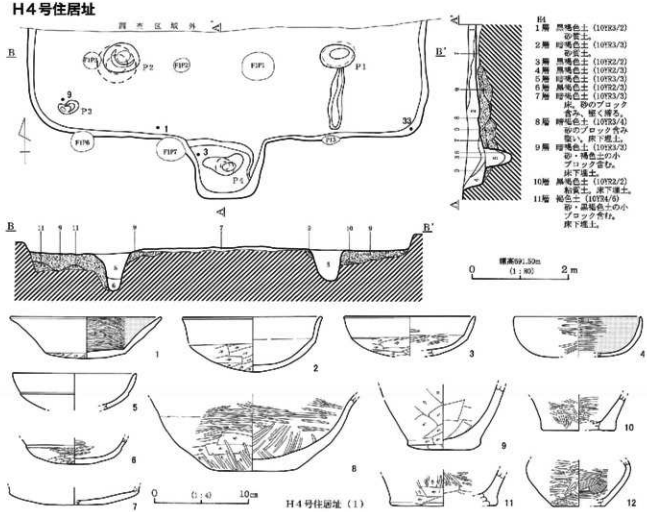

A
A'
調査区境界
16
13
29
61
58
59
12・39
60
43
26
17
23
標高91.90m
(1:80)
0
2m
注
1層 黒褐色土 (10YR2/3) 角小礫(1～5cm大)含む。
2層 黒褐色土 (10YR2/3) 締りあり。砂のハブロック含む。
3層 黒褐色土 (10YR2/3) 砂・粘土・暗赤土(10YR4/6)の
小ブロック含む。堅く締る床面。
4層 黒褐色土 (7.5YR2/2)粘土・砂土・炭を水平に含む。
5層 黒褐色土 (7.5YR2/2)粘土・砂土・炭のブロック含む。
6層 暗褐色土 (10YR3/4) 堅く締まる。床下埋土。
7層 にぶい黄橙色土 (10YR6/3) 砂が主。床下埋土。
15
16
18
19
17
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
0
(1:4)
10cm
36
37
38
39
40
42
43
41
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55

第8図　H3号住居址（2）

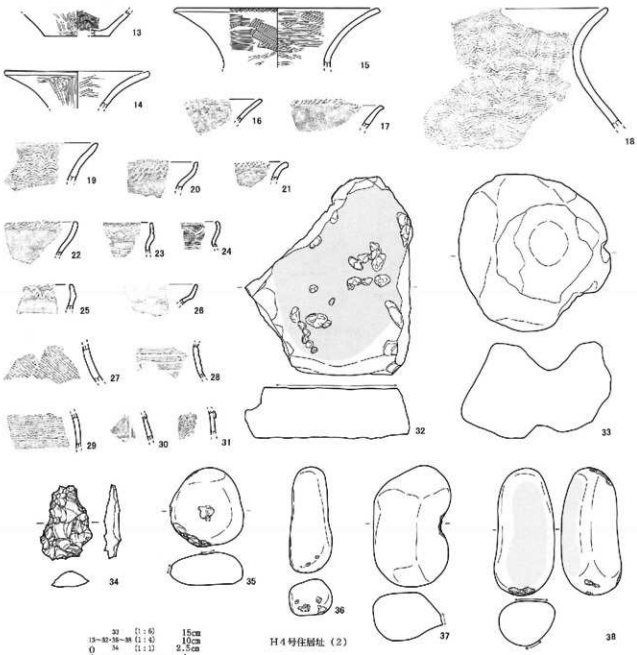


H13号住居址（3）

H4号住居址

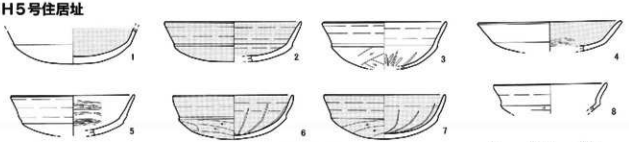


第9図 H13号住居址（3）・H4号住居址（1）



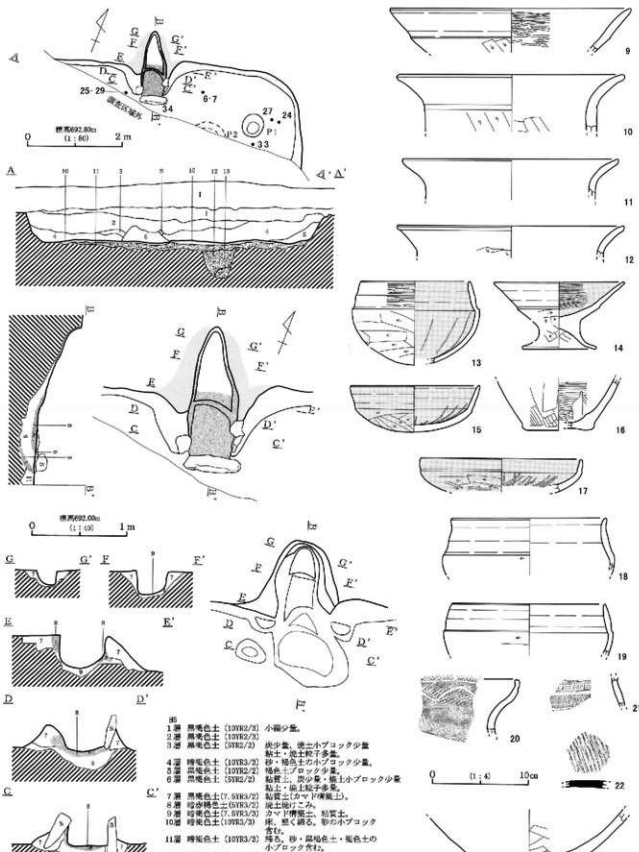
H4号住居址（2）

H5号住居址



H5号住居址（1）

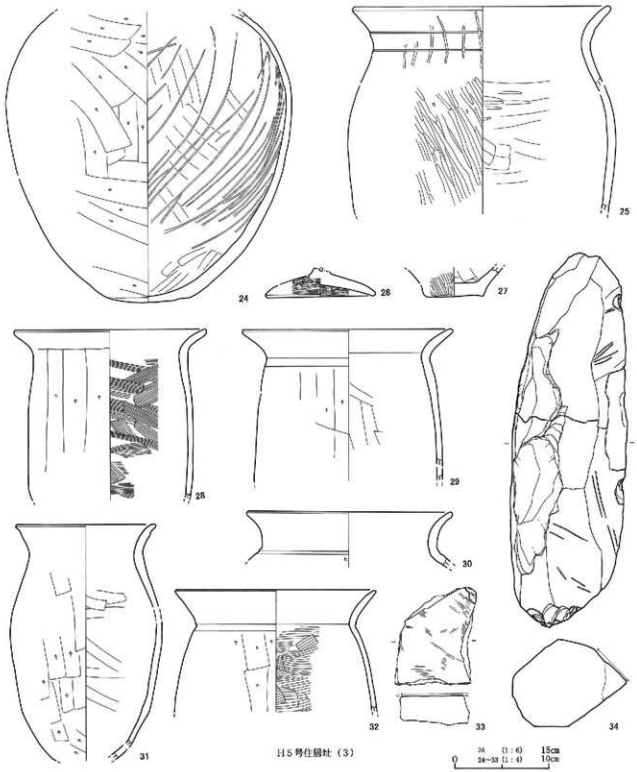
第10図　H4号住居址（2）・H5号住居址（1）



SB

1層 黒褐色土（10YR2/3） 小礫少量。
2層 黒褐色土（10YR2/3）
3層 黒褐色土（5YR2/2） 炭少量、焼土小ブロック少量
軟土、焼土粒子多量。
4層 暗褐色土（10YR3/3） 砂・暗色土の小ブロック少量。
5層 黒褐色土（10YR2/2） 暗色土ブロック少量。
6層 黒褐色土（5YR2/2） 粘質土、炭少量・焼土小ブロック少量
粘土・焼土粒子多量。
7層 黒褐色土（7.5YR3/2） 粘質土（カマド構築土）。
8層 暗赤褐色土（5YR3/2） 焼土塊ごみ。
9層 暗褐色土（7.5YR3/3） カマド構築土、粘質土。
10層 暗褐色土（10YR3/3） 床、堅く締る。砂の小ブロック
含む。
11層 暗褐色土（10YR3/3） 暗色、砂・黒褐色土・褐色土の
小ブロック含む。
12層 黒褐色土（10YR2/3） 砂含む。
13層 黒褐色土（10YR2/3） 堅く締る、砂含む。

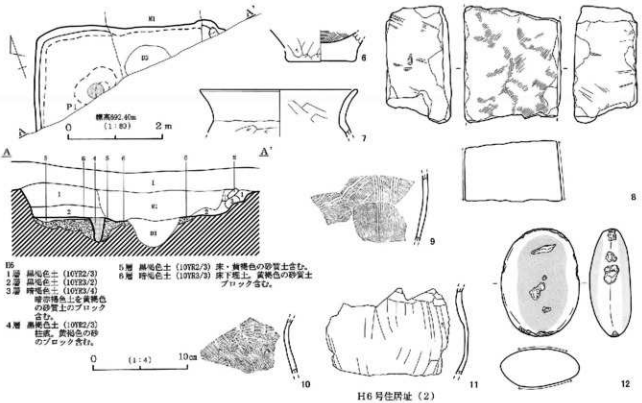
第11図 H５号住居址（2）



H6号住居址

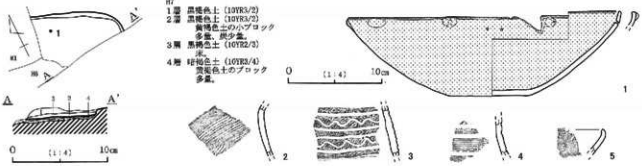
H6号住居址（1）

第12図　H5号住居址（3）・H6号住居址（1）



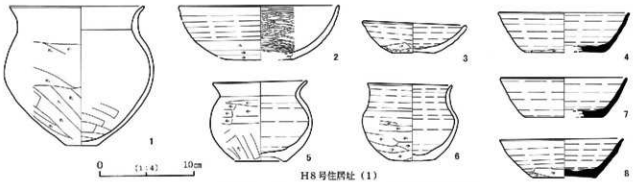
H6号住居址（2）

H7号住居址



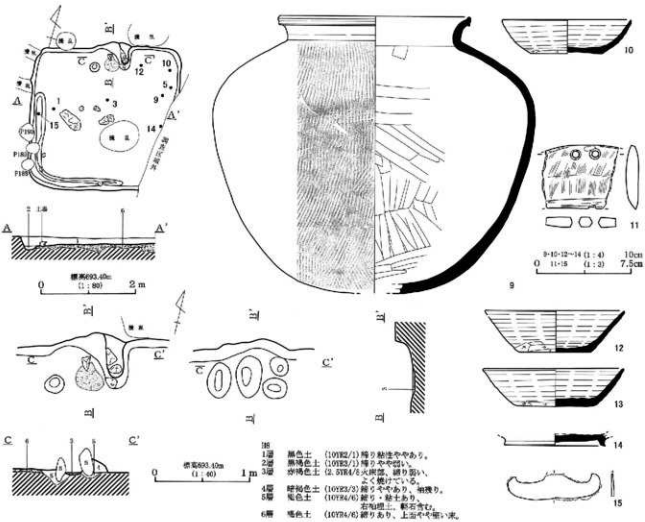
H7号住居址

H8号住居址



H8号住居址（1）

第13図 H6号住居址（2）・H7号住居址・H8号住居址（1））

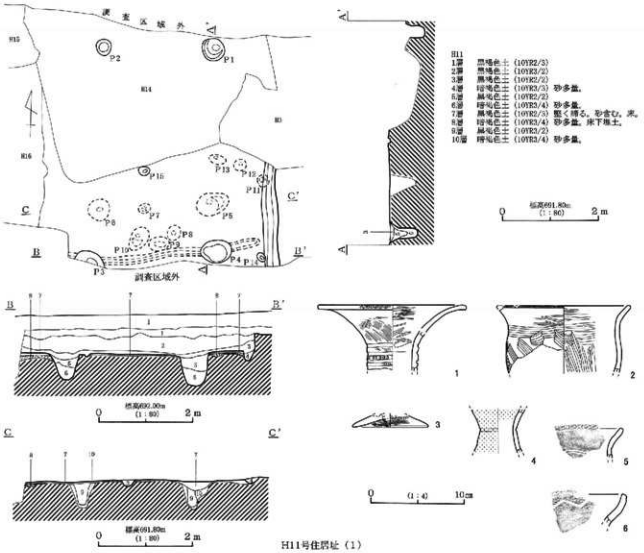


第14図　H８号住居址（２）・H９号住居址

H10号住居址

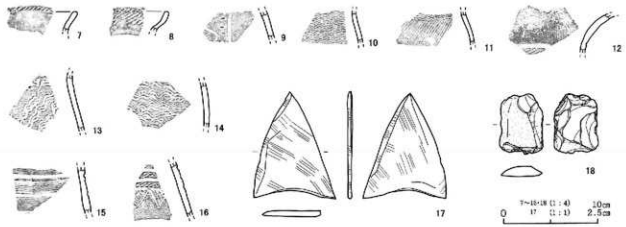
H10号住居址

H11号住居址



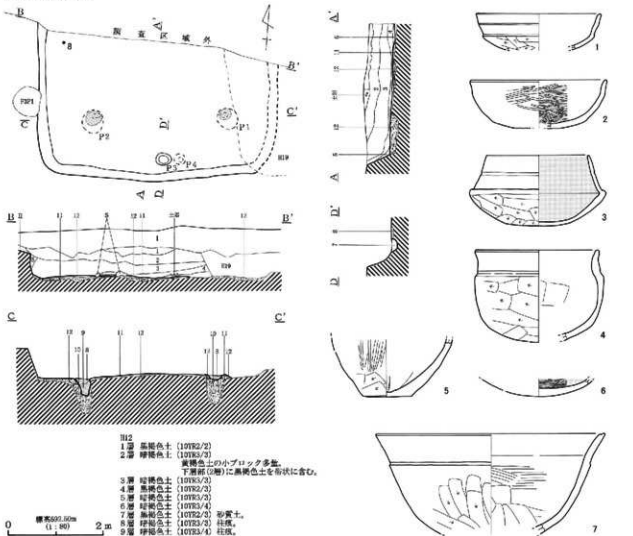
H11号住居址 (1)

第15図 H10号住居址・H11号住居址 (1)

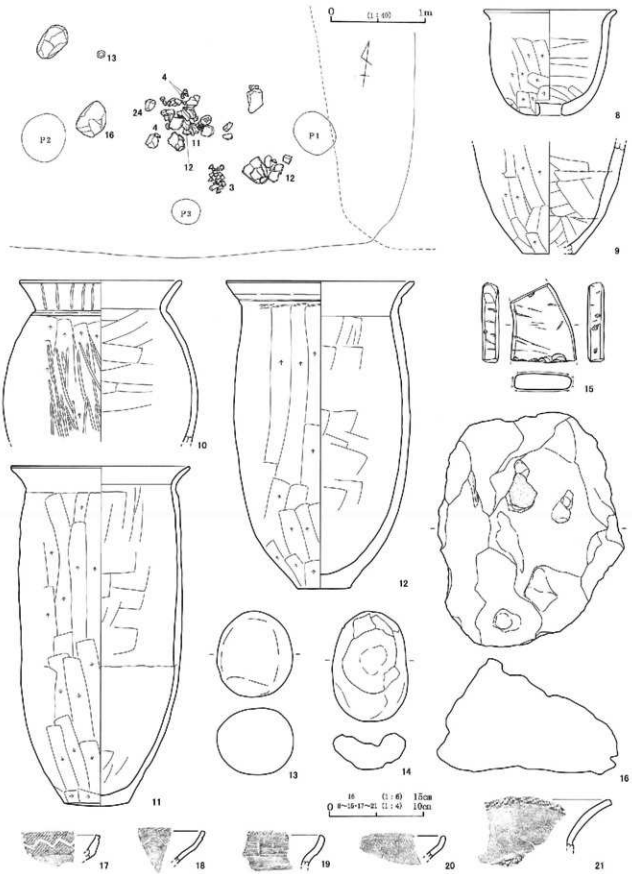


H11号住居址（2）

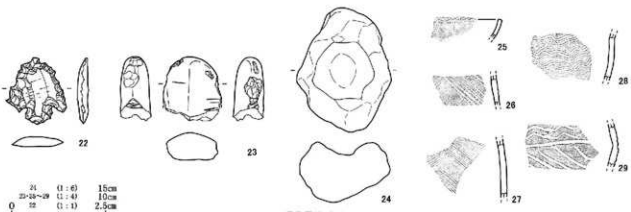
H12号住居址



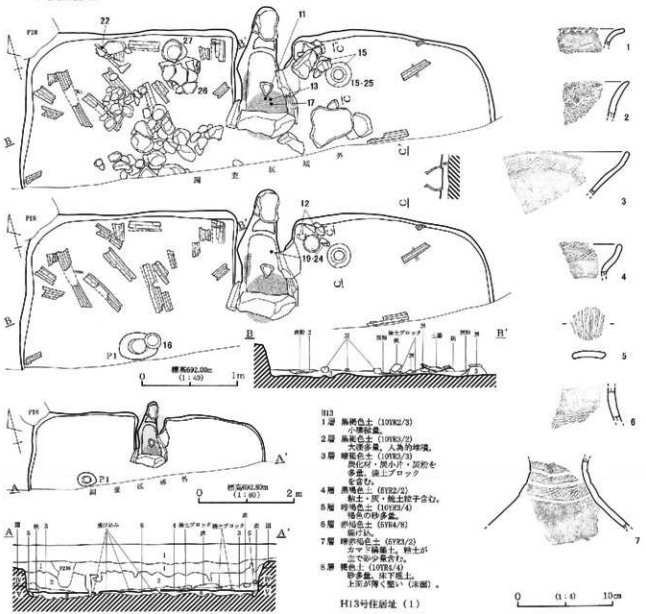
第16図　H11号住居址（2）・H12号住居址（1）



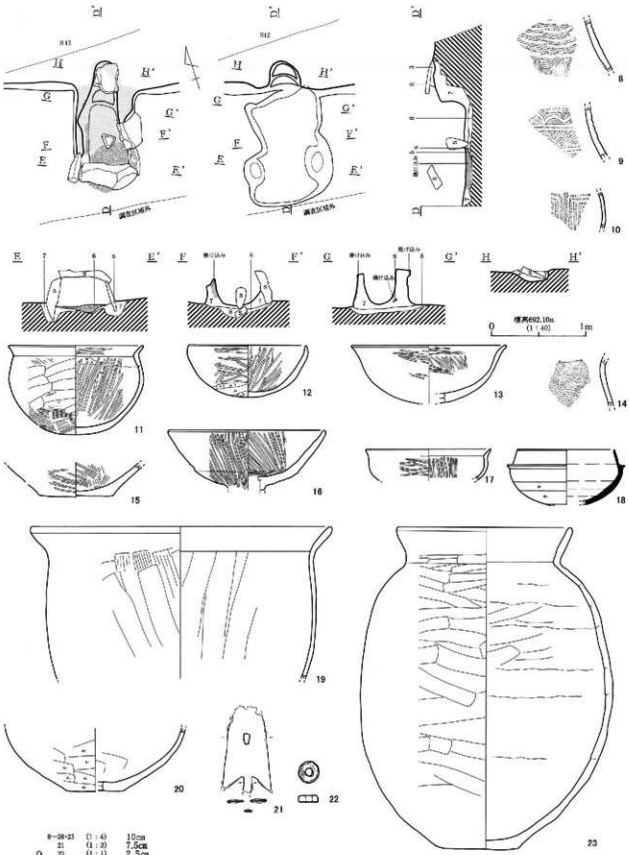
第17図　H12号住居址（2）



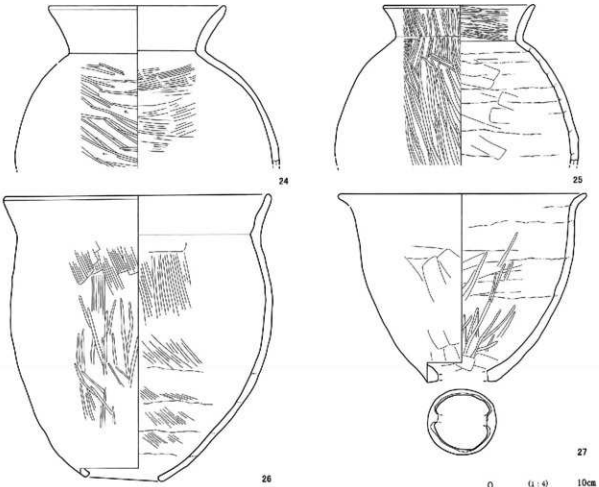
H13号住居址



第18図　H12号住居址（3）・H13号住居址（1）

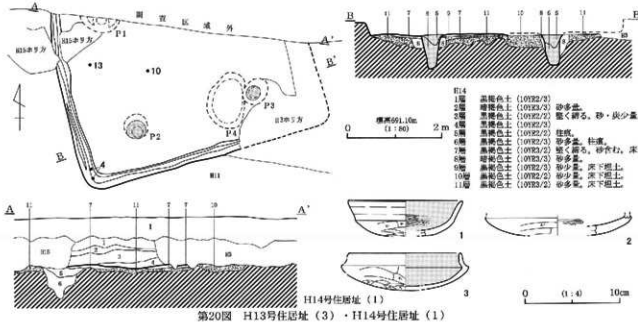


第19図　H13号住居址（2）



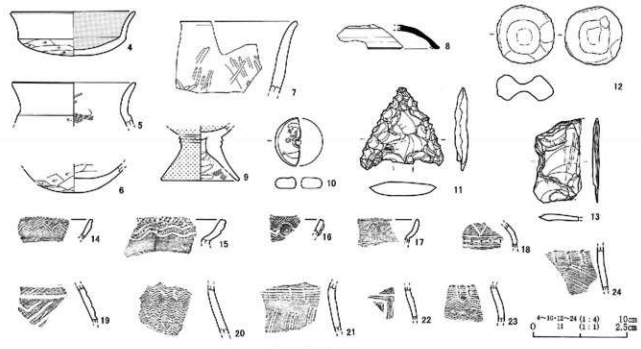
H13号住居址（3）

H14号住居址



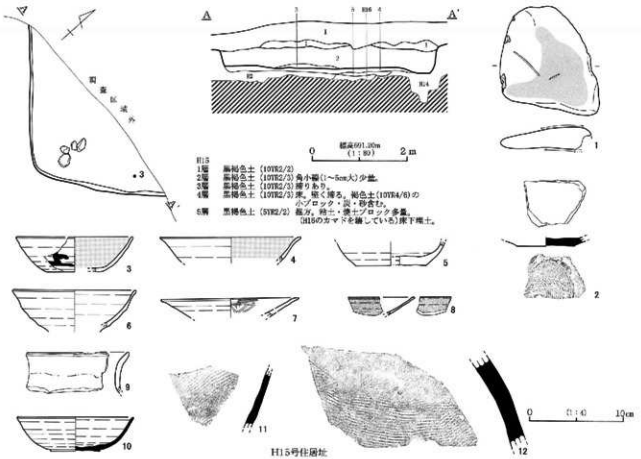
H14号住居址（1）

第20図　H13号住居址（3）・H14号住居址（1）



H14号住居址（2）

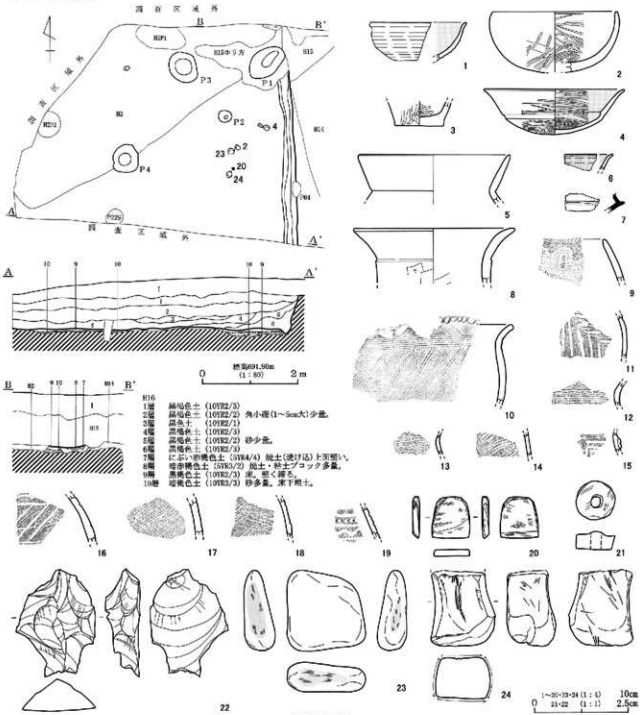
H15号住居址



H15号住居址

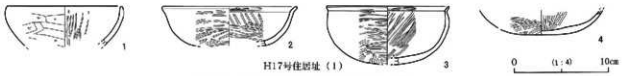
第21図　H14号住居址（2）・H15号住居址

H16号住居址



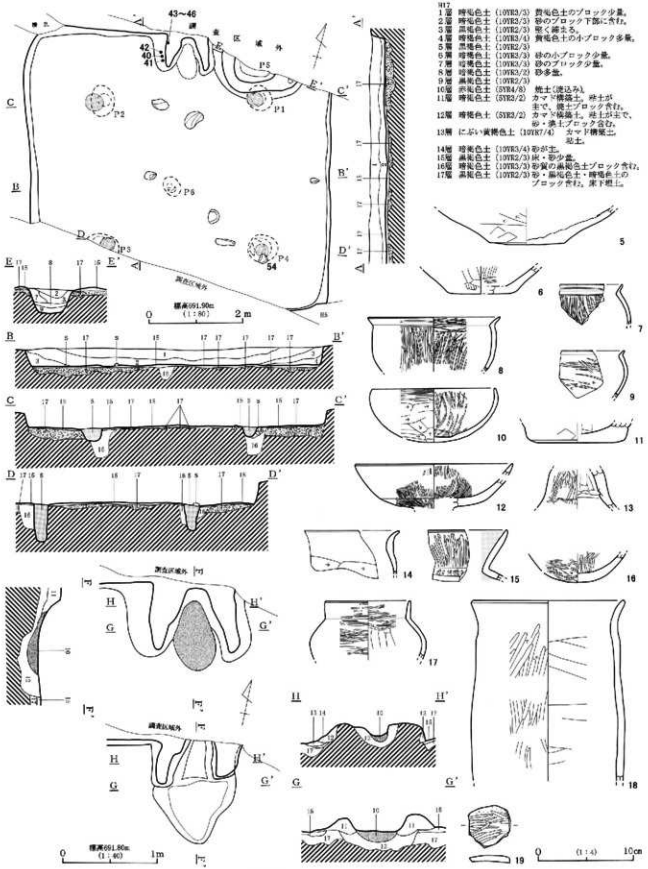
H16号住居址

H17号住居址

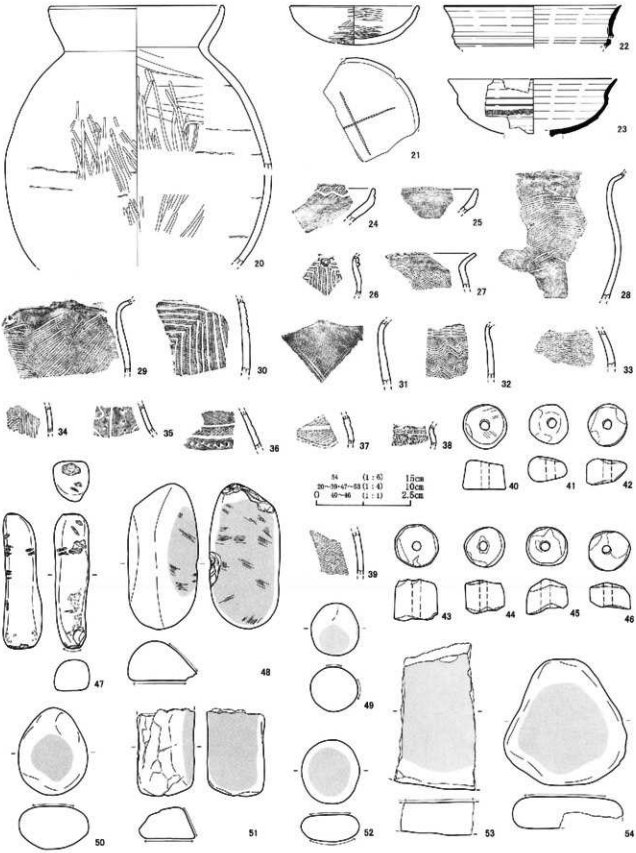


H17号住居址 (1)

第22図 H16号住居址・H17号住居址 (1)

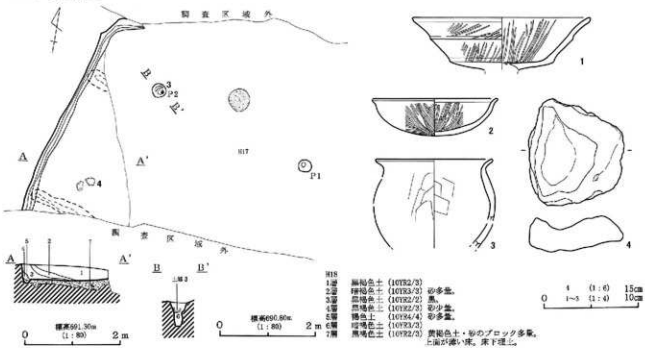


第23図 H17号住居址（2）



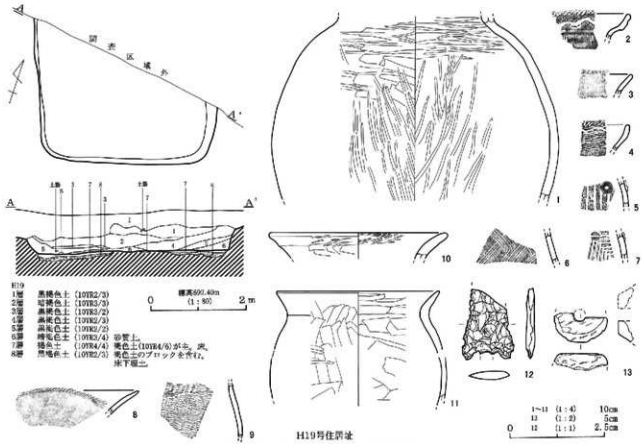
第24図　H17号住居址（3）

H18号住居址



H18号住居址

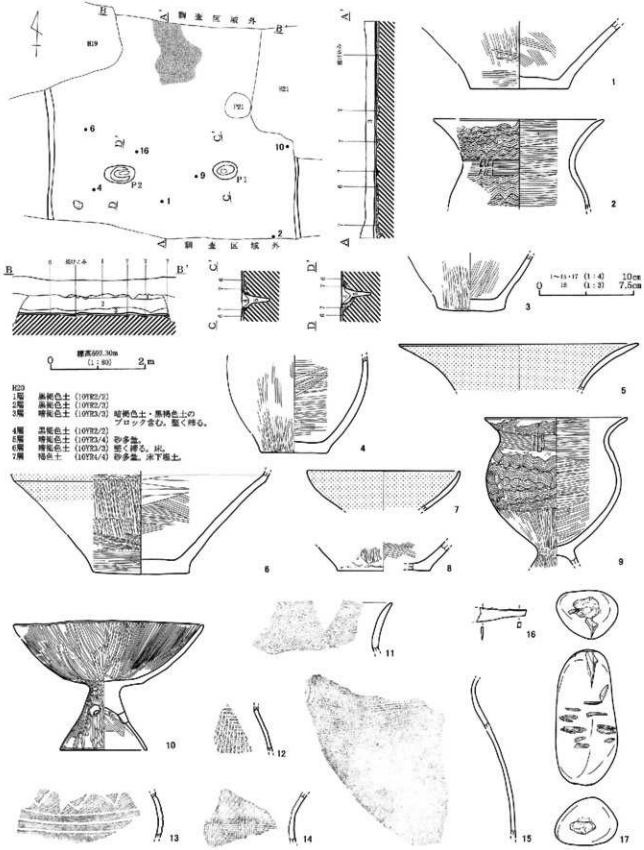
H19号住居址



H19号住居址

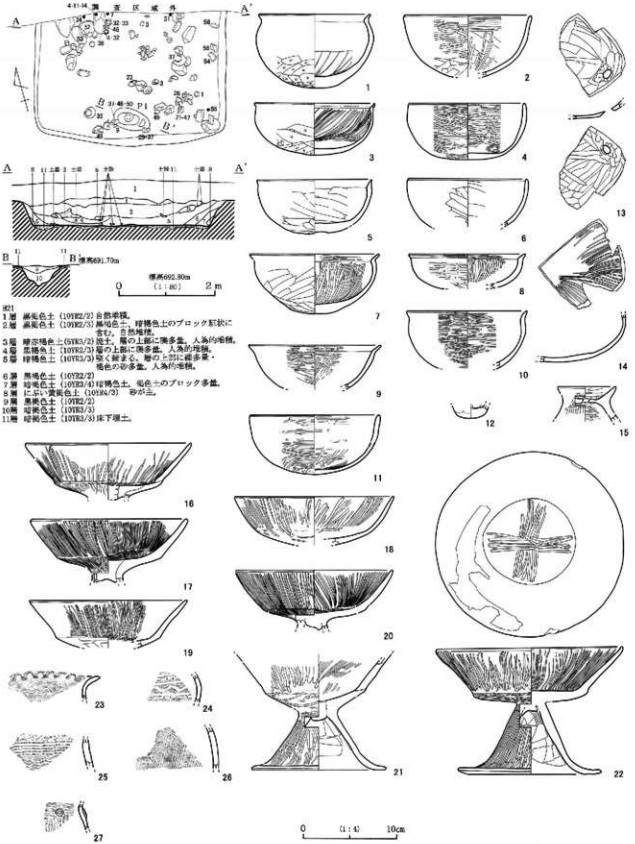
第25図　H18号住居址・H19号住居址

H20号住居址

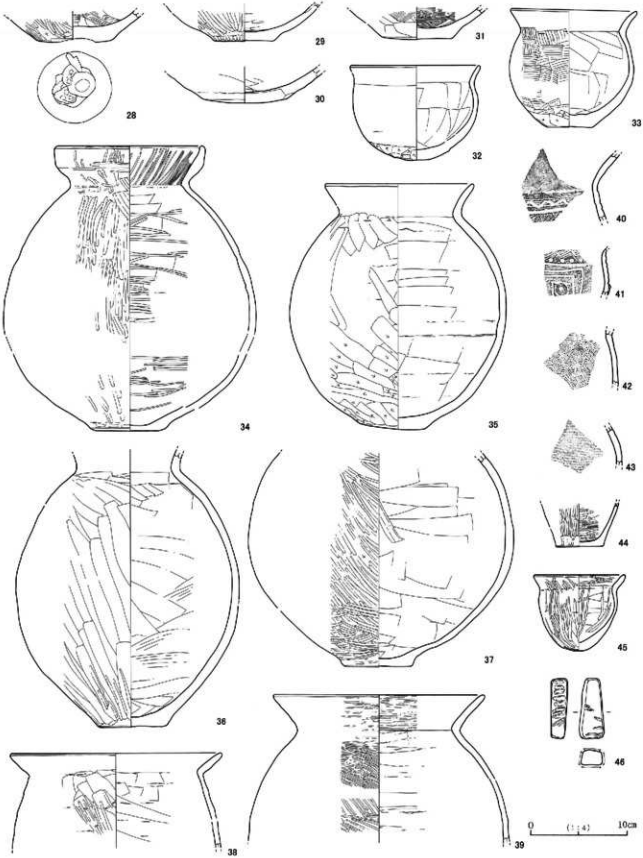


第26図　H20号住居址

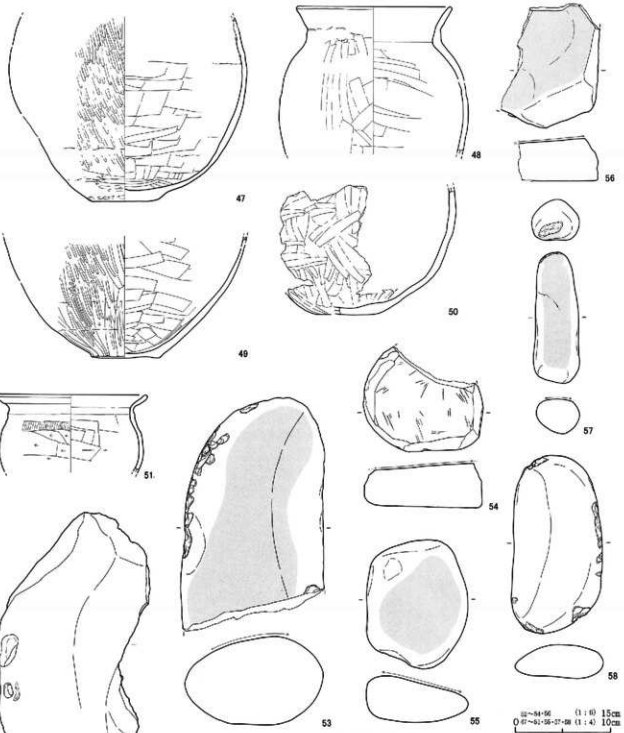
H21号住居址



第27図　H21号住居址（1）



第28図　H21号住居址（2）

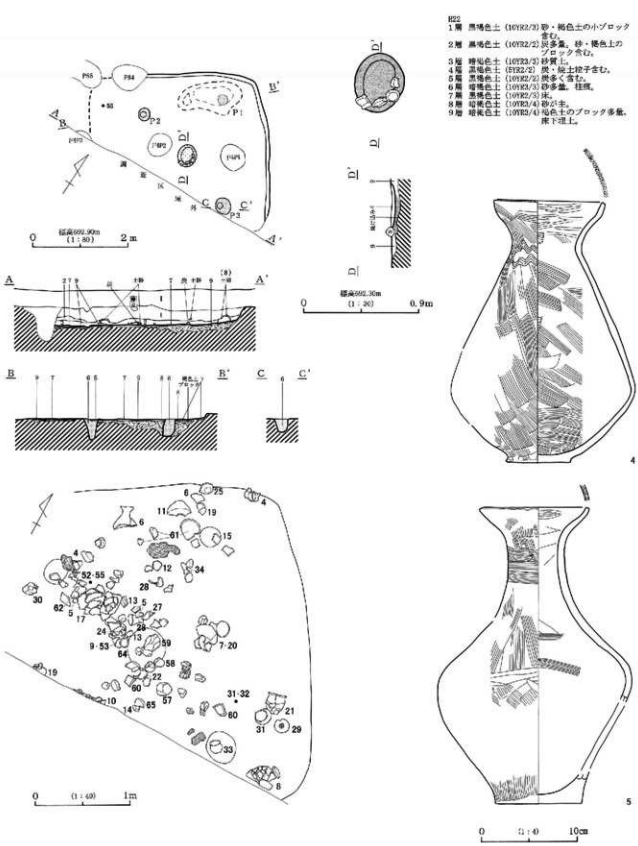


H21号住居址（3）

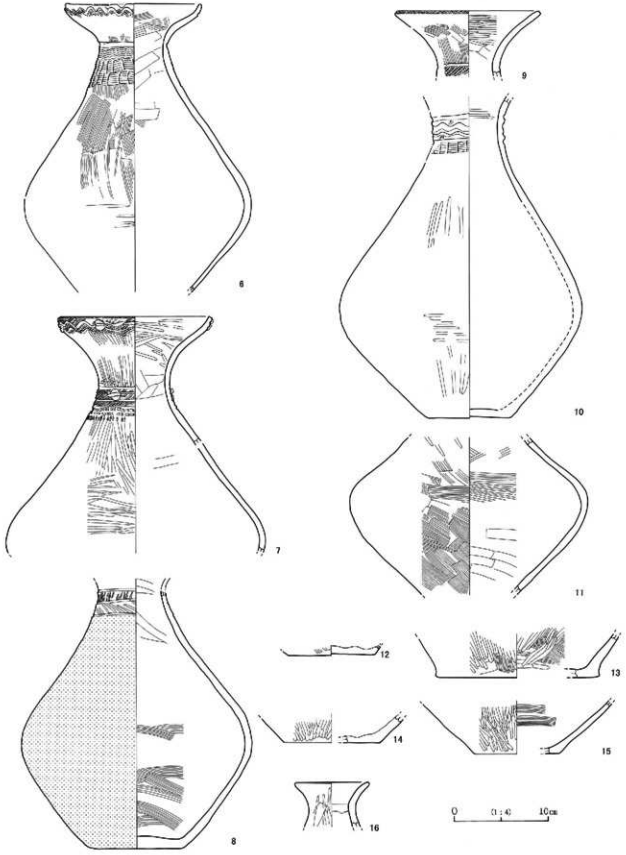
H22号住居址

H22号住居址（1）

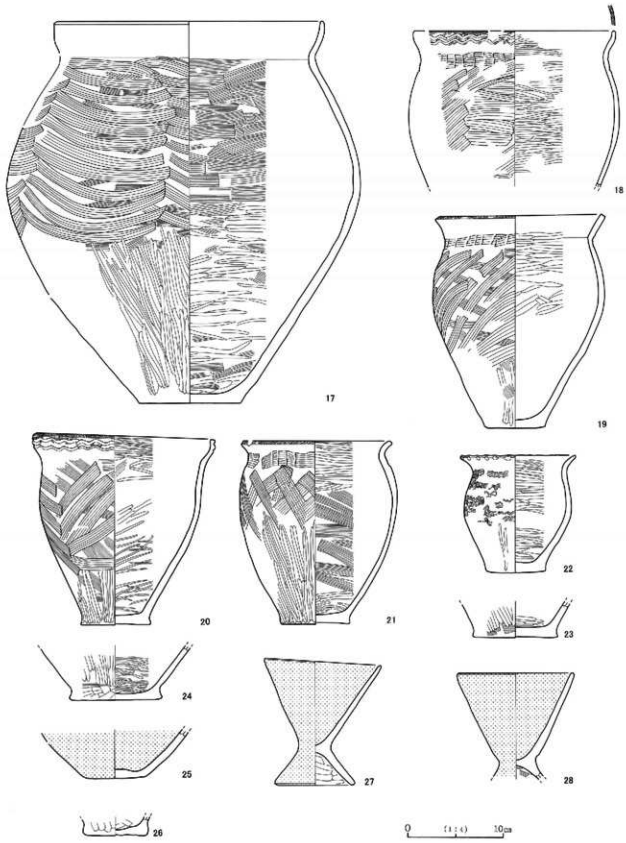
第29図　H21号住居址（3）・H22号住居址（1）



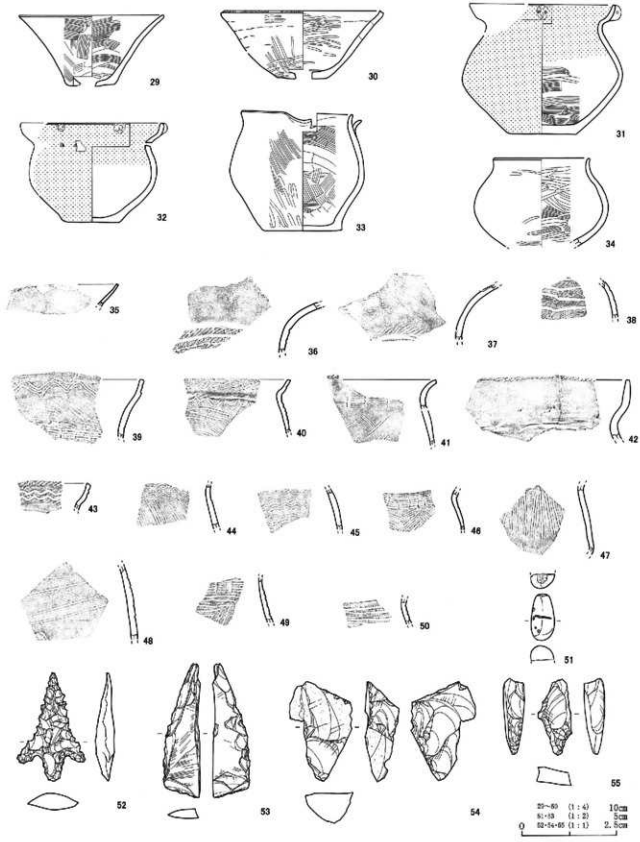
第30図　H22号住居址（2）



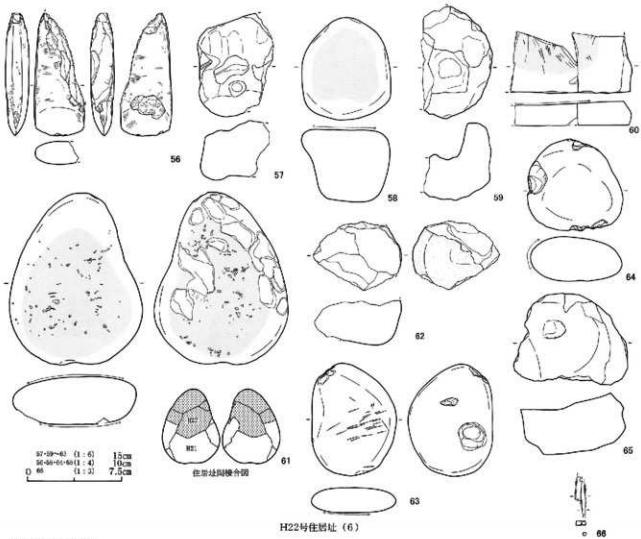
第31図　H22号住居址（3）



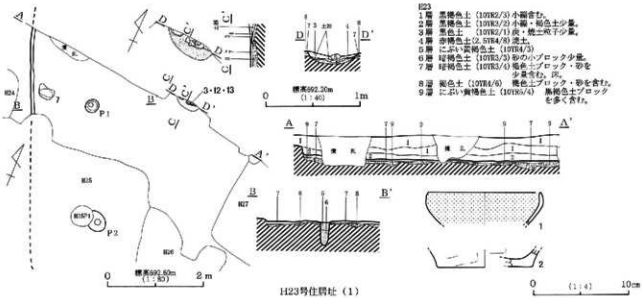
第32図　H22号住居址（4）



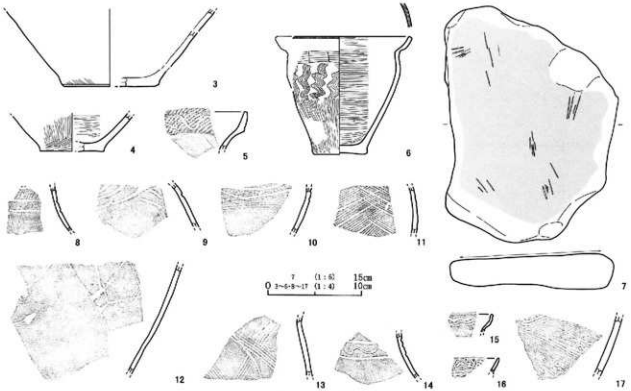
第33図　H22号住居址（5）



H23号住居址

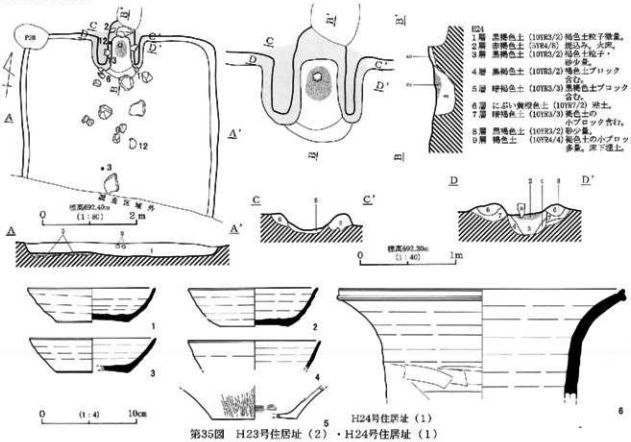


第34図　H22号住居址（6）・H23号住居址（1）



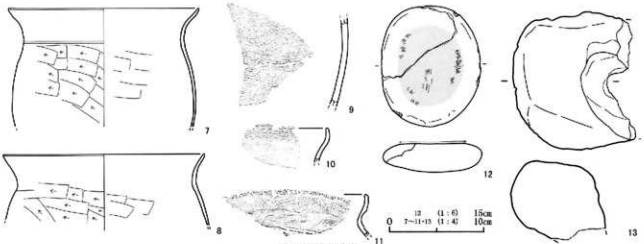
H23号住居址（2）

H24号住居址



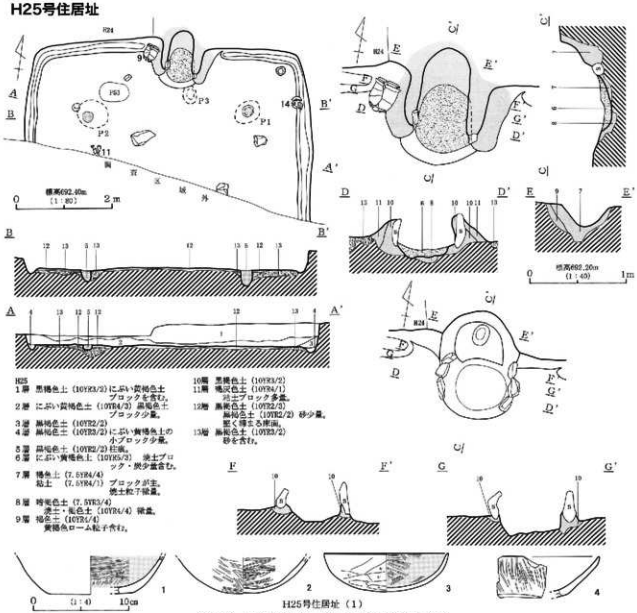
H24号住居址（1）

第35図　H23号住居址（2）・H24号住居址（1）



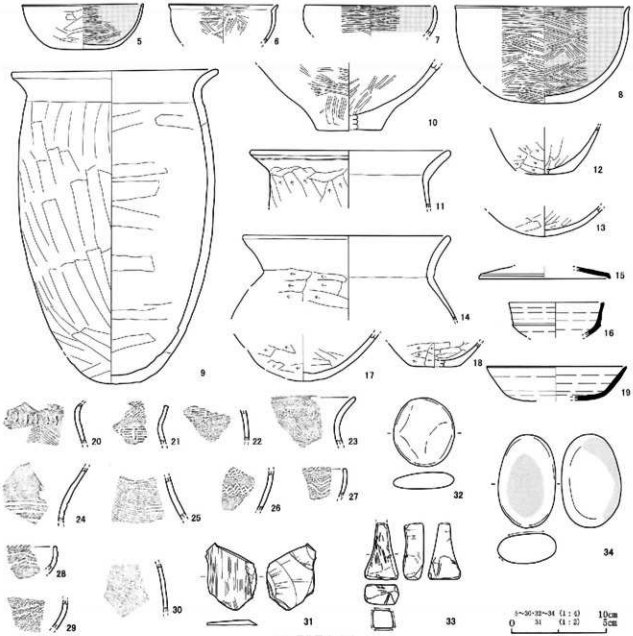
H24号住居址（2）

H25号住居址



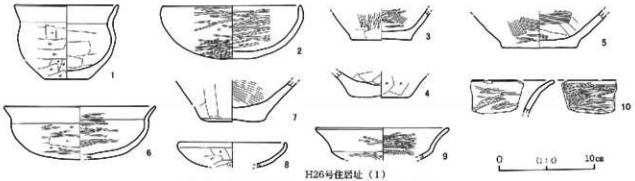
H25号住居址（1）

第36図 H24号住居址（2）・H25号住居址（1）



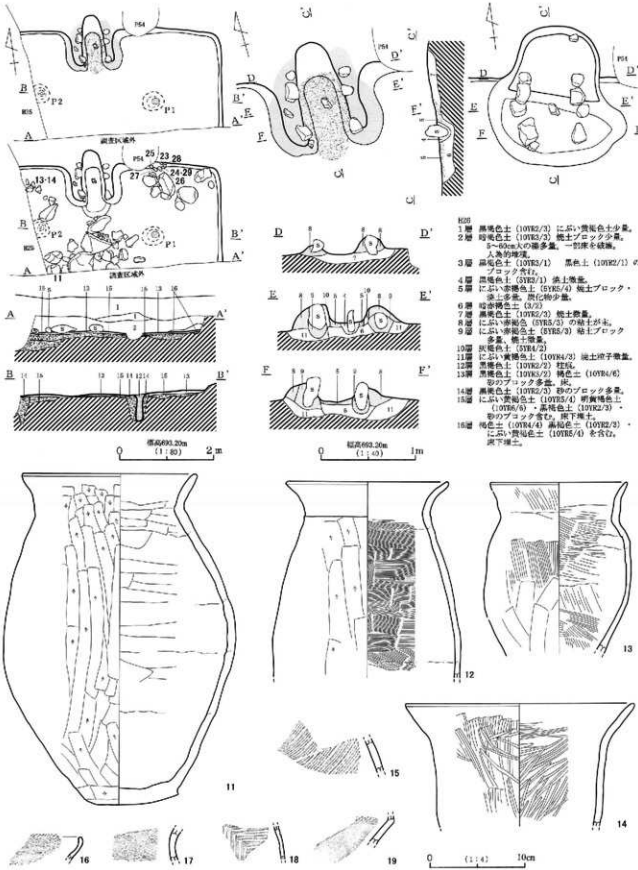
H25号住居址（2）

H26号住居址



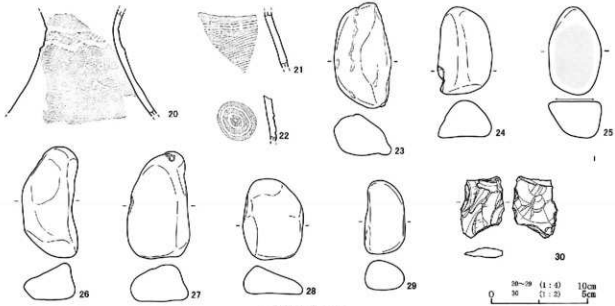
H26号住居址（1）

第37図　H25号住居址（2）・H26号住居址（1）



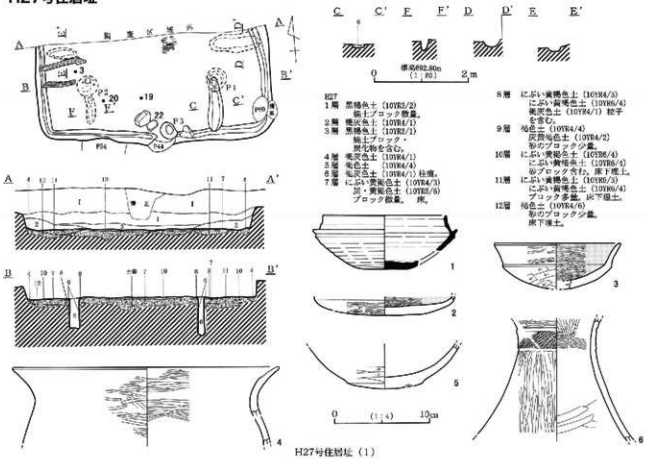
M25
1層 黒褐色土（10YR2/3）にぶい黄褐色土少量。
2層 暗褐色土（10YR3/3）焼土ブロック少量。
5～60cm大の礫多量。一部床を破壊。
人為的堆積。
3層 黒褐色土（10YR3/1） 黒色土（10YR2/1）のブロック含む。
4層 黒褐色土（5YR3/1）焼土微量。
5層 にぶい赤褐色土（5YR5/4）焼土ブロック・焼土多量。炭化物少量。
6層 暗赤褐色土（3/2）
7層 黒褐色土（10YR2/3）焼土微量。
8層 にぶい赤褐色（5YR5/3）の粘土が主。
9層 にぶい赤褐色土（5YR5/3）粘土ブロック多量。焼土微量。
10層 灰褐色土（5YR4/2）
11層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）焼土粒子微量。
12層 黒褐色土（10YR2/2）柱痕。
13層 黒褐色土（10YR3/2）褐色土（10YR4/6）砂のブロック多量。炭。
14層 黒褐色土（10YR2/3）砂のブロック多量。
15層 にぶい黄褐色土（10YR5/4）明黄褐色土（10YR6/6）・黒褐色土（10YR2/3）・砂のブロック含む。床下埋土。
16層 褐色土（10YR4/4）黒褐色土（10YR2/3）・にぶい黄褐色土（10YR5/4）を含む。
床下埋土。

第38図 H26号住居址（2）



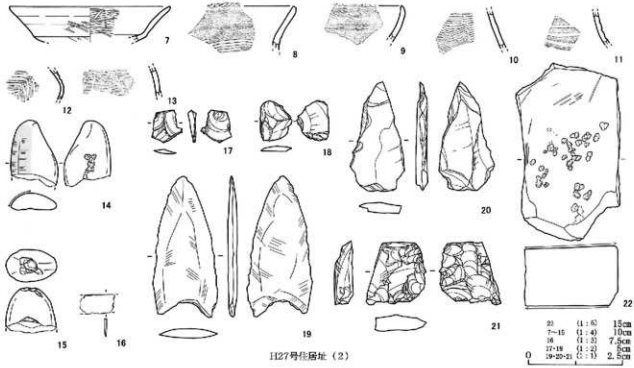
H26号住居址（3）

H27号住居址

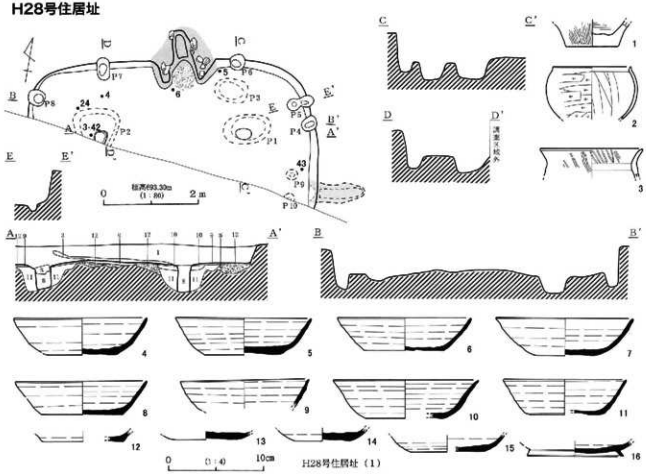


H27号住居址（1）

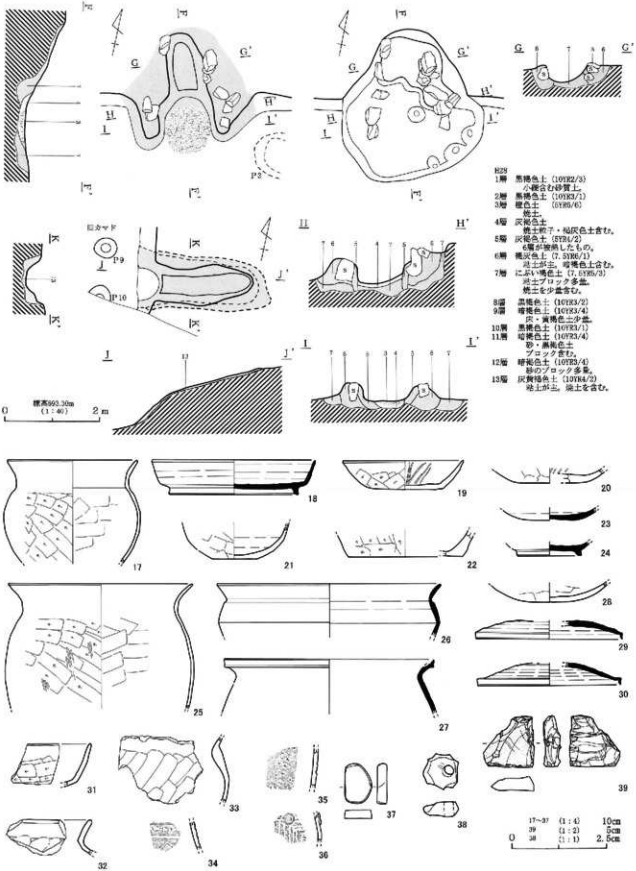
第39図　H26号住居址（3）・H27号住居址（1）



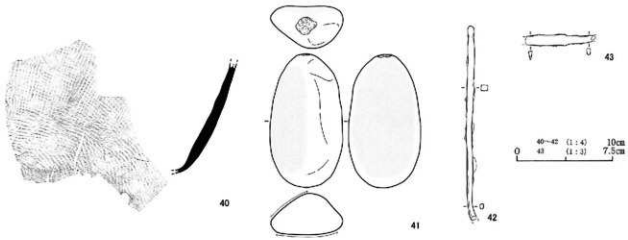
H28号住居址



第40図　H27号住居址（2）・H28号住居址（1）

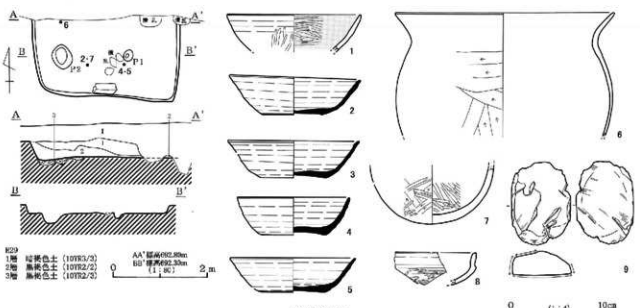


第41図　H28号住居址（2）



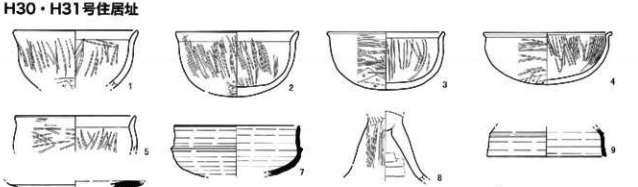
H28号住居址（3）

H29号住居址

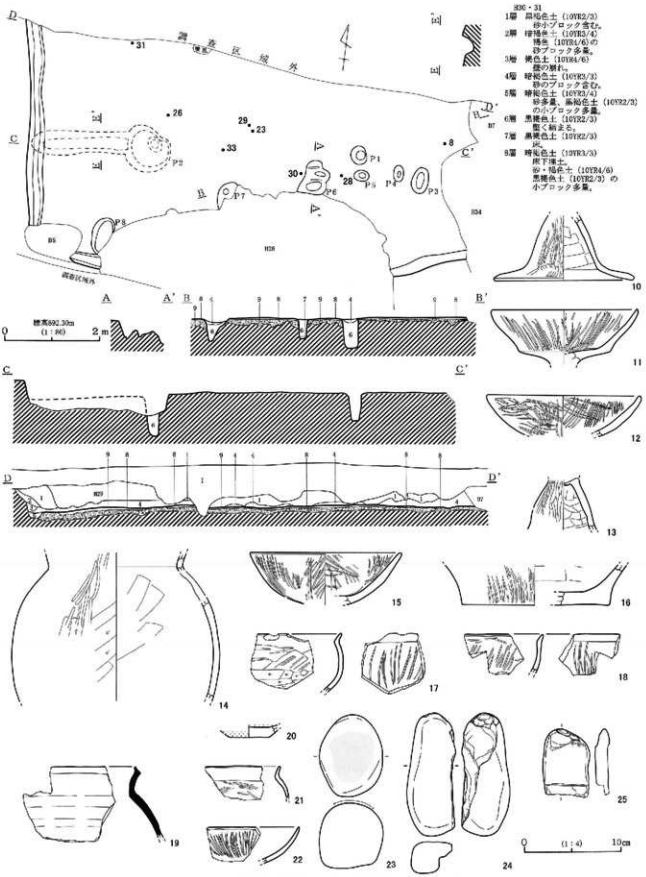


H29号住居址

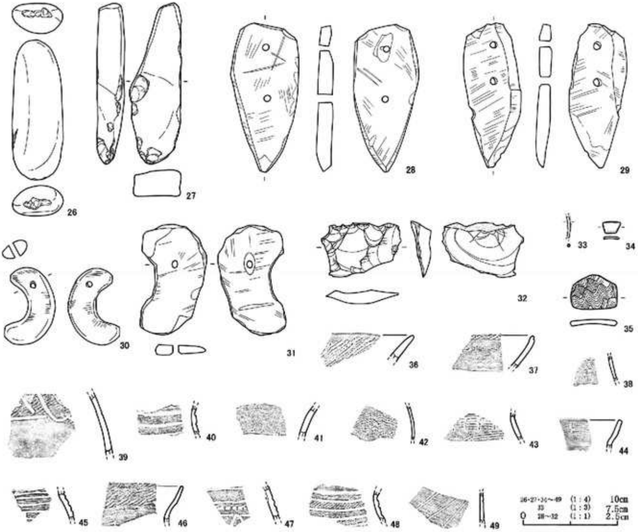
H30・H31号住居址



第42図　H28号住居址（3）・H29号住居址・H30・31号住居址（1）

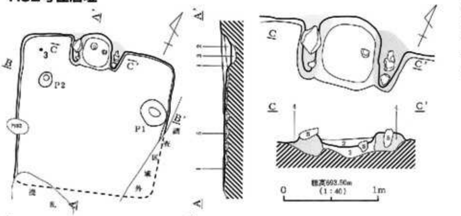


第43図　H30・31号住居址（2）

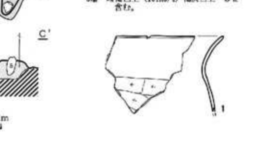


H30・H31号住居址（3）

H32号住居址

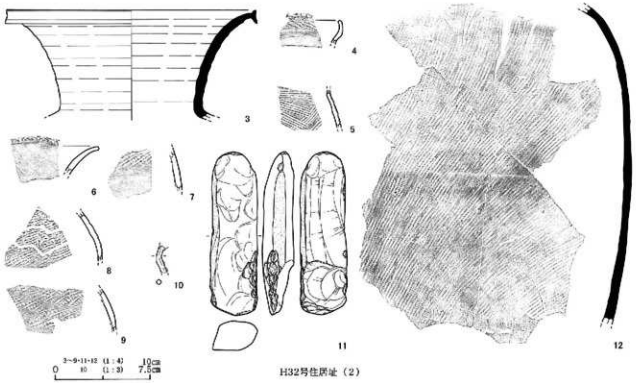


H32
1層　黒褐色土（10YR2/3）砂を含む。
2層　黒褐色土（10YR2/2）褐色の粘土ブロック小量、焼土・炭を多く含む。
3層　黒褐色土（10YR3/2）焼土・炭を少量含む。
4層　黒褐色土（10YR3/1）黒粘土が主で、堅く締まる。
5層　暗褐色土（10YR3/4）褐灰色土・砂を含む。



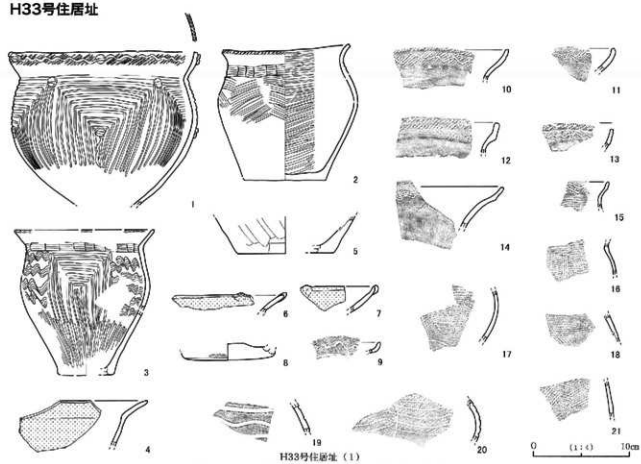
H32号住居址（1）

第44図　H30・31号住居址（3）・H32号住居址（1）



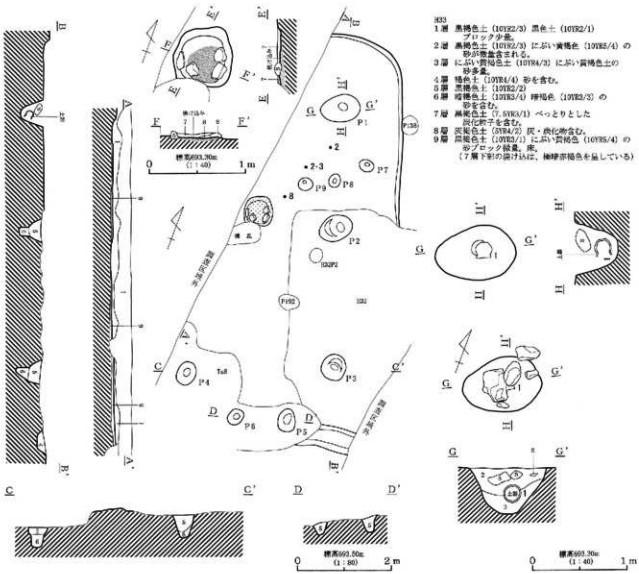
H32号住居址（2）

H33号住居址



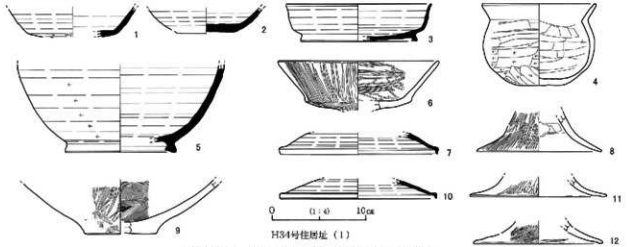
H33号住居址（1）

第45図　H32号住居址（2）・H33号住居址（1）



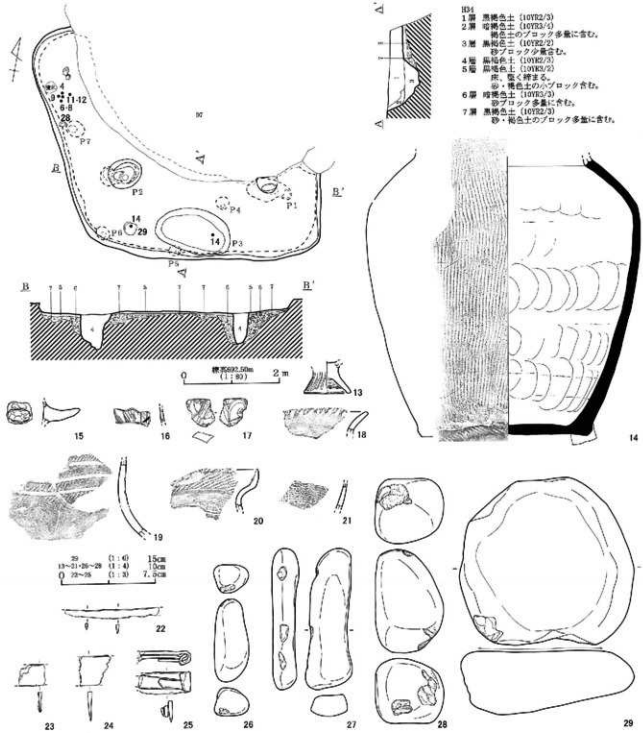
H33号住居址（2）

H34号住居址



H34号住居址（1）

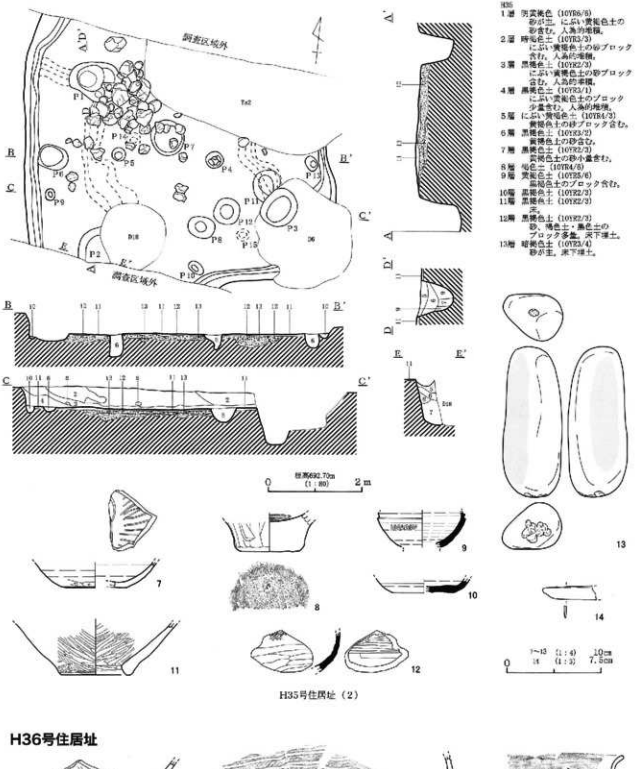
第46図　H33号住居址（2）・H34号住居址（1）



H34号住居址（2）

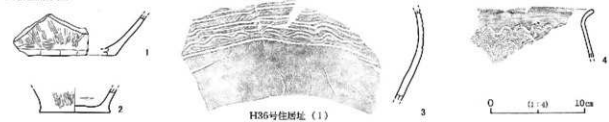
H35号住居址

第47図　H34号住居址（2）・H35号住居址（1）



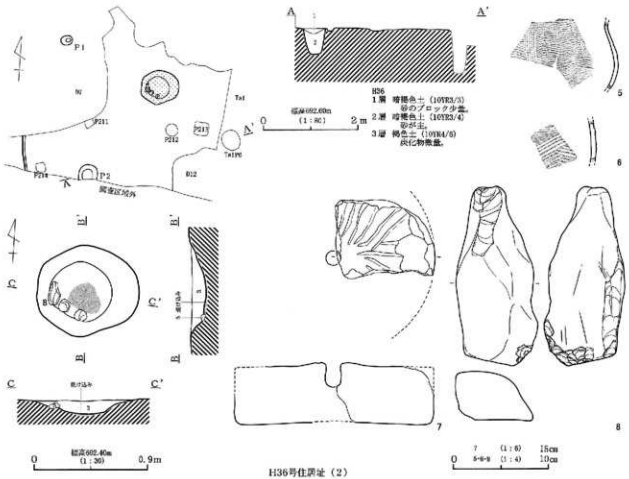
H35号住居址（2）

H36号住居址



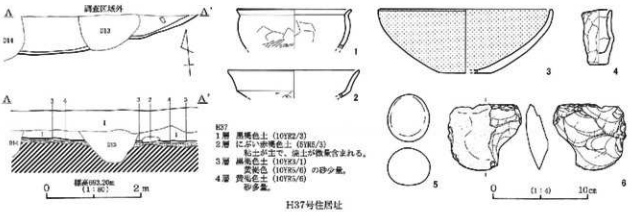
H36号住居址（1）

第48図　H35号住居址（2）・H36号住居址（1）



H36号住居址（2）

H37号住居址

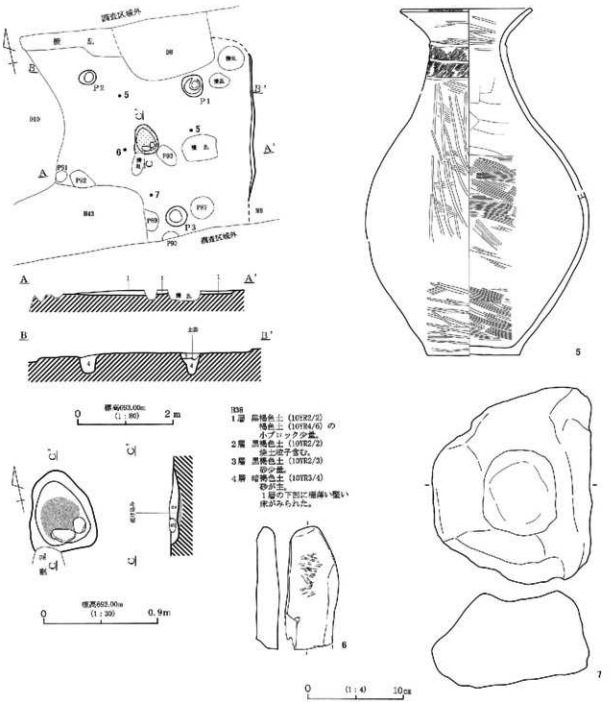


H37号住居址

H38号住居址

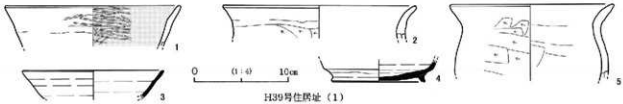
H38号住居址（1）

第49図　H36号住居址（2）・H37号住居址・H38号住居址（1）



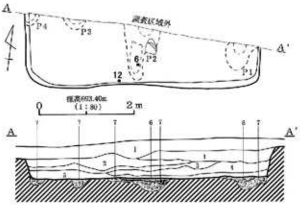
H38号住居址（2）

H39号住居址

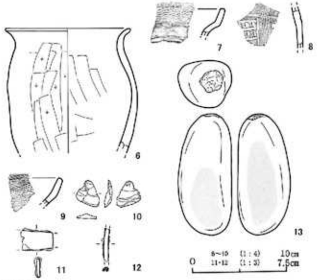


H39号住居址（1）

第50図　H38号住居址（2）・H39号住居址（1）

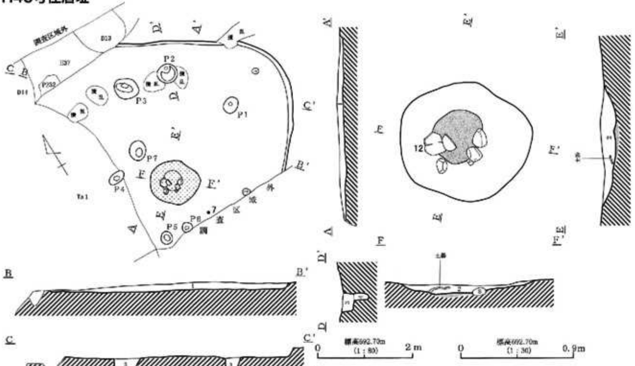


H39
1層　黒褐色土（10YR2/3）
2層　黒褐色土（10YR2/2）
3層　黒褐色土（10YR2/2）
　　砂少量ブロック少量。
4層　暗褐色土（10YR2/3）
　　砂小ブロック多量。
5層　黒褐色土（10YR2/2）
6層　暗褐色土（10YR3/4）
　　砂多量。床下埋土。
7層　暗褐色土（10YR3/3）
　　砂のブロック多量。
　　床下埋土。

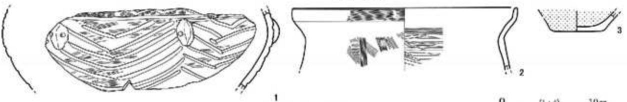


H39号住居址（2）

H40号住居址

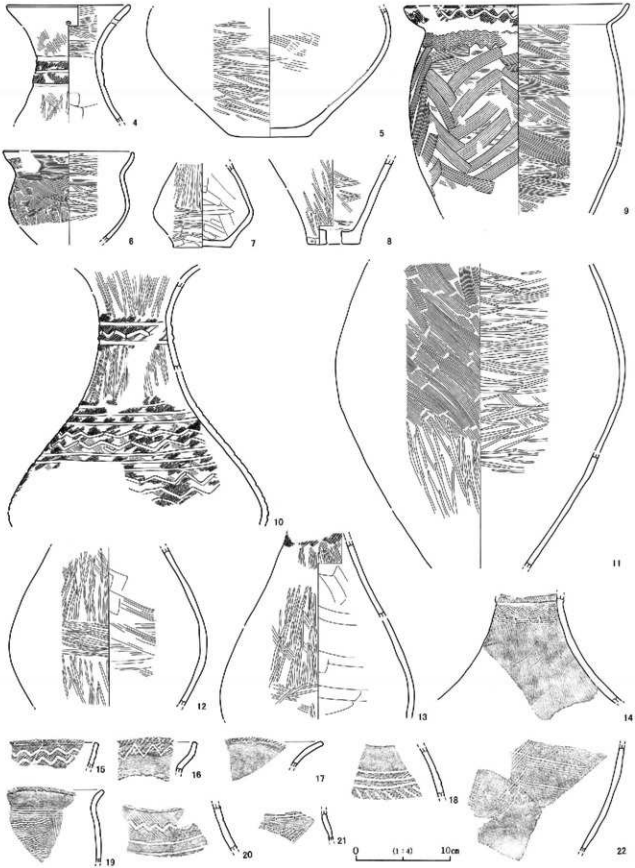


H40
1層　暗褐色土（10YR3/3）
　　褐色土粒（10YR4/6）を含む。
2層　黒褐色土（10YR3/2）
　　焼土粒子・焼土ブロック・
　　炭化物を含む。
3層　暗褐色土（10YR3/4）
　　褐色土（10YR4/4）を少量。
4層　黒褐色土（10YR2/3）

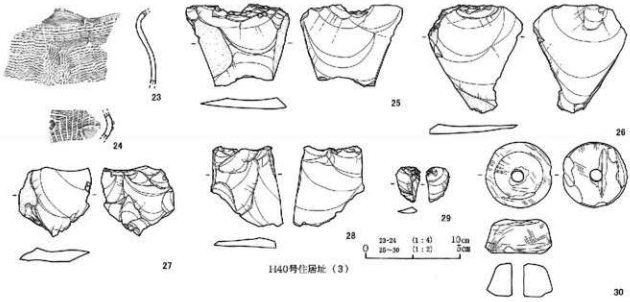


H40号住居址（1）

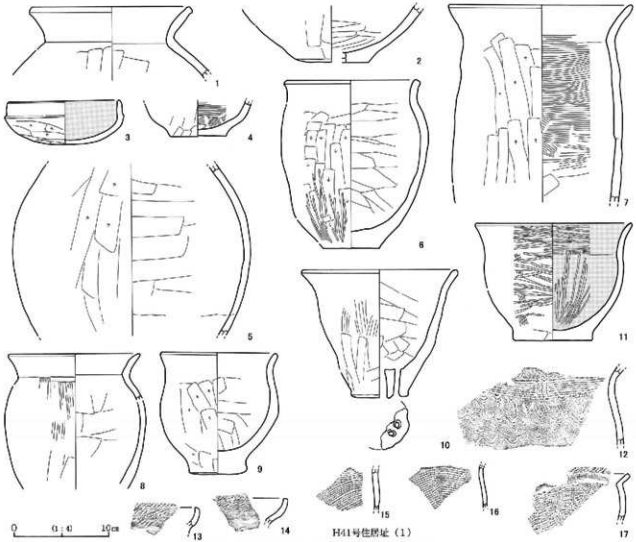
第51図　H39号住居址（2）・H40号住居址（1）



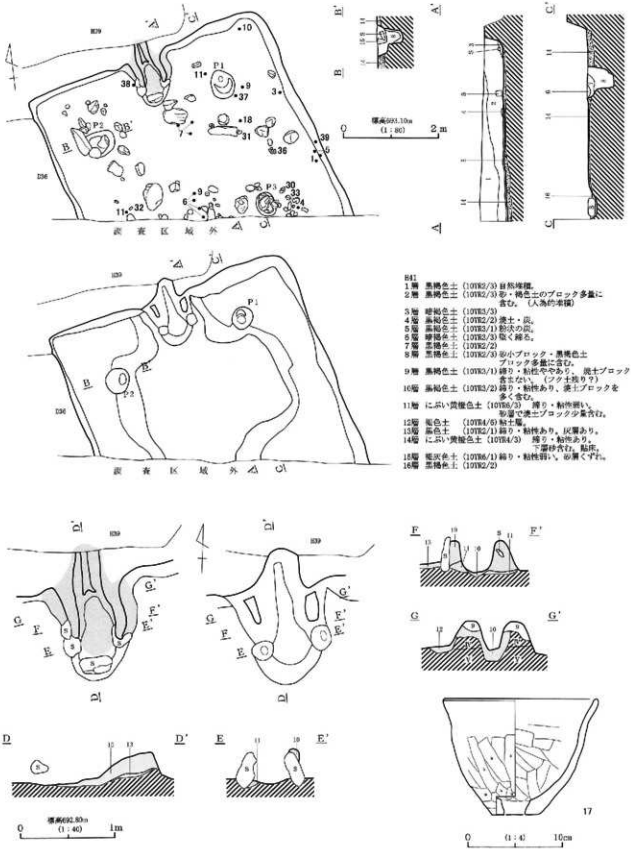
第52図　H40号住居址（2）



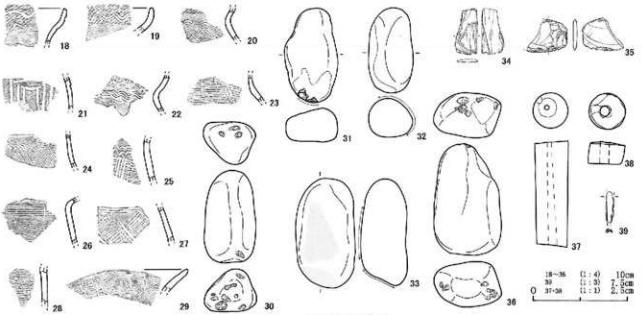
H41号住居址



第53図　H40号住居址（3）・H41号住居址（1）

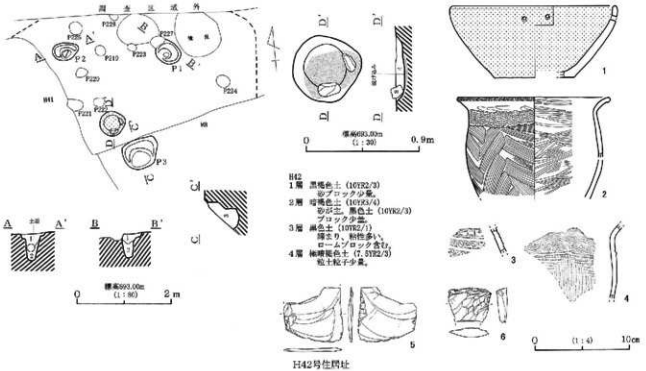


第54図 H41号住居址 (2)



H41号住居址（3）

H42号住居址

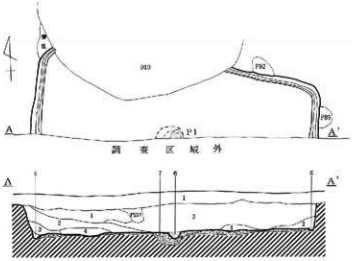


H42号住居址

H43号住居址

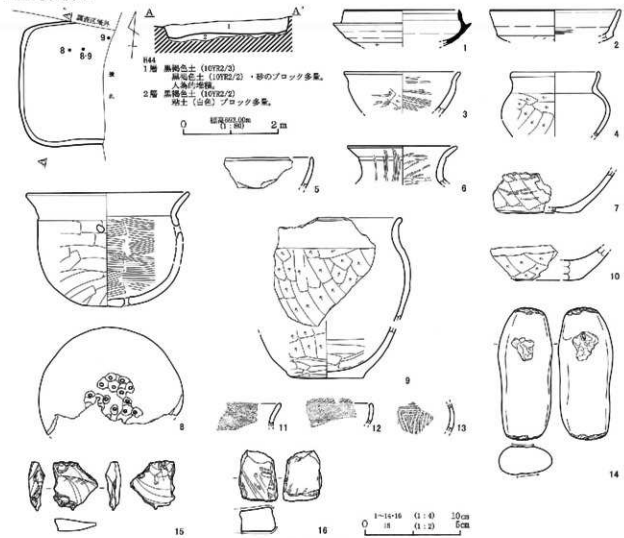
H43号住居址（1）

第55図　H41号住居址（3）・H42号住居址・H43号住居址（1）



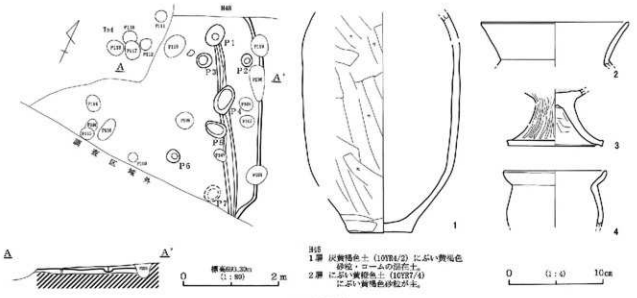
H43号住居址（2）

H44号住居址



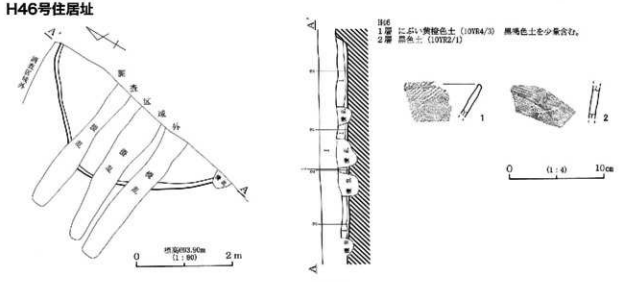
H44号住居址

第56図　H43号住居址（2）・H44号住居址



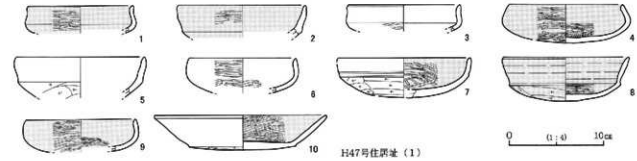
H45号住居址

H46号住居址



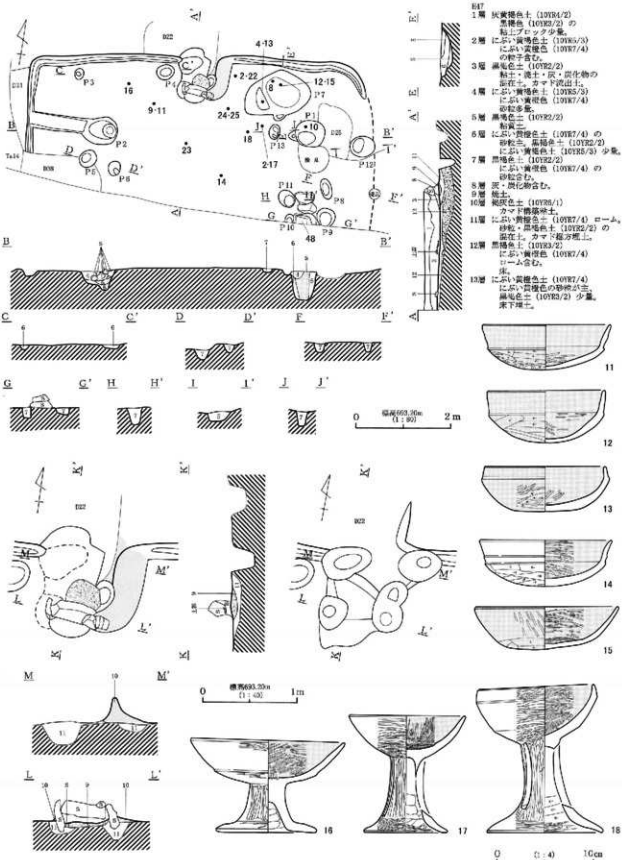
H46号住居址

H47号住居址

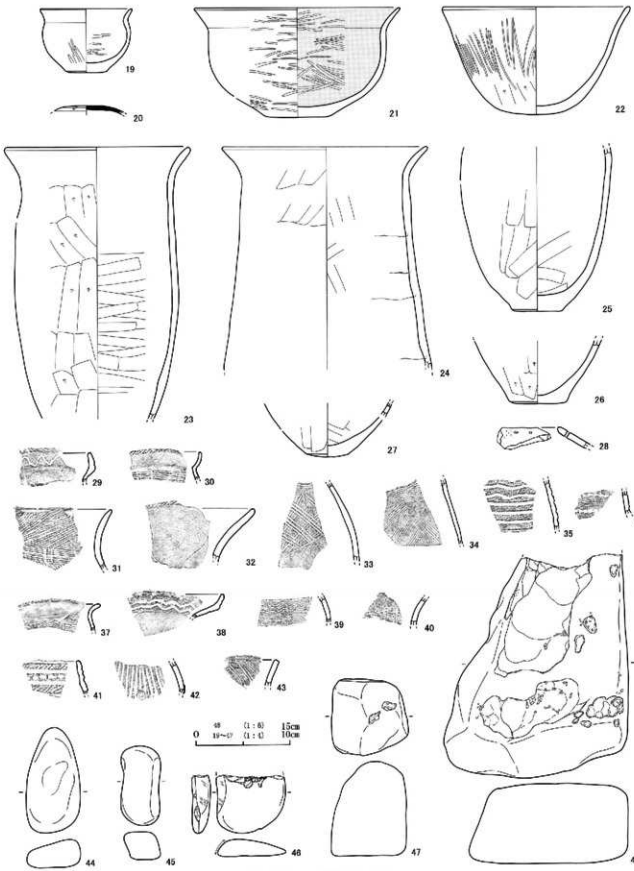


H47号住居址（1）

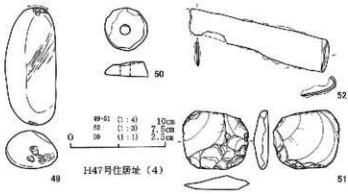
第57図　H45号住居址・H46号住居址・H47号住居址（1）

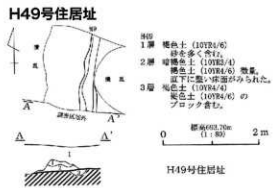


第58図　H47号住居址（2）

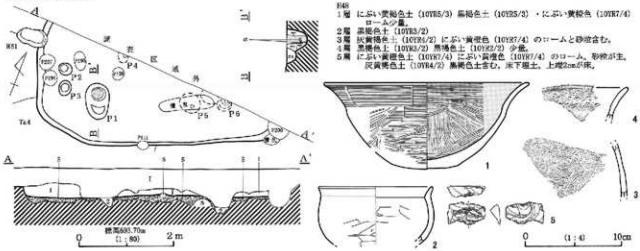


第59図　H47号住居址（3）

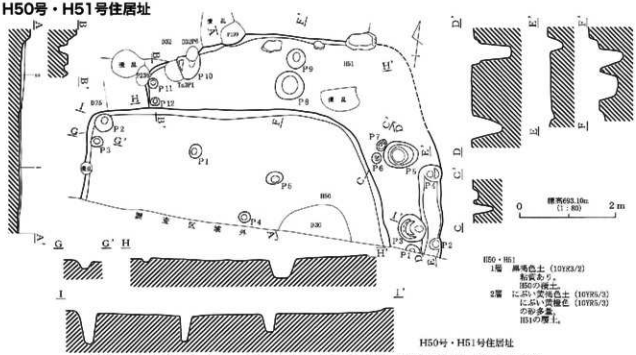




H48号住居址



H50号・H51号住居址



第60図　H47号住居址（4）・H48号住居址・H49号住居址・H50号住居址・H51号住居址

H１号住居址　Ⅶい・１・２Grにあり、H3・H4・F１に切られ、本址が一番古い。残存北壁1.86m・残存東壁1.56m・残存西壁0.76m南壁2.6m壁高は19cmを測る。主軸方位はN-16°-Eを示す。P１～P３は主柱穴で柱痕24cmを測る。南壁下に出入口施設のP４・P５、P６は貯蔵穴、北壁よりの地床炉の炉底は、焼け込む。床は堅いが薄い。遺物は、壺・甕・深鉢・鉢・手捏土器の弥生土器、土製品、石器がある。11の壺は無彩で、体部下半の稜は拓れていない。８は頸部にヘラ描横線文・ヘラ描斜走文が施文される。22の土製勾玉は、焼成前片側から穿孔されている。21の琴柱様の土製品は、焼成前片側から穿孔、ヘラナデ後ヘラミガキされ、左側穴上に拓れがみえる。垂飾であろうか。石器は敲石・凹石・台石がある。拓本13・14・18～20は中期後半栗林期で混入。本址は弥生時代後期前半古出期と思われる。

H２号住居址　Ⅶあ・い-４・５Grにあり、H15に切られH16を切る。残存東壁5.24m、検出南壁0.48m、壁高は20cmを測り、軸方位はN-35°-Eを示す。主柱穴P１～P２の柱痕は径16cm。南壁から東壁下に壁溝。床は堅く締まる。遺物には、土師器・須恵器・弥生土器・石器がある。７は須恵器坏蓋模倣の上師器坏、17は須恵黒焙TK217に該当しようか。重複激しく２・３・６・10・19～23は、混入。２はH15出土片、６はH３・H16出土片と接合。石器は敲石・台石・凹石がある。本址は９世紀後半のH15に切られ、６世紀後半～７世紀初頭のH16を切り、７・17の特徴から７世紀代に位置づけられる。

H３号住居址　Ⅶあ・い・２・３Grにあり、H１・H11・H14と重複し本址が一番新しい。規模は検出東壁2.8m南壁3.7m検出西壁2.1m、壁高は42cm、軸方位はN-10°-Eを示す。床は堅く締まる。出土遺物には、上師器・須恵器・弥生土器・石器がある。１～５～７・８・17・18は土師器坏で内面黒色処理、６・８・18が底部手持ちヘラケズリ、他は底部回転糸切りである。９・10・12・14は土師器碗、15・16は土師器皿で内面黒色処理される。17の体部外面２箇所に墨書「西○」が、18の体部外面に刻書「大井」がみられる。８・19も文字判明しない墨書が認められる。21～34は須恵器坏で底部回転糸切り後未調整である。35～38は口縁部「コ」の字の土師器武蔵甕。他に須恵器甕39～41、灰釉陶器碗がある。弥生中期後半の土器片は混入。石器は敲石・磨石がある。本址は、９世紀前半に位置づけられる。

H４号住居址　Ⅶい・９・10、Ⅶい・１Grに位置し、F１・P13に切られH１を切る。規模は検出東壁2.3m・南壁7.9m・検出西壁1.9m、壁高は35cmを測り、南壁中央に張り出し土坑がある。主軸方位は真北を示す。P１・P２は主柱穴で、P１から南壁に周仕切り溝。張り出し土坑は、床面よりやや下がって方形に張り出して、中央のP４は深さ60cm。調査範囲内にカマドはない。床はP１・P２内は堅く締まるが、壁側は軟弱である。遺物には、土師器・須恵器・弥生土器・石器がある。１～７は土師器坏で１・４が内面黒色処理される。須恵器坏蓋模倣の２・３・５・６、浅い丸底から長い口縁部が外反し口縁部と底部の境に稜を有す１がある。４は平底気味で内弯気味に緩く外反する。８は内外面ヘラミガキされる大型の土師器鉢である。９は土師器甕。石器は台石・凹み石・編物石・敲石・磨石がある。10～31は弥生中期後半の壺・甕等で34の石鏃未製品と共に混入である。本址は６世紀後半に位置づけられる。

H５号住居址　Ⅴい-10、Ⅵい-１・２Grにあり、H17を切る。検出北壁５m・検出東壁1.9m、検出西壁1.9m壁高は41cm、主軸方位はN-14°-Wを示す。カマドは北壁中央に粘土と石で構築されている。ピットは２個検出され、P１は主柱穴で、深さ65cmを測る。覆土は人為的な堆積であった。全体に堅く締まる床で、壁寄りは軟弱であった。出土遺物は、土師器・弥生土器・土製品・石器がある。１～８・13・15・17は土師器坏で、内面黒色処理されるもの1・４・13、内外面黒色処理されるもの2・６・７・15・17がある。須恵器坏蓋模倣の坏1・２・５～８・13・15、須恵器坏身模倣の坏17がある。甕（10～12・28・29・31・32）は最大径口縁部にあるものと体部にあるものがある。24・25・30は壺、９・18・19は大型の鉢、14の高坏は脚が短く内面黒色処理される。22は須恵器甕片を加工した円盤、33・34は輝石安山岩の台石とみられる。弥生時代中期後半の20・21・26・27は混入である。本址は６世紀後半に位置づけられる。

H６号住居址　Ⅵい-７・８GrにありM１・D３に切られH７・F２を切っている。残存北壁４m、検出西壁2.04m、壁高は32を測り。軸方位はN-15°-Eを示す。カマドは検出範囲にみられないが、北東角に焼土がみられた。P１の主柱穴は、柱痕径20cm、長径96cm、深さ52cmを測る。床は、堅く締まる。出土遺物は、土師器坏・甕、石器には台石、敲石がある。弥生土器は混入である。本址は出土遺物少なく不確実であるが、６世紀後半～７世紀前半であろうか。

H７号住居址　Ⅵい-７GrにありＭ１・Ｈ６に切られる。残存北壁1.8m、検出東壁0.3m壁高は４cm、付属施設は認められない。床は堅いが薄い。遺物は、弥生土器で鉢と拓本で示した甕・壺がある。鉢は口縁部に円形の突起、内外面赤彩が施される。本址は、弥生時代中期後半栗林期ととらえられよう。

H８号住居址　Ⅱい・う-５GrにありＰ188～Ｐ190に切られ、一部を撹乱で破壊されている。北壁2.9m、検出東壁0.84m、検出南壁2.2m、西壁2.9m、壁高は18cmを測り、主軸方位はN-12°-Wを示す。カマドは北壁の中央に粘土・粘質土と石により構築されている。ピットは袖部に関するものであろう。西壁から南壁下に、壁溝が認められた。床は堅く締まるが薄い。遺物は土師器・須恵器・弥生上器・鉄器・石器がある。１・５は土師器小型の甕で、１は頸部「コ」の字気味の小型「武蔵甕」である。２・３は土師器坏で底部ヘラケズリ、６は土師器鉢。４・７・８・10・12・13は須恵器坏で底部ヘラケズりされる。15は鍛鉄、11の石包」は混入である。本址は、８世紀後半に位置づけられる。

H９号住居址　Ⅵあ-６GrにありＭ２に切られる。検出東壁0.9m、残存南壁2.54m、壁高は14cmを測る。ピットは南壁寄りに２個、深さはＰ１が40cm、Ｐ２が12cmで出入り口の施設であろうか。東側の床は堅いが、ピット付近は軟弱である。出土遺物は、弥生土器と石鏃未製品である。５・８の壺は無彩である。２は深鉢の台部であろう。本址は、弥生時代中期後半栗林期ととらえられよう。

H10号住居址　Ⅵあ-４GrにありＰ215に切られ西壁を撹乱で破壊される。検出東壁0.6m、残存南壁3.6m、壁高は18cmを測る。床は堅く締まるが、東側壁寄りは軟弱であった。出土遺物は、土師器・弥生土器である。弥生土器は混入である。本址は、遺物極少であるが古墳時代後期６世紀代か？

H11号住居址　Ⅶあ・い-２・３GrにありⅡ３・H14・H15・H16・Ｐ164に切られ本址が一番古い。残存東壁2.04m、壁高は11cmを測り、主軸方位はN-２°-Wを示す。ピットは15個、Ｐ１～Ｐ４・Ｐ14・Ｐ15が床面、他は床面下から検出。Ｐ１～Ｐ４は主柱穴で桁行き4.4m、梁行き2.4・2.5mの入口側が開く台形気味に配置される。深さ29cm～49cm。東壁下に周溝がある。掘方から旧住居が確認され、Ｐ３・Ｐ４と出入り口施設をの南半分が拡張されている。主柱穴Ｐ３・Ｐ４の内側には、旧入口施設Ｐ８・Ｐ10や壁溝がある。炉はH14に破壊されている。出土遺物は、弥生十器と石器である。17は石質硬質砂岩の未製品磨製石鏃である。これら遺物より本址は、弥生時代中期後半栗林期に位置づけられる。

H12号住居址　Ⅳあ・い-９・10Grにあり、H19・Ｆ３に切られている。検出東壁2.2m南壁4.7m検出西壁3.1m壁高は61cmを測り、軸方位はN-７°-Wを示す。主柱穴Ｐ１は22cm・Ｐ２は30cmの柱痕が確認できた。南壁下に出入口施設のＰ３がある。出土遺物は土師器・石器がある。弥生中期土器・黒曜石打製石鏃は混入である。１・３は須恵器坏蓋模倣の土師器坏、３は内面黒色処理される。4・7は鉢、8は甑、10は壺である。11・12は長胴の甕で12の最大径は胴部、11は口縁部にある。石器は砥石15、多孔質安山岩の凹石14・24、磨石13、敲石23がある。本址は6世紀後半～7世紀初頭に位置づけられる。

H13号住居址　Ⅳい-９・10Grにあり、北壁4.6m・検出東壁0.7m・検出西壁1.5m、壁高は60cm、主軸方位はN-15°-Eを示す。カマドは北壁の中央に粘土と石により構築されている。袖部は地山を掘り残し芯材としている。Ｐ１は主柱穴で、柱痕は径16cm。垂木材の炭化材が床面直上の3層(0～10cm)から多量に出土し、床面には被熱による焼け込みがみられた。西北角の状況から、入母屋の上屋が想定される。炭化材上面に、焼失後廃棄された大小角礫が多量にみられた。床は軟弱で検出が困難であった。遺物は、3層内・礫下の床面から出上した。27の甑のみ炭化材の上面に接していた。出土遺物は、上師器・須恵器・鉄器・臼玉・弥生十器がある。11～13・17は土師器坏で、11は深い半球状で内面ヘラミガキされる。11・17内斜口縁を持つ。16の高坏は丁寧な放射状のヘラミガキが施されている。23は「く」の字状口縁の土師器甕で、体部に最大径がある。14・15の土師器壺は、外面よくヘラミガキされる。26は底部全開、27は2孔の大型土師器甑である。27は簀の子落下防止の機能であろうか、底部を全開せずに底部中央を帯状に幅８mm残している。18の須恵器坏は底部丸く仕上げられ、回転ヘラケズり調整、口縁端部極短く外反する。TK47型式に該当しよう。21は有頭鏃身三角形造込平で孔を有する鉄鏃である。22は滑石の臼玉。１～10・14の弥生十器は混入。本址は５世紀後半に位置づけられる。

H14号住居址　Ⅵあ・い-３GrにありH15・H3に切られH16を切っている。残存南壁3.28m、検出西壁3.8m、壁高は38cm、軸方位N-16°-W。Ｐ１・Ｐ２の主柱穴、柱痕径20cm。南・西壁下には壁溝が巡る。

出土遺物は、土師器・須恵器・石器がある。3の土師器坏・弥生土器・打製石斧・打製石鏃は混入である。1・4は内面黒色処理される須恵器坏蓋模倣の土師器坏、17は須恵器蓋でTK217型式に該当しようか。10は素焼きの紡錘車、12は石英安産岩の凹石である。本址は、7世紀代と思われる。

H15号住居址　Ⅶあ・い-3・4 Grにあり、H2・H11・H14・H16を切る。確認難しく検出状況は良好でない。規模は残存南壁3ｍ検出西壁2.8m壁高は土層断面で50cm。カマドは検出範囲にはなかった。遺物は、土師器・須恵器・石器がある。3は内面黒色処理される土師器坏で、墨書「上」が認められる。4・6は土師器碗で高台が付されよう。4は内面黒色処理される。5は土師器ロクロ甕、9は頸部「コ」の字「武蔵甕」である。10は底部回転糸切りの須恵器坏、灰釉陶器皿である。2の須恵器坏底部片の見込部に磨耗が見られ、転用硯か？1は磨石である。本址は9世紀後半に位置づけられる。

H16号住居址　Ⅶい-4・5 Grにあり、H2・H14・H15・P229・P64に切られH11を切っている。残存東壁3.68m、壁高は32cmを測る。P2は、主柱穴か？東壁下には周溝が巡る。出土遺物は、土師器・須恵器・石器がある。重複が激しく、H15との重複部から出土した1の土師器坏1・6の灰釉陶器碗は、混入である。9～19の弥生土器、20の小型扁平片刃磨製石斧、22の黒曜石剥片も混入である。2・4は土師器坏、4は内面黒色処理される。7の須恵器坏身は小片であるがTK209に該当しようか。21の臼玉は、土層断面図ＢＢ′8層から出土した。23の磨石、24の砥石は床面上から出土した。本址は、遺物の混入が激しく不確実ではあるが、6世紀中葉～7世紀初頭と思われる。

H17号住居址　Ⅵあ・い-2・3 Grにあり、H5に切られH18を切る。検出北壁2.7m・検出東壁4.5m検出南壁1.0m検出西壁3.9m壁高は42cmを測る。主軸方位はN-10°-Wを示す。カマドは北壁中央に袖部分地山削りだし、粘土で構築される。P1～P4は主柱穴で、柱痕は径28cm、桁行き・梁行き3.8m。カマド東脇のP5は深さ52cmの貯蔵穴、堤帯が僅かに盛り上がる。床は堅く締まる。遺物は、土師器・須恵器・臼玉で、弥生土器は混入。1～4、7～10は土師器坏で、半球状を呈する1・10・21と内斜口縁の2・3・7～9がある。よくヘラミガキされる。1・9・10はヘラケズリ。15は小型壺か、頸部強い「く」の字で内外面ヘラミガキ。17は外面ヘラミガキの鉢、5・6は底部から大きく開く土師器壺であろう。20の甕は内外面ヘラミガキされ、口縁端部は弱く内弯する。須恵器には、22・23の無蓋高坏がある。23は坏部が内弯気味に基部より外傾し、弱く括れ外傾する。口縁端部は丸い。上に2条の稜ドに1条の稜で区画され、櫛描波状文が施文される。基部には脚部との接合補強用線刻が廻える。22は2条の稜を持ち緩く外反気味に立ち上がる。口縁端部は細く窄い。22は猿投編年1期第5小期（東山11号窯）に比定されよう。23はTK47型式に該当しよう。滑石の石製模造品臼玉が7点（40～46）カマド西袖部の粘土内から出土。本址は5世紀後半（5世紀第4四半期）に位置づけられる。

H18号住居址　Vあ・い-2・3 GrにありH17に切られ、検出北壁0.5m、検出西壁4.4m、壁高は34cm、主軸方位はN-20°-Eを示す。H17掘方下部の地山の焼け込みは、本址のカマド火床か。主柱穴P1・P2は深さ70cm・80cm、梁行き3.4mを測る。間仕切り溝が西壁から床中央に2本検出。西壁ドに壁溝。遺物は、土師器・石器で、1は内外面よくヘラミガキされた有段口縁の高坏、2は浅い内斜口縁の坏、3は小型甕。4は安山岩製の凹石。本址は、5世紀後半（5世紀第3四半期）に位置づけられる。

H19号住居址　Vあ・い-8・9 Ｇｒにあり、H12・H20を切る。検出東壁1.0m、南壁3.4m、検出西壁2.8m、壁高は24cmを測る。床は堅く締まる。遺物は、土師器・石器・石製品がある。弥生土器・12の石鏃は、混入である。1・2は内外面ミガキがみられる壺、11は小型の甕である。13は滑石製の紡錘車である。本址は、僅かな遺物で不確実であるが、7世紀代であろうか。

H20号住居址　Vあ・い-7・8 GrにありH19・H21・P21に切られる。残存東壁1.9m、残存西壁2.7m壁高は28cm、長軸方位はN-3°-Wを示す。主柱穴P1・P2は、深さ58cm・62cm、梁行き2.2m。床面中央北寄りの焼け込みは地床炉か？遺物は、土器・鉄器・石器がある。弥生時代中期栗林期土器片は混入である。2～4・9・12・14・17・18・21は甕である。9は小型の台付甕で頸部に櫛描簾状文、口縁部と胴部に櫛描波状文を施文する。2も頸部に櫛描簾状文、口縁部と胴部に櫛描波状文が施文される。1・5・6・8は壺の口縁部・底部、5・6は赤彩される。22は、坏部が深く見込部付近から屈曲して直線的に伸びる口縁部、脚部は端部がやや内弯し3個の円形透かしがある東海地方系譜の高坏と考えられる。

7は高坏であろうか。10は刀子片、11は上・下面に敲打痕、正面に条痕がみられ、敲石と砥石の機能を持つ。本址は、弥生時代後期後半箱清水期終末に位置づけられる。

H21号住居址　V い・う-6・7 Grにあり、H20を切る。検出東壁2.5m・南壁3.9m検出西壁2.2m、壁高は48cmを測る。南壁下に出入口施設のP1、床面は堅く締まる。大小角礫が覆土3層焼土塊上面・4層上面・地山の砂を多量に含む5層上面に見られた。3層～5層は人為的な堆積。遺物は、22が南壁に接するH20号住居址覆土、56が56層、55・57・59が7層、38・58がP1から出土し、他は2層下部・3～5層から出土した。5層は床面に接しており、本址廃絶後間もない時期に4・5層埋土と同時期に廃棄されたのであろう。遺物は、土師器(1～11・13・14・16～22・28～39・45・47～51)、砥石(46)、台石(52～56)、敲石(57・58)がある。弥生土器は混入。1～11・13・14は土師器坏で、半球状で口縁端部が内斜するもの(1・3・5・7～10)、半球状で口縁部が緩く外反する(2・11)・口縁部がやや内弯する(4・6)がある。8を除きいずれも器高が高い。13には焼成後の穿孔がみられる。16～21・22は土師器高坏で、坏部下端に明確な段がある16・22、坏部下端に稜がある17・19・20・21、坏部下端の稜があいまいなもの18がある。19・22の脚部はいずれも円錐形の長脚を持つ。22の坏部内面底部は、「十」字状にヘラミガキされる。胴部外面にヘラミガキされるもの(28・29・34・37・39・47・49)を壺、ヘラケズリされるもの(30・31・33・35・36・48・50・51)を甕としたが、明確な分類基準によるものではない。壺34は有段口縁で胴部中央より下部に最大径。他の壺も球胴である。28の底部外面には、敲打による凹みがある。甕は胴部中央付近に最大径がある球胴甕35・48、ラグビーボールに近い形態の36がある。小型甕は口径と器高が等しい33、口縁部肥厚し頸部から強く外反する51がみられる。32は底部付近がヘラケズリされる鉢。これらの土師器は、高坏が富沢古墳時代中期編年(富沢1999)の4～5段階、坏が4段階、壺は4段階、甕は3～4段階に併行しよう。住居址の北半部が調査区域外にあり、カマドの存否等不明であるがこれらの遺物と、出土状況から本址は5世紀後半の所産とみられる。

H22号住居址　V い・う-6 Grにあり、F4・P84・P85に切られる。北壁3.8m・検出東壁3.2m・検出南壁1.0m、壁高20cmを測る。主軸方位はN-35°-Wを示す。中央の炉は4個の炉縁石を持つ地床炉である。長径46cm短径40cm深さ4cmの楕円形で、5cm焼け込んでいる。主柱穴P1～P3の柱痕は径20～24cm、深さはP1が34cm・P2が42cm・P3が42cmを測る。2層に炭化材・炭化粒子を多く含み、堅く締まる床面に炭化材がみられた。遺物は、床面や2層内から出土した。壺(4～16)、甕(17～24・6)、高坏(27・28)、甑(29・30)、鉢(25・31～34)、磨製石斧(56)、打製石鏃(52)、凹石(59・65)、敲石(51・64)、磨石(58)、台石(57・60・61)、磨製石鏃の原材(53)、石鏃未製品(55)、二次加工ある剥片(54)、不明鉄製品が出土した。壺は、赤彩が8のみ。受け口状の口縁部が多い。文様は口唇部・口縁部と頸部に集中する。口唇部に縄文が、口縁部に縄文と1本か2本のヘラ描波状文が。頸部の文様は櫛描波状文のみ、多段の横櫛描条線文のみ、ヘラ描沈線と縄文・櫛描波状文・簾状文、縄文・ヘラの刺突列・ヘラ状工具の刺突列・円形の貼付文、ヘラ描平行沈線間にヘラ描斜走文、ヘラ描平行沈線間にヘラ描波状文がみられ、組み合わせが多様である。甕は、受け口状の口縁部と短く外反する口縁部がある。口唇部に縄文や押捺がみられる。受け口状の口縁部は、縄文後ヘラ描波状文が施される。外反する口縁部には、頸部に櫛描波状文が施される。大型の17は無紋である。体部には櫛描斜走文が格子目状や縦の羽状に施される。櫛描波状文は少数である。高坏は2点とも赤彩され、口縁部直線的に口径小さく開き坏身が浅い。甑はいずれも鉢形で単孔である。30の口唇部には縄文が施される。鉢は、31・32が口縁部受け口状で赤彩される。共に口縁部に突起が貼付され31の突起は穿孔され、32の頸部には一対の穿孔が見られる。33は粗いヘラミガキの片口付、34はよくヘラミガキされ口縁部短く立ち上がる。25は内外面赤彩される。本址は弥生時代中期後半栗林期に位置づけられる。

H23号住居址　V い-3・4 GrにありH25・I126・I127に切られる。残存西壁1.86m壁高は12cm主軸方位はN-25°-Wを示す。P1東の炉は壺底部・甕胴部片の土器敷き炉である。10cm掘り込み3cm焼土の堆積がある。主柱穴P1・P2はP1の柱痕径20cm、深さはP1が50cm・P2が78cmを測る。2個の柱穴と炉の位置から桁行きの柱穴は、北壁寄りにもう1個想定できる。床面堅く締まる。遺物は弥生土器・石器がある。1は内外面赤彩の鉢、2・3は壺底部、4・5は甕。5は口径に最大径、口縁部短く外反。口

唇部に縄文、頸部に櫛描波状文、体部に縦の櫛描波状文。炉体の12・13の甕は櫛格子状に描斜走文。7は輝石安山岩の台石。本址は僅かな遺物であるが弥生時代中期後半栗林期に位置づけられる。

H24号住居址 Vい・う-5 GrにありP52・P28に切られH25を切る。北壁3.9m・検出東壁3.64m・検出西壁2.8m、壁高は25cm。主軸方位はN-6°-Wを示す。カマドは北壁の中央に粘土と石により構築され、火床部に支脚石がある。床面は堅く締まり、床下掘方は浅い。遺物は、土師器甕（7・8）、須恵器坏（1～4）・甕6、台石（12）、凹石（13）がある。弥生土器は混入である。土師器甕は「コ」字気味の口縁部で、8は最大径が体部にある。7は口径と体部最大径が等しい。須恵器坏は3点とも底部回転糸切り離しである。これら遺物より本址は8世紀後半に位置づけられる。

H25号住居址 Vい・う-4・5 GrにありH24に切られH23・H26を切る。北壁5.5m・検出東壁3.46m・検出西壁1.8m壁高は43cm主軸方位はN-4°-Wを示す。カマドは北壁の中央に粘土と石により構築される。P1～P2は主柱穴で柱痕は径24cm、梁行き3.2mを測る。壁下には壁溝が巡る。床は、堅く締まる。遺物は、土師器坏（1～3・5～7）・鉢（8）・高坏（4）・甕（11～14・17・18）、須恵器蓋（15）・坏（19）・坏蓋（16）、磨石（32・34）、砥石（33）がある。31の磨製石鏃原材の31と弥生土器は混入。土師器坏は、ヘラケズリの底部からやや内弯気味に立ち上がる1・5、半球状の2・3・7がある。1・3・5・7は黒色処理。土師器甕9は口縁部に最大径を有し、体部砲弾状で外面ヘラケズリされる。11は武蔵甕である。19の須恵器坏は底部ヘラケズリされる。内斜口縁の土師器坏、猿投編年Ⅱ期（東山44号窯）とみられる須恵器坏蓋16は混入品である。本址は8世紀前半に位置づけられる。

H26号住居址 Vい・う-3 GrにありH25・P54に切られ、H23を切っている。残存北壁4.14m・検出東壁1.96m壁高は22cm主軸方位はN-8°-Eを示す。カマドは北壁の中央に粘土と石により構築され、火床部に支脚石がある。P1～P2は主柱穴で、P1の柱痕は径16cm、梁行き2.4mを測る。床面は堅く締まる。人為的な堆積の焼土ブロック小量を含む覆土2層内に、5～60cmの大小角礫が多量にみられた。この礫の多くは床面を破壊するほどくい込む。遺物は、13・14が礫の下、11が礫上と掘方出土片が接合、12がカマド内と掘方出土片が接合、6・10が床下掘方、23～29はまとまって北壁下から出土した。遺物は、土師器坏（2・6・8・9・10）・鉢（1）・甕（3～5・7・11～13）・甑（14）、編み物石（23～29）が出土した。弥生土器は混入である。坏9・10は須恵器坏蓋模倣のもので、2は半球状を呈し内外面ヘラミガキされる。6は底部と口縁部境から口縁部が短く外反し、内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリ後ヘラミガキされる。8は浅い半球状で口縁部短くやや内弯する。11・12は長胴甕で体部に最大径があり外面ヘラケズリされる。内面11はヘラナデ12はハケメ調整される。14は内面よくヘラミガキされ甑とみられる。25は磨石としての使用痕も窺える。本址は7世紀代に位置づけられる。

H27号住居址 Vい-2・3 GrにありP44・P54・P60に切られ、H23・M6を切っている。検出東壁2.1m・南壁4.8m・検出西壁1.84m、壁高は45cm。主柱穴P1の柱痕径12cm深さ82cm・P2の柱痕径20cm深さ66cm、梁行き2.7mを測る。P1とP2から南壁に向けた間仕切り溝と直角的な位置にも溝がある。壁下に壁溝が巡る。床は堅く締まる。西側の床面から垂木材と見られる炭化材が出土し、3層は、炭化材・焼土ブロックを含む。遺物は、土師器坏（2・3・7）・甕（5）、須恵器坏（1）、敲石（14・15）、台石（22）、刀子（16）がある。弥生土器、剥片、磨製石鏃（19）、磨製石鏃未製品（20）、打製石鏃未製品（21）は混入である。2・3・7は、須恵器坏蓋模倣の坏で、3は内面黒色処理される。1はTK10型式に該当しよう。遺物は少ないが、本址は6世紀前半に位置づけられる。

H28号住居址 Ⅳう-9・10 GrにありH30・H31を切る。北壁5.4m・検出東壁2.88m・検出西壁0.8m、壁高は46cm、主軸方位はN-12°-Wを示す。カマドは北壁中央に粘土と石で構築されている。東壁に旧カマドがあった。ピットは10基で、P3・P9・P10が床下から検出された。土柱穴の掘方は大きく、P1は柱痕径24cm深さ64cm、P2は柱痕径32cm深さ60cm、P2の上端に上面平らな礫があった。壁柱穴P4～P8は、遺構上端からの深さ80～91cmを測る。覆土1・2層は、人為的堆積とみられる。床面は全体に堅く締まる。遺物は土師器坏（19・20）・甕（17・21・22・25・32・33）、須恵器坏（4～15・23）・高台坏（16・18・24）・盤（29・30）・甕（26・27）、紡錘車の軸（42）、刀子（43）、磨・敲石（41）、石製円盤（37）、石製模造品円玉（38）がある。弥生土器・黒曜石の剥片・2の土師器内斜口縁坏・3

の内外面ヘラミガキされた上師器鉢は、混入である。土師器坏は底部ヘラ調整、外面ヘラケズリ内面放射状にヘラミガキされる。須恵器坏底部は、4・6・7・10～15・23がヘラケズリ・ヘラナデ、5が回転糸切り後外周ヘラケズリ、8が回転糸切りで、ヘラ調整が主体である。須恵器高台坏底部は、18・24が回転ヘラケズリ、16がヘラケズリ後高台を付ける。上師器甕は、武蔵甕（17・25）、ロクロ甕（21・22）がある。本址は、8世紀代（第3四半期）に位置づけられる。

H29号住居址　Ⅳい-10Grにあり H30・H31を切る。検出東壁1.64m・南壁2.76m、検出西壁1.48m 壁高は40cm。ピットは2個検出できたが主柱穴は特定できない。床は平坦で、やや軟弱。遺物は、土師器坏（1）・甕（6）・鉢（7）、須恵器坏（2～5）、石製品。須恵器坏身模倣の土師器坏は、混入である。Iは内面黒色処理される。須恵器坏は、4点とも底部に回転糸切り痕が認められる。6は土師器甕で頸部が「く」の字に屈曲する「武蔵甕」である。本址は、8世紀後半に位置づけられる。

H30号住居址（H31号住居址）　Ⅳい・う-8～10Grにあり確認時2軒としたが、土層断面や床面・柱穴の位置から単独住居とした。H28・H29・H34・D5・D7に切られる。残存南壁9.0m・検出西壁4.7m壁高は50cmを測る。ピットは8個、主柱穴P1・P2は柱穴底面径はP1が20cm・P2が25cm。P6は短辺が極短い長方形の掘方で、板状のものが差し込まれていたか？深さ38cmを測る。P2から西壁に間仕切り溝がある。遺物は、土師器坏（1～5・17・18）・高坏（8・10～13・15・22）・甕（14）・鉢（21）、須恵器坏蓋（9）・坏（有蓋高坏？7）、鉄器（33）、磨石（23）、敲石（24～27）、滑石製模造品（28～31）がある。弥生土器・弥生土器加工の円盤・黒曜石の剥片・須恵器（6・19）は混入。1～5・17・18の坏は、半球状で口縁端部が内斜し深い。いわゆる屈折脚高坏10・13の脚は、短脚化し脚中央部の膨れが顕著。これらは、古墳時代中期編年（冨沢1999）の4～5段階に併行する。7の須恵器坏は、断面三角形のごく短い受部から直線的に立ち上がる。口縁端部は平面を呈す。有蓋高坏か。9の須恵器坏蓋は、わずかな稜をみせ口縁部端部に内傾する狭小な凹面がある。いづれも猿投編年I期第5小期（東山11号窯）に比定されるように思われる。28・29は剣形模造品で、両面とも鋭なく板状で二孔を有すが、28は一孔が柄部から離れて穿たれている。30・31の勾玉模造品は、30は丸みを持ち形も整っている。31は扁平板状で擦痕が残る。一方穿孔である。本址は5世紀後半に位置づけられる。

H32号住居址　Iこ-4・5Grにあり、P192に切られ南側は攪乱等で壊されていた。北壁3.2m・検出東壁1.5m・検出西壁3.1m、壁高は10cm。主軸方位はN-10°-Wを示す。カマドは北壁中央に粘土と石で構築されている。ピットは主柱穴2基検出され、深さP1が24cm・P2が22cm、梁行き2.4mを測る。床面は全体に堅く締まる。出土遺物は、土師器・須恵器・石器がある。弥生土器は混入である。1は土師器甕で「武蔵甕」、2は須恵器坏、3・12　須恵器甕である。11は敲石または自然の形態を利用した打製石斧であろうか。10は器種不明鉄器。本址は不確実であるが、8世紀後半であろうか。

H33号住居址　Iけ・こ-5・6、Ⅱあ-5・6GrにありH32・Ta8・P138・P192に切られている。検出北壁1.3m・検出東壁3.7m・検出南壁1.2m北壁～南壁長は8.8m、壁高は16cm。主軸方位はN-15°-W。4個の炉縁石の地床炉が中央北寄りにある。南北径60cm東西径60cm深さ4cmの楕円形で、5cm焼け込む。ピットは9個検出され、主柱穴P1～P4が桁行きに3本配置され、柱間2.6mと2.8m。深さはP1が48cm、P2が68cm、P3が62cm、P4が80cm。南壁中央下に、出入口施設P5・P6が、南壁下に周溝がある。P1内の大小礫下から1の甕（台付甕か）が出土した。床面は攪乱部分を除き、全体に堅く締まる。遺物は、壺（5・8・14・19・20）、甕（1～3・15～18）、高坏（4・6）、鉢（7）が出土した。1は台付甕か、受け口状の口縁部に、縄文後ヘラ描山形文・5個の円形貼付文が付される。体部に5単位のヘラ描連続「コ」字文が外側から施文され、各単位境に5個の円形貼付文がある。最終の「コ」字内はヘラ描山形文を充たす。2は底径が大きく鉢ともいえる。口唇部に縄文が施文され、口縁部短く外反する。頸部に5本の櫛描簾状文後体部に櫛描斜走文が縦羽状に施される。3は口唇部に縄文口縁部短く外反する。頸部に4本の櫛描簾状文施文後体部に外側から施文のヘラ描連続「コ」字文後櫛描波状文、最終の「コ」字内は直線文を充たす。高坏は2点とも赤彩され、4は口縁端部直線的に大きく開く。6は口縁部に突起が付く。本址は弥生時代中期後半栗林期に位置づけられる。

H34号住居址　Ⅳい・う-7・8GrにありD7に切られ、H30・H36・D40を切っている。検出北壁0.9m

・検出東壁1.4m・南壁4.8m・西壁4.0m、壁高は26cm。ピット7個検出、主柱穴P1～P2は梁行き3mを測る。南壁中央下のP3は、出入口施設であろうか。床はほぼ平坦で堅く締まる。遺物は、土師器甕（4）、須恵器坏（1・2）・高台坏（3）・蓋（7・10）・壺（5）・甕（14）、鉄器（22～25）、敲石（26～28）、台石（29）がある。坏部下端に稜がある6・脚部がラッパ状に開く8～12の土師器高坏、9の土師器甕、13の弥生台付甕等は混入。4は外面ヘラケズリの小型の甕。1と3の底部はヘラケズリ、2は回転糸切りである。16の器種不明確な土師器片外面から剥れ口にかけて、文字の一部が墨書される。22・23は刀子、24は鎌であろう。25は3点の鉄器にみえるが、幅広と狭いもの2点である。棟と刃部が確認でき刀子であろう。本址は、8世紀後半に位置づけられる。

H35号住居址　Vあ・い－5Grにあり、Ta2・D6・D18に切られる。検出南壁1m・検出東壁1.3m・検出西壁4.9m、壁高は44cm。「山がり屋」の平面形態か？ピットは15個、主柱穴はP1～P3で、深さはP1が74cm、P2が92cm、P3が73cm。P4～P6・P13が中央に東西直線的に配される。壁下に壁溝が巡る。床は堅く締まる。床に接して10～50cmの礫50個以上がみられ、覆土は人為的堆積である。遺物は土師器坏（7）・甕（8）・甑（11）、須恵器坏（10）・高坏（9）、敲石（13）、刀子（14）がある。本址は、8世紀後半に位置づけられよう。

H36号住居址　Ⅳう－6・7Grにあり、Ta1・D7・D22・P211～P214に切られる。規模は残存南北長3.5m・残存東西長4.1m、壁高は6cmを測る。主軸方位はN-13°-Wを示す。主柱穴のP1は径24cm深さ54cm、P2は径40cm深さ56cmを測る。床はほぼ平坦で薄く堅い。3個の礫を配した地床炉の炉底には、焼け込みが見られる。遺物は、壺（1・3）・甕（2・4～6）、敲石（8）がある。石臼（下臼）は混入である。本址は、弥生時代中期後半栗林期ととらえられよう。

H37号住居址　Ⅳう－4Grにあり、Ta1・D13・D14に切られ、H40を切る。南壁付近一部の検出で、検出南壁3.9m、壁高は13cmを測る。床は平坦で軟弱である。カマド等付属施設は不明である。遺物は、土師器坏（1・2）・手捏土器、弥生土器鉢・台器がある。本址は、古墳時代後期であろう。

H38号住居址　Ⅲう・え－8・9Grにあり、H43・D8・D10・M8・P89・P90～P93に切られる。規模は検出東壁3.2m東西残存長4.6m、壁高は10cmを測る。主軸方位はN-13°-Eを示す。2個の礫を配した地床炉の炉底には、焼け込みが見られ、住居址中央にある。ピットは主柱穴3個が検出された。深さはP1が47cmP2が40cmP3が18cm。床はほぼ平坦で薄く堅い。遺物は磨石（6）・凹石（7）、5の無彩盌と拓本で示した甕・壺の弥生土器がある。本址は弥生時代中期後半栗林期に位置づけられる。

H39号住居址　Ⅲう・え－7・8Grで検出されH41を切る。規模は検出東壁0.72m・南壁4.8m・検出西壁1.4m、壁高は37cmを測る。ピットは3基が床下から検出され床はほぼ平坦で薄く軟弱。出土遺物は2・5・6の土師器厚手甕・1の内面黒色処理された鉢、4の須恵器底部回転ヘラケズリの高台坏、13の磨・敲石がある。11は刀子、12は不明鉄器。これら遺物より本址は8世紀代に位置づけられる。

H40号住居址　Ⅳう・え－4Grで検出された。H32・H37・D13・D14・P232に切られる。規模は残存北壁3.3m・検出東壁2.4m、壁高は19cmを測り。主軸方位はN-40-Eを示す。6個の礫を配したとみられる地床炉の炉底には、焼け込みが見られる。ピット7個検出され、主柱穴P1・P3の深さは、P1が42cm、P3が28cm。床は堅い。遺物は、壺（1・4・5・7・10・11・12）・甕（2・6・9・11）・鉢（3）・甑（8）、滑石の紡錘車（30）、二次加工痕ある黒曜石剥片（29）・硬質砂岩の剥片（25～28）がある。　本址は、弥生時代中期後半栗林期に位置づけられる。

H41号住居址　Ⅲう・え-6・7・8Grで検出された。H39・Ta13・D42に切られ、H42・M8を切る。規模は北壁5.16m・検出東壁4.76m、検出西壁2.64m、壁高は55cmを測る。大小角礫を多量に含む褐土2層は、人為的堆積。主軸方位はN-13°-Wを示す。カマドは北壁中央に袖部地山を掘り残して粘土と石により構築される。ピットは主柱穴3個検出され、16cm掘りくぼんだP3には、40cmほどの平らな礫石が見られた。P1は深さ59cm、P2は深さ56cm。床は堅く平坦であるが、M8との重複部分はやや低い。遺物は、土師器坏（3）・甕（6～8）・壺（1・2・5）・甑（10・17）・鉢（4・9・11）、不明鉄器（39）、磨石（32・33）、敲石（31・36）、碧玉の管玉（37）・滑石の石製模造品臼玉（38）がある。34は千枚岩の未製品の石製模造品であろうか。弥生土器・黒曜石の剥片は混入である。10は多孔、17

は1孔、3・11は内面黒色処理される。これらの遺物より本址は7世紀代に位置づけられる。

H42号住居址　Ⅲう・え-5・6Grで検出された。II41・M8・P228に切られる。掘り込みが浅く明確な壁は、確認できなかった。推定東西長約5m。主軸方位はN-6°-Eを示す。2個の礫を配した地床炉の炉底には、焼け込みが見られ、住居址中央にある。3個検出されたピットは、P1・P2が主柱穴で、P1の深さ56cm、P2の深さ38cm。深さ69cmのP3は本址に伴うか不明である。炉址からP1・P2にかけて薄く硬く締まった床面が確認できた。出土遺物は、弥生土器・石器がある。1は内外面赤彩され口縁部に一対の穿孔ある鉢、2・4は甕である。5・6は硬質砂岩の剥片で5は削器であろうか。　本址は、僅かな遺物であるが弥生時代中期後半栗林期に位置づけられる。

H43号住居址　Ⅲえ-9・10GrにありD10・P92・P89・P237に切られH38を切る。規模は北壁5.8m・検出東壁1.08m・検出西壁1.74m壁高60cmを測る。カマドは検出範囲にはない。柱痕径26cmのピットが1個検出された。覆土1～4層は、人為的な堆積。遺物は、土師器坏（1・2・4）、混入の須恵器坏（3）がある。2は内面黒色処理、4の底部はヘラケズリされる。本址は、8世紀代であろうか。

H44号住居址　Ⅲえ-4・5Grで検出された。M8を切る。東側はグランド排水桝に破壊されていた。規模は検出北壁1.0m・残存南壁1.5m、西壁2.4m、壁高27cmを測る。カマド・ピット等検出範囲にはない。覆土は砂のブロックを多量に含む人為的な堆積であった。全体に薄く軟弱な床で、南壁寄りがやや低い。出土遺物は、土師器・須恵器・石器がある。弥生土器は混入である。1の須恵器坏は口径12cmでやや内傾気味に立ち上がり、端部は丸く内面口唇部に沈線状の凹線が巡る。底部1/3に回転ヘラケズリ調整がみえる。TK43型式に該当しよう。土師器坏は、2の須恵器模倣坏、半球状で口縁端部が内斜する3、半球状の5がある。4は鉢、7・9・10は甕、6は壺、8の多孔甑底部の穿孔は焼成後。14は両端・表裏に使用痕ある敲石、16は砂岩の砥石である。本址は、6世紀後半に位置づけられる。

H45号住居址　Ⅱえ・お-8・9Grで検出され、H48・H51・Ta4・P106・107・109・110・114～116・119・149・150・196・201・206にきられる。規模は検出東壁4.2m壁高は7cmを測る。カマドは検出範囲にはない。ピットは7個深さは13cm～77cmを測る。東壁から1m内外に深さ5cm前後の溝が、P1から南壁にかけてみられる。遺物は、1・2の土師器甕、4の鉢、3の高坏がある。3の脚部外面はヘラミガキ、坏部内面黒色処理される。脚部端部は面取りされ端部中央に浅い凹線が巡る。6世紀代であろう。

H46号住居址　Ⅰく・け-4・5Grで検出された。規模は検出北壁2.6m・検出西壁2.8m、壁高は9cmを測る。カマド等付属施設は検出範囲にはない。床は軟弱で平坦であった。出土遺物は拓影図1・2の弥生土器と弥生土器小片2点のみである。1の口唇部・口縁部に縄文が施文される。帰属時期不明。

H47号住居址　Ⅲえ・お-1～3Grで検出され、H50・Ta14・D21・D22・D24・D25・D26・D37・D38・P152・P153・P155・P157～P159・P161・P164・P166・P169・P180に切られる。規模は北壁6.8m・検出東壁3.4m残存西壁1.96m壁高は37cmを測る。主軸方位はN-6°-Wを示す。カマドは北壁の中央に粘土と石により構築され、多くをD22に破壊されていた。ピットは13個P1・P2は主柱穴でP1の柱痕は径30cm、P2覆土上部には4個の礫がみられた。方形に配されるP8～P11の内側には、40cm前後の礫が床に接して置かれていた。P2から西壁に間仕切り溝がある。西壁と北壁に壁溝が確認された。床は平坦で堅い。遺物は、土師器坏（1～15）・鉢（19・21・22）・高坏（16～18）・甕（23～27）、須恵器蓋20、鎌52、編み物石44・45、敲石46・47・49、台石48、滑石の石製模造品臼玉50が出土した。弥生土器は混入である。坏は須恵器坏蓋模倣の2・5・8・11・12・14、須恵器坏身模倣の7、丸底から長い口縁部が内弯気味に外傾し内面底部と口縁部境に凹線を有す15、平底で口縁端部が短く内傾する13、平底と外傾する口縁部の境に段を有し内面底部と口縁部境に凹線を有す10、浅い半球状の底部で口縁部が短く内弯し端部が直立気味の1・3、浅い半球状の底部で口縁部が短く内傾する3・4・9がある。1・2・4・7・8～15は内面黒色処理される。高坏は坏部外面に稜がある16、半球状の坏部内面に凹線がある17、半球状の坏部で口縁部が短く内傾する18がある。いづれも内面黒色処理され、坏部内外面・脚部外面がヘラミガキ。20の天井部は回転ヘラケズリ。遺物より本址は7世紀代に位置づけられる。H48号住居址　Ⅱえ-8・9Grで検出されH45を切りTa4・P111・P120・P193・P194・P200・P207に切られる。H51との重複関係は判然としない。規模は残存南壁4.8m・検出西壁2.1m、壁高は22cm

を測る。カマドは検出範囲にはない。ピットは6個検出され、主柱穴P1の柱痕は径20cm。薄い床は堅く平坦である。遺物は、土師器内斜口縁の坏(2)・内面黒色処理される鉢(1)がある。弥生土器・黒曜石の石核は混入である。不確実ではあるが、6世紀代であろう。

H49号住居址　Ⅲえ・お-4Grで検出された。M8・M9に切られ、西側大半をグランド排水桝・撹乱等で破壊され、残存西壁1.6m・壁高は3cmを測る。西壁に壁溝が巡る。確認された床は平坦で堅い。床下の掘方がない。赤彩された弥生土器・土師器・須恵器小片が9片みられたが帰属時期不明である。

H50号・H51号住居址　Ⅱえ・お-9・10Gr、Ⅲえ・お-11Grで検出されTa3と重複し、表土浅く農道下で残存状態が悪い。Ta3・Ta4・D32・P199・P238に切られ、H45・H47を切る。H48より新しいとみられる。H50がH51を切る。両址ともカマド・炉址は検出範囲にはない。床面堅くない。H50の規模は北壁5.2m検出東壁2.92m検出西壁1.76m、壁高は12cmを測る。床面は壁際がやや高い。ピットは5個検出された。H51の規模は推定北壁5.2m推定東壁4.4m残存西壁0.8m、壁高18cmを測る。床面は壁際がやや高い。ピットは12基検出され、P1・P2は溝を持つ。出土遺物無く帰属時期不明である。

第1表　竪穴住居址一覧表(1)　　(残存長)〈検出長〉(cm)

遺構名	検出位置	北壁長	南壁長	東壁長	西壁長	壁高	主軸方位	カマド(炉)	柱穴規模 長径×短径×深さ(cm)	備考 重複・時期等
H1	Ⅵい-1・2	(186)	260	(166)	(76)	19	N-16°-E	中央より	P1 32x22x47 P2 44x36x36 P3 24x22x61 P4 26x16x38 P5 20x14x35 P6 78x8x18 柱痕22～26cm	H3・H4・P1に切られる。弥生時代後期「吉田式」期
H2	Ⅶあ・い-4・5	—	—	(524)	(48)	20	N-35°-E		P1 108x(50)x60 P2 64x(40)x70 柱痕16cm	H15に切られ、H16を切る 7C代
H3	Ⅶあ・い-2・3	—	4	(280)	(210)	42	N-10°-E			H1・H11・H14を切る。9C前半
H4	Ⅶい-9・10 Ⅶい-1	790	(230)	(224)	(190)	36	N		P1 72x48x66 P2 76x60x80 P3 40x28x72 P4 80x40x54	P1・P13に切られ、H1を切る。6C後半
H5	Ⅴい-10 Ⅵい-1・2	(500)	—	(190)	—	41	N-14°-W	北中央	P1 50x44x65 P2 (66)x(20)x60	H17を切る。6C後半
H6	Ⅶい・う-8	400	—	—	(204)	32	N-15°-W		P1 96x(30)x25	M1・D3に切られ、H17・P2を切る。6C後半～7C前半
H7	Ⅶい-7	(180)	—	(32)	—	4				M1・H6に切られる 弥生時代中期後半「栗林式」期
H8	Ⅱう・い-5	290	(220)	(84)	280	18	N-20°-W	北中央		P188～P190に切られる。8C後半
H9	Ⅶあ-6	—	(254)	(90)	—	14			P1 (20)x20x40 P2 (32)x30x12	M2に切られる。弥生時代中期後半「栗林式」期
H10	Ⅶあ-4	—	(360)	(60)	(380)	18				P215に切られる。6C代
H11	Ⅶあ・い-2・3	—	—	(204)	—	11			P1 30x46x49 P2 34x33x29 P3 64x(22)x35 P4 66x50x34 P5 68x48x38 P6 44x44x43 P7 24x22x18 P8 34x30x36 P9 44x30x24 P10 64x36x37 P11 28x28x34 P12 26x26x13 P13 36x20x17 P14 22x16x19 P15 22x20x11	H3・H14・H15・H16・P164に切られる 弥生時代中期後半「栗林式」期
H12	Ⅴあ・い-9・10	—	(470)	(220)	(310)	61	N-7°-W		P1 46x40x60 柱痕22cm P2 50x44x77 柱痕30cm P3 30x26x12 P4 24x24x25	H19・P3に切られる。6C後半～7C初
H13	Ⅴい-9・10	460	—	(70)	(150)	60	N-15°-E	北中央	P1 40x30x56	6C後半
H14	Ⅶあ・い-3	—	(325)	—	(380)	38	N-15°-W		P1 30x27x64 柱痕20cm P2 26x26x72 柱痕20cm	H3・H15に切られ、H11・H16を切る。7C代
H15	Ⅶあ・い-4	—	(300)	—	(260)	50				H2・H11・H14・H16を切る。9C後半
H16	Ⅶい-4	—	—	(368)	—	32			P1 86x56x22 P2 28x22x44 P3 70x60x46 P4 60x58x30	H2・H14・H15・P64・P229に切られ、H11を切る。6C中葉～7C初
H17	Ⅵあ-2・3 Ⅶい-2・3	(270)	(100)	(450)	(390)	42	N-10°-W	北中央	P1 56x44x60 P2 68x48x64 P3 76x x80 P4 60x60x56 P5 80x x52 P6 44x32x31 柱痕28cm	H5に切られ、H18を切る。5C後半(第4四半期)
H18	Ⅶあ・い-2・3	(50)	—	—	(440)	34	N-20°-E	北壁より	P1 30x30x70 P2 30x26x80	H17に切られる。5C後半(第3四半期)
H19	Ⅴあ・い-8・9	—	340	(100)	(280)	24				H12・H30を切る。7C代
H20	Ⅴあ・い-7・8	—	—	(190)	(270)	26	N-3°-W		P1 50x40x58 P2 60x38x62	H19・H21・P21に切られる。弥生時代後期後半「箱清水期」終末
H21	Ⅴい・う-6・7	—	390	(250)	(220)	54			P1 80x44x48	H20を切る。5C後半
H22	Ⅴい・う-6	380	—	(320)	(100)	28	N-23°-W	中央	P1 48x40x32 柱痕20cm P2 24x24x41 柱痕20cm P3 38x30x42 柱痕28cm	P4・P64・P85に切られる。弥生時代中期後半「栗林式」期
H23	Ⅴい-3・4	—	—	—	(186)	12	N-25°-W	北壁より	P1 28x26x30 P2 46x40x78	H25・H26・P27に切られる。弥生時代中期後半「栗林式」期
H24	Ⅴい・う-5	390	—	(364)	(260)	24	N-6°-W	北中央		P25・P52に切られ、H25を切る。8C後半
H25	Ⅴい・う-4・5	(50)	—	(346)	(180)	43	N-4°-W	北中央	P1 60x44x39 P2 66x54x36 P3 36x26x3? 柱痕24cm	H24に切られ、H23・H26を切る。8C前半
H26	Ⅴい・う-3	(414)	—	(196)	—	23	N-8°-E	北中央	P1 46x38x64 P2 50x x69 柱痕16cm	H25・P54に切られ、H23を切る。7C代
H27	Ⅴい-2・3	—	480	(210)	(18?)	15			P1 50x42x82 P2 42x42x66	P44・P54・P60に切られ、H23・M6を切る。6C前半
H28	Ⅳう-9・10	540	—	(288)	(80)	46	N-12°-W	北中央	P1 102x62x64 P2 100x x60 P3 70x50x55 P4 40x30x88 P5 60x30x91 P6 36x32x84 P7 46x30x83 P8 36x32x80 P9 26x20x11 P10 26x x15	H30・H31を切る。8C代(第3四半期)
H29	Ⅳう-10	—	276	(180)	(148)	40			P1 26x18x15 P2 30x42x22	H30・H31を切る。8C後半
H30	Ⅳい・う-8～10	—	(900)	—	(470)	50			P1 40x30x64 P2 102x90x89 P3 52x34x13 P4 34x20x11 P5 30x24x10 P6 70x50x38 P7 60x x16 P8 50x40x12	H28・H29・H34・D5・D7に切られる。H30とH31同一遺構となった。5C後半
H32	Ⅰこ-4・5	320	—	(150)	(310)	10	N-10°-W	北中央	P1 60x54x24 P2 32x26x22	P192に切られる。8C後半
H33	Ⅰけ・こ-5 Ⅱあ-5・6	(130)	(120)	(370)	—	16	N-13°-W	北中央	P1 80x63x48 P2 70x54x68 P3 56x50x62 P4 50x40x80 P5 50x36x54 P6 36x36x56	H32・Ta8・P138・P192に切られる。弥生時代中期後半「栗林式」期
H34	Ⅳい・う-7・8	90	480	140	400	26			P1 40x32x60 P2 70x80x72 P3 160x90x29 P4 30x26x36 P5 28x10x30 P6 30x24x44 P7 40x30x47	D7に切られ、H30・H36・D40を切る。8C後半
H35	Ⅳう・え-1・2・3	—	(104)	(120)	(492)	44			P1 110x80x74 P2 x x92 P3 80x x73 P4 36x36x30 P5 28x26x47 P6 66x50x19 P7 74x70x16 P8 54x46x18 P9 24x20x7 P10 34x24x9 P11 70x56x27 P12 54x54x26 P13 30x26x31 P14 30x26x19 P15 28x26x19	Ta2・D6・D15に切られる。8C後半
H36	Ⅳう-6・7	—	—	—	(72)	28	N-13°-W	中央	P1 24x20x64 P2 40x40x56	Ta1・D7・D23・P211～P214に切られる 弥生時代中期後半「栗林式」期
H37	Ⅳう-4	—	(394)	—	—	20				Ta1・D13・D14に切られ、H40を切る。8C後半
H38	Ⅲえ-8・9	—	—	370	—	10	N-13°-E	中央	P1 6x42x47 P2 36x30x40 P3 44x40x18	H43・D8・D10・M8・P89・P90～P93に切られる弥生時代中期後半「栗林式」期
H39	Ⅲう・え-7・8	—	480	(72)	(140)	37				H41を切る。8C代
H40	Ⅳう・え-4	(330)	—	(240)	—	19	N-43°-E	中央	P1 34x30x42 P2 42x40x56 P3 54x42x28 P4 36x20x43 P5 14x14x12 P6 22x16x18 P7 40x32x31	H32・H37・D13・D14・P237に切られる弥生時代中期後半「栗林式」期

第2表　竪穴住居址一覧表（2）　　（残存長）　（検出長）　（cm）

遺構名	検出位置	北壁長	南壁長	東壁長	西壁長	壁高	主軸方位長軸方位	カマド(炉)	柱穴規模 長軸×短軸×深さ (cm)	備考 切合・時期等
H41	Ⅱう·え-6·7·8	516	—	(476)	(264)	55	N 13° W	北 中央	P1 4x50x59 P2 70x54x56 P3 50x40x16 他	H39·Ta13·D42に切られ、H42·M8を切る。7C代
H42	Ⅱう·え-5·6	—	—	—	—	—	N 6° E	中央	P1 50x46x56 P2 56x44x38 P3 80x60x69	H41·M8·P228に切られる。弥生時代中期後半「栗林式」期
H43	Ⅲえ-9·10	580	—	(208)	(174)	60				D10·P92·P89·P237に切られ、H38を切る。8C代
H44	Ⅲえ-5	100	150	—	240	27				M8を切る。6C後半
H45	Ⅱえ·お8	—	—	420	—	70			P1 46x36x77 P2 30x24x34 P3 34x28x29 P4 62x40x25 P5 48x32x15 P6 30x28x49 P7 36x30x13	H48·H51·Ta4·P106·107·109·110·114～P116·119·149·150·196·201·306に切られる。7C代
H46	Ⅰく·け4	260	(292)	—	280	9				時期不明
H47	Ⅲえ·お-1·2	680	—	(340)	(196)	37	N-6° -W	北 中央	P1 60x-x66 P2 70x80x6 P3 24x18x9 P4 38x32x13 P5 40x32x39 P6 32x24x22 P7 140x96x76 P8 42x14x21 P9 40x-x17 P10 20x-x20 P11 40x32x3 P12 50x4[illegible]x31 P13 32x20x23	H50·Ta4·D21·D22·D24·D25·D26·D37·D38·P152·P153·P155·P157～P159·P161·P164·P166·P169·P180に切られる。7C代
H48	Ⅱえ8·9	—	(480)	—	(210)	22			P1 76x48x45 P2 28x24x15 P3 30x24x15 P4 21x-x8 P5 44x40x19 P6 30x-x31	H45を切り、Ta4·P111·P120·P193·P194·P200·P207に切られる。6C代
H49	Ⅲえ·お4	—	—	—	(180)	3				時期不明
H50	Ⅱえ·お-9·10	520	—	(292)	(176)	12			P1 30x28x56 P2 30x40x64 P3 26x22x16 P4 24x24x36 P5 36x26x39	時期不明
H51	Ⅱえ-9·10 Ⅱお-9	(520)	—	(440)	(50)	16			P1 32x-x28 P2 26x24x8 P3 60x56x65 P4 40x36x32 P5 70x56x83 P6 24x20x43 P7 26x20x12 P8 62x60x41 P9 44x40x52 P10 50X X18 P11 20X20X20 P12 20X18X11	時期不明

2.竪穴状遺構

Ta1号竪穴状遺構　Ⅳう・え-5・6 Grにある。H37・H40・D14を切る。D12との新旧は不明確。規模は検出東壁4.76m・検出西壁4.8m、壁高は58cmを測り、長軸方位は真北。ピット14個、主柱穴は壁下P4～P6・P10・P14、径30～44cm。P6・P10は東西に対峙しやや内傾。覆土1～4層は灰・炭を含む人為的な堆積である。2層中の10～50cm超の多量な礫は床面に接する。P2は深さ20cmで巻貝出土。東壁にはテラスがある。床面やや軟弱で壁際に高い部分がある。遺物は青磁碗（2点）龍泉・13C（6・12）、卸皿古瀬戸・13C（2）、山茶碗捏鉢尾張・13C（17）、白磁口剥碗・中国13C後半～14C前半（13）、かわらけ小皿・15～16C（6）、土師質擂鉢在地・15C（14・16）、壺か甕中津川産・中世（9）、壺か甕常滑・中世（7・10）、火鉢在地（4・5）、擂鉢と徳利前山・18C末～19C前半（3・11）、北宋銭「政和通宝」・「紹聖元宝」、敲石（22・24・25）、凹石(23)、Ⅰ区から角釘5点（26～29・31）と用途不明銅製品（30）が出土した。須恵器（1・15・18～20）・前山焼と滑石の管玉（21）は混入。時期は、15～16世紀とみられる。

Ta2号竪穴状遺構　Ⅳう-1・2 Grにあり、H35を切る。検出東壁1.24m・南壁4.2m・検出西壁1.12m、壁高64cmを測る。ピットは床下から5個、深さは16～37cm。中央床下の方形凹み上面に、40cm範囲・厚さ5cmの火床とみられる炭の堆積があった。遺物は、かわらけ小皿・15～16C（6）、卸皿古瀬戸・13C（3）、壺か甕常滑・中世（2・4）、北宋銭「元豊通宝」(27)、敲石(21)、磨石(20・23～25)、軽石製品(22)、角釘(26)が出土した。弥生土器・土師器・須恵器は混入。時期は、15～16世紀とみられる。

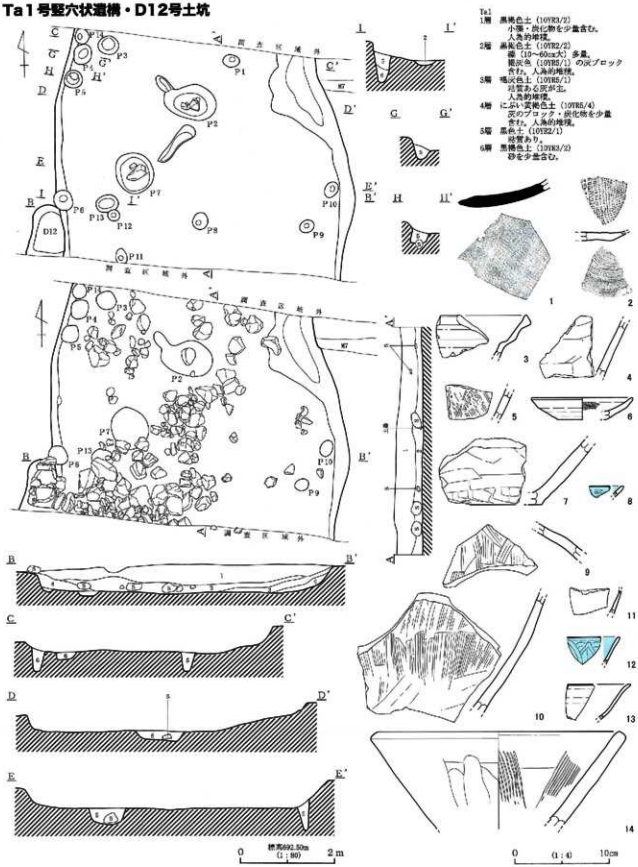
Ta3号竪穴状遺構　Ⅱえ・お-9・10Grにあり、H50・H51・Ta4・D32を切りD30に切られる。北壁3.0m・検出東壁4.64m・検出西壁2.96m壁高は20cmを測り、長軸方位はN-12° -Wを示す。ピットは7個、壁に近いP1・P2・P4・P6は柱穴であろうか。床面はそうじて堅いが薄い。壁際がやや高めである。北壁から50cm内側と西壁際に10～50cm大の石列が確認された。礫は床面に接している。安山岩が主で黒曜石・黒色多孔質安山岩もある。遺物は、土鍋・15～16C（1）、壺か甕常滑・中世、不明陶器（3）、台石（4・6）、凹石（5）が出土した。弥生土器は混入。本址の時期は、15～16世紀とみられる。

Ta4号竪穴状遺構　Ⅱえ・お-9 Grにあり、H45・48・H51を切りTa3に切られる。規模は検出北壁3.0m・東壁2.2m・検出北壁2.5m、壁高は12cmを測り、長軸方位はN-65° -Eを示す。全体に堅く締まる。遺物は、土鍋・15～16C（1）、壺か甕常滑・中世、不明陶器（3）、台石（4・6）、凹石（5）が出土した。弥生土器は混入である。本址の時期は、15～16世紀とみられる。

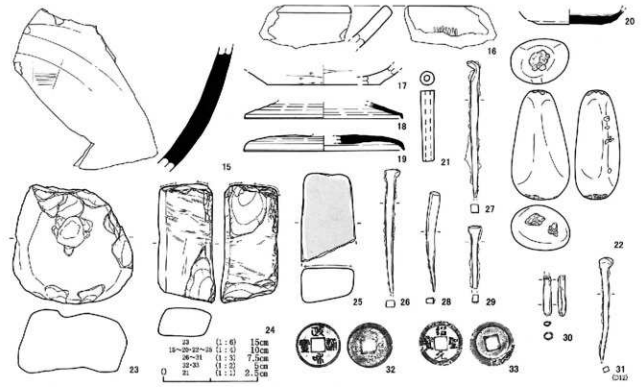
Ta5号竪穴状遺構　Vあ・い－5 Grにあり、西部を攪乱される。規模は北壁2.3m・残存東壁2.0m・残存南壁2.2m・西壁2.5m、壁高は21cm、長軸方位N-25° -Wを示す。床は平坦で軟弱。遺物は、かわらけ小皿・香炉（15～16C）が出土した。本址の時期は、15～16世紀とみられる。

Ta6号竪穴状遺構－Ⅱお-7 GrにありTa7を切り、東北壁に攪乱。規模は残存北壁2.0m検出東壁0.4m検出西壁0.32m壁高は20cmを測る。遺物は壺か甕常滑・中世があり、本址の時期も概ね当該期か。

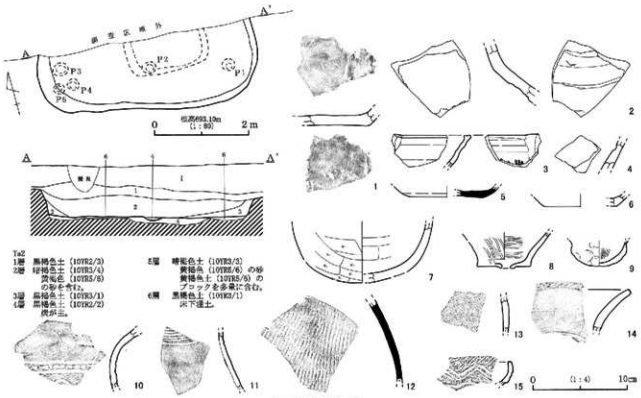
Ta1号竪穴状遺構・D12号土坑



第61図　Ta１号竪穴状遺構・D12号土坑実測図及び出土遺物実測図

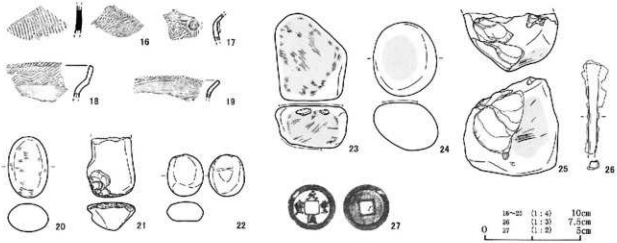


Ta1号竪穴遺構（2）

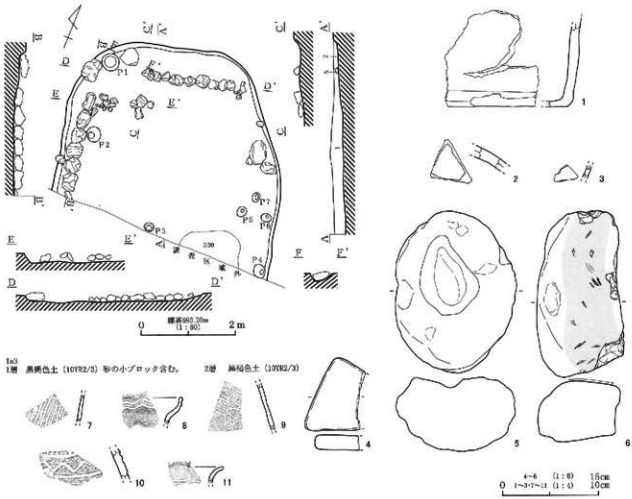


Ta2号竪穴遺構（1）

第62図　Ta1号（2）・Ta2号（1）竪穴状遺構実測図及び出土遺物実測図

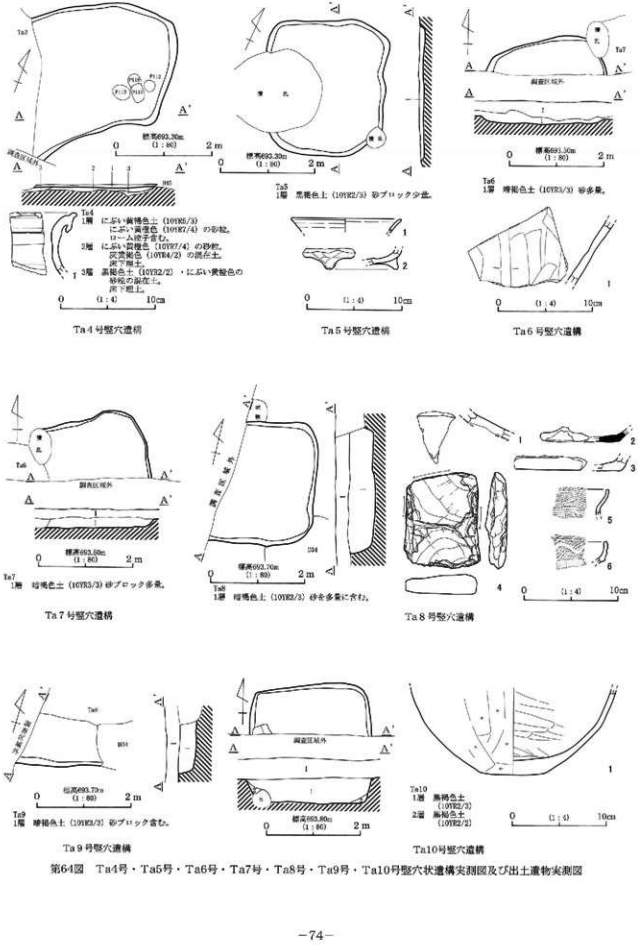


Ta2号竪穴遺構（2）



Ta3号竪穴遺構

第63図　Ta2号（2）・Ta3号竪穴状遺構実測図及び出土遺物実測図

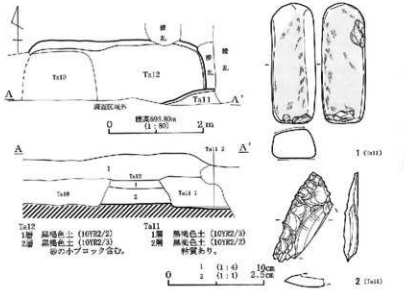


Ta4号竪穴遺構　Ta5号竪穴遺構　Ta6号竪穴遺構

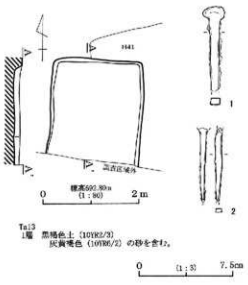
Ta7号竪穴遺構　Ta8号竪穴遺構

Ta9号竪穴遺構　Ta10号竪穴遺構

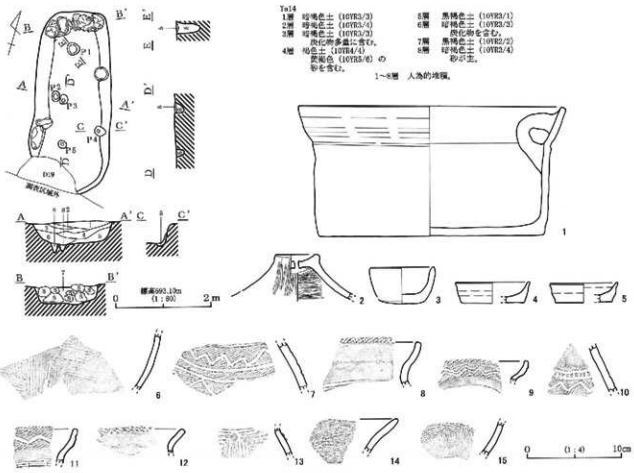
第64図　Ta4号・Ta5号・Ta6号・Ta7号・Ta8号・Ta9号・Ta10号竪穴状遺構実測図及び出土遺物実測図



Tal1号・Tal2号竪穴遺構



Tal3号竪穴遺構



Tal4号竪穴遺構

第65図　Tal1号・Tal2号・Tal3号・Tal4号竪穴状遺構実測図及び出土遺物実測図

Ta7号竪穴状遺構　Ⅱお-6 Grにあり、Ta6に切られ、D43を切る。残存北壁1.8m検出東壁1.44m、壁高16cmを測る。出土遺物なく時期は明確でないが、重複関係からTa6（中世）以前である。

Ta8号竪穴状遺構　Ⅱあ-5・6 Grにあり、D34に切られH33・Ta9を切る。北壁1.34m・東壁2.3m・検出南壁1.34m、壁高は50cmを測る。床は軟弱で北側がやや高い。遺物は壺か甕常滑・中世（3）、土鍋・15～16C（1）、混入の打製石斧、須恵器、弥生土器がある。時期は、15～16世紀とみられる。

Ta9号竪穴状遺構　Ⅱあ-5・6 Grにあり、Ta8・D34に切られる。規模は残存南壁1.8m壁高30cmを測る。覆土は人為的堆積。床面は平坦で堅いが薄い。遺物皆無だが、Ta8（15～16C）以前である。

Ta10号竪穴状遺構　Ⅲえ・お-5・6 Grにあり、Ta12・M8を切る。規模は北壁2.3m検出東壁1.0m検出西壁0.86m、壁高54cmを測る。床面中央が堅く締まる。遺物は古墳時代後期の土師器鉢があるが、時期の特定はできない。本址・周囲の遺構の状況から、中世の所産であろうか。

Ta11号竪穴状遺構　Ⅲお-4 Grにあり、Ta12を切る。大半が調査区域外・攪乱で破壊されているが、土層断面や周囲の遺構状況から竪穴状遺構とした。残存北壁1.14m壁高56cmを測る。磨石・石鏃は本址に伴わない。時期はTa10と同様に本址・周囲の遺構の状況から、中世の所産であろうか。

Ta12号竪穴状遺構　Ⅲえ・お-4 Grにあり、を切りTa10・Ta12に切られる。北壁3.54m残存東壁0.9m壁高50cmを測る。床面は薄く堅い。遺物皆無だが、Ta10・Ta12同様に中世であろう。

Ta13号竪穴状遺構　Ⅲえ-7・8 Grで検出されH1・M8を切る。北壁1.86m検出東壁2.2m検出西壁1.98m壁高20cm、長軸方位はN-5°-Eを示す。床面は薄く堅い。遺物は角釘2点が出土した。本址・周囲の遺構の状況から、曖昧ではあるが中世の所産であろうか。

Ta14号竪穴状遺構　Ⅲえ・お-3 Grにあり、D39・M8を切りTa10・Ta12に切られる。北壁3.54m残存東壁0.9m壁高50cm、長軸方位はN-12°-Eを示す。床面は薄く堅い。ピットは5個長辺と平行にP1・P3・P5がある。北壁に2段の石積みが確認された。遺物は、内耳土鍋・15～16C（1）、かわらけ小皿・15～16C（4・5）、土師器碗・中世（3）と混入の弥生土器がある。時期は、15～16世紀とみられる。

3.掘立柱建物址

F1号掘立柱建物址　Ⅵい-10、Ⅶい-1 Grで検出され、H1・H4を切る。形態は3間×？間の総柱式で東西長5.4m東西柱間1.4～1.8m南北柱間1.8mを測る。柱穴は径40～60cmの円形で深さは30～65cm。遺物は弥生中期土器・土師器・須恵器小片が出土。時期は、6世紀後半のH4以降である。

F2号掘立柱建物址　Ⅵい-8・9 Grで検出され、H6にきられる。深さ50cmのP1と深さ40cmのP2が布掘状に連結される。古墳時代後期のH6との重複関係から弥生中期土器と須恵器坏は、混入である。

F3号掘立柱建物址　Ⅴあ-10、Ⅵあ-10で検出された。掘立柱建物址としたが、周囲の状況から柱列とみられる。柱間1.4m～1.6m、柱穴は径64～80cmの円形で深さは44cm前後。時期は不明である。

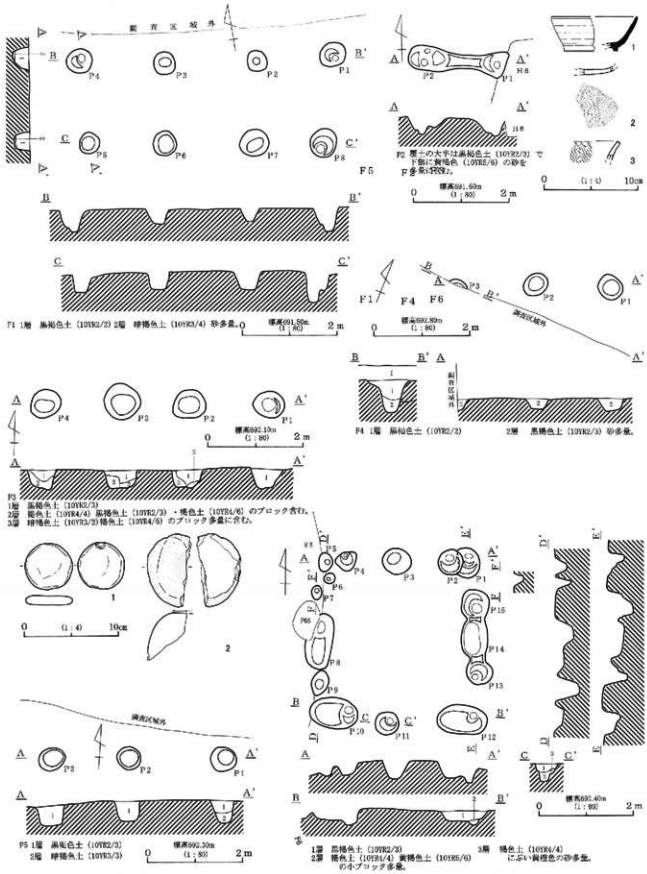
F4号掘立柱建物址　Ⅴい・う-6 Grで検出された。南側の調査区域外に伸びるのか、柱列なのかは明確でない。柱間1.6m、柱穴は径50～80cmの円形で、深さは調査区境界断面で64cm。時期は不明である。

F5号掘立柱建物址　Ⅴい-5・6 Grで出された。北側の調査区域外に伸びるのか、柱列なのかは明確でない。柱間1.6m、柱穴は径50～80cmの円形で、深さは調査区境界断面で64cm。時期は不明である。

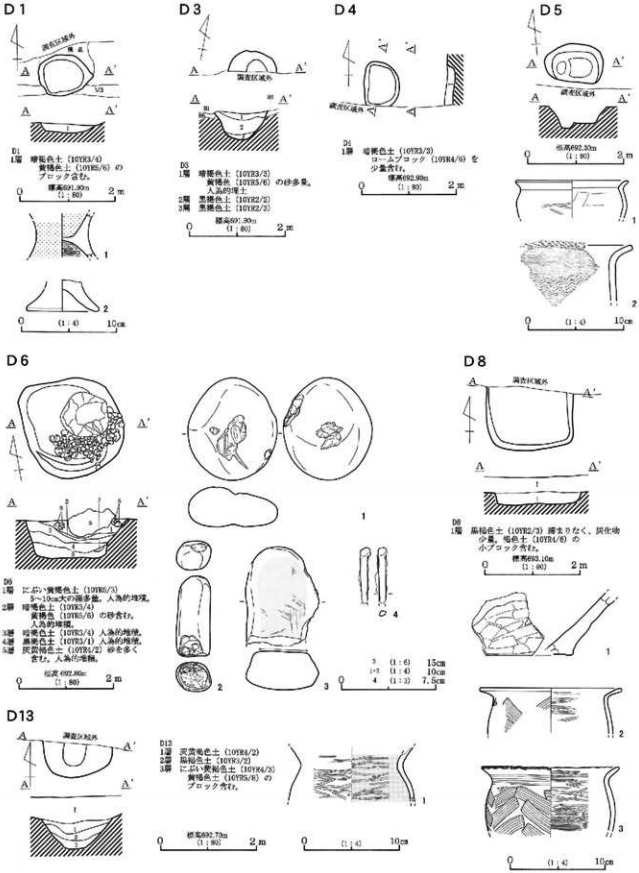
F6号掘立柱建物址　Ⅴい・う-1 Grで検出された。M6を切り・P66に切られる。複数遺構の重複かもしれない。不規則な並びであるが、P1・P3・P5・P7・P8・P9・P10～13・P15を組み合わせると2間×3間の側柱式建物址となり、軸方位は真北を示す。桁行3.4m（P1～P12）梁行3.0m（P1～P5）、桁行柱間0.6～0.8m梁行柱間1.1～1.8mを測る。柱穴は30～60cmの円形と100cm×60cmの楕円形で、深さも20～52cmと不規則である。P13とP15が布掘状に連結される。時期は遺物無く判然としないが、6世紀前半のH27・弥生後期のM5より新しい。

4.土坑

D1号土坑　Ⅵあ-5 Grで検出され、M3に切られる。長軸長116cm短軸長84cm壁高20cm、平面長方形、断面逆梯形、長軸方位はN-89°-Wを示す。時期は、図示した高坏・台坏甕から弥生時代後期であ

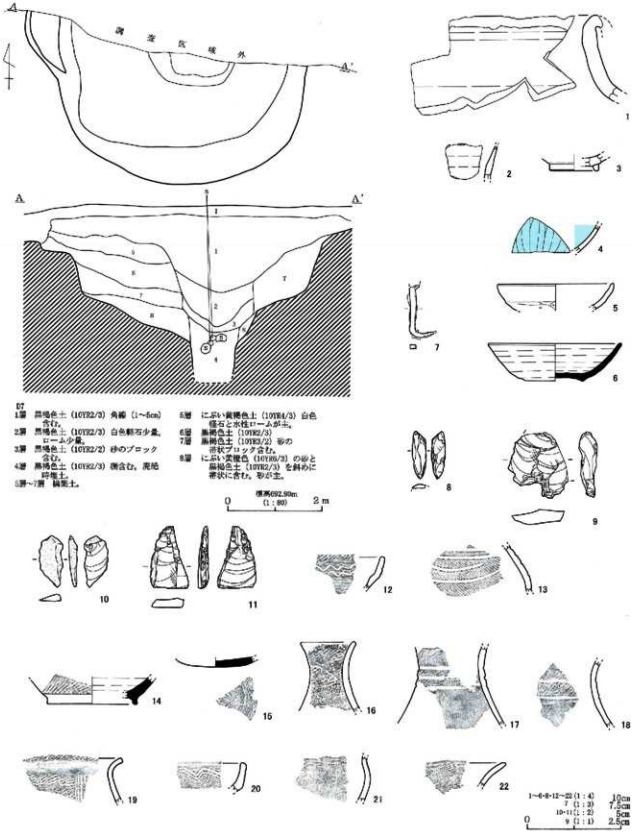


第66図　F1号・F2号・F3号・F4号・F5号・F6号掘立柱建物址実測図

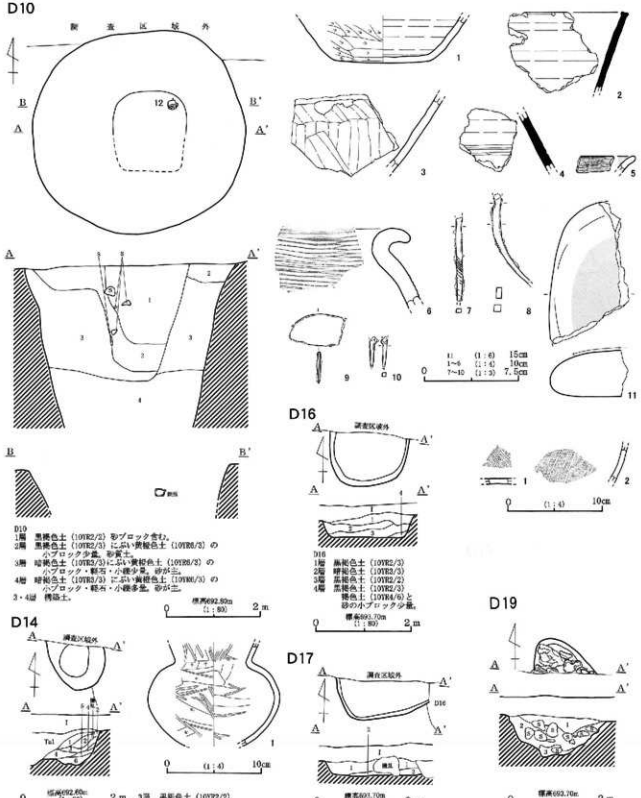


第67図　D１号・D３号・D４号・D５号・D６号・D８号・D13号土坑実測図及び出土遺物実測図

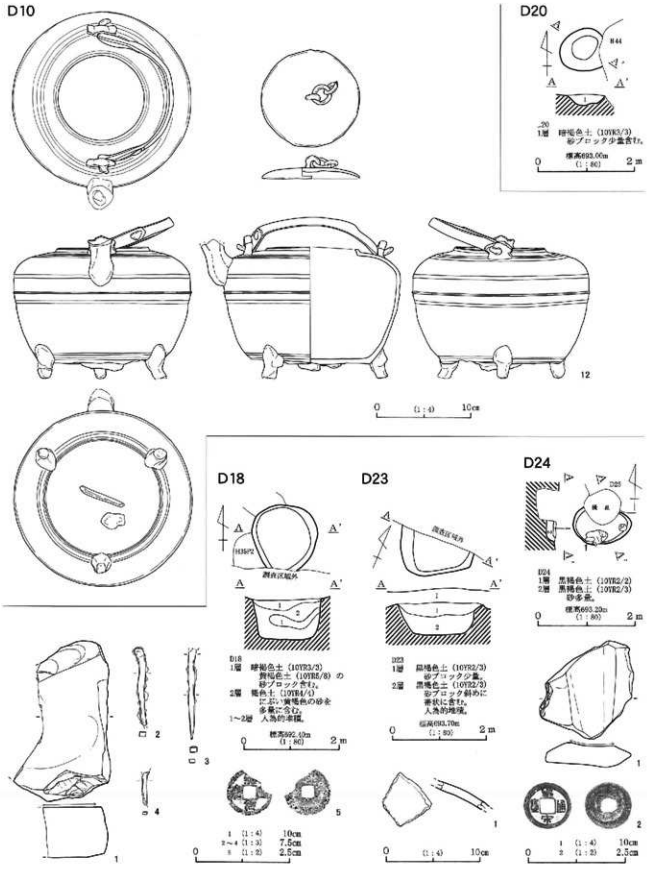
D7



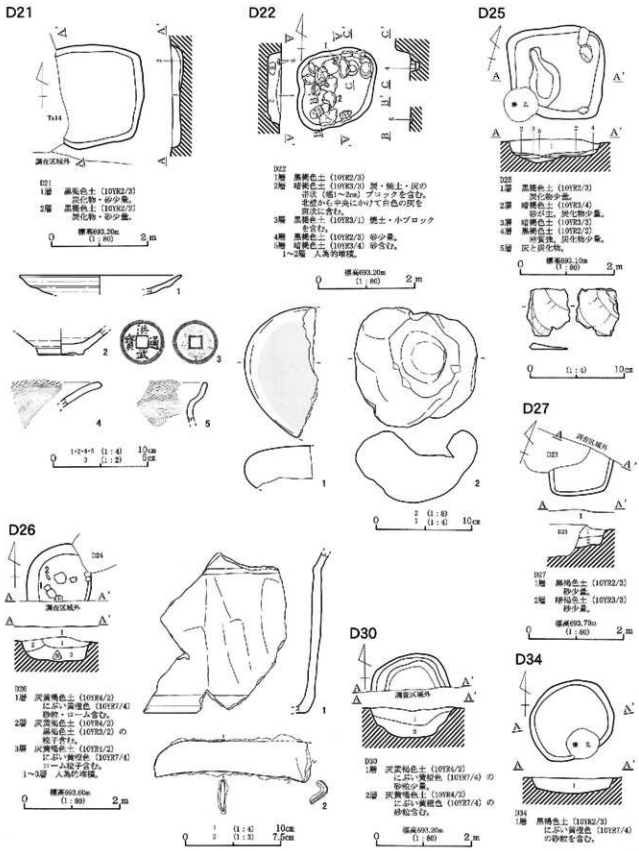
第68図　D７号土坑実測図及び出土遺物実測図



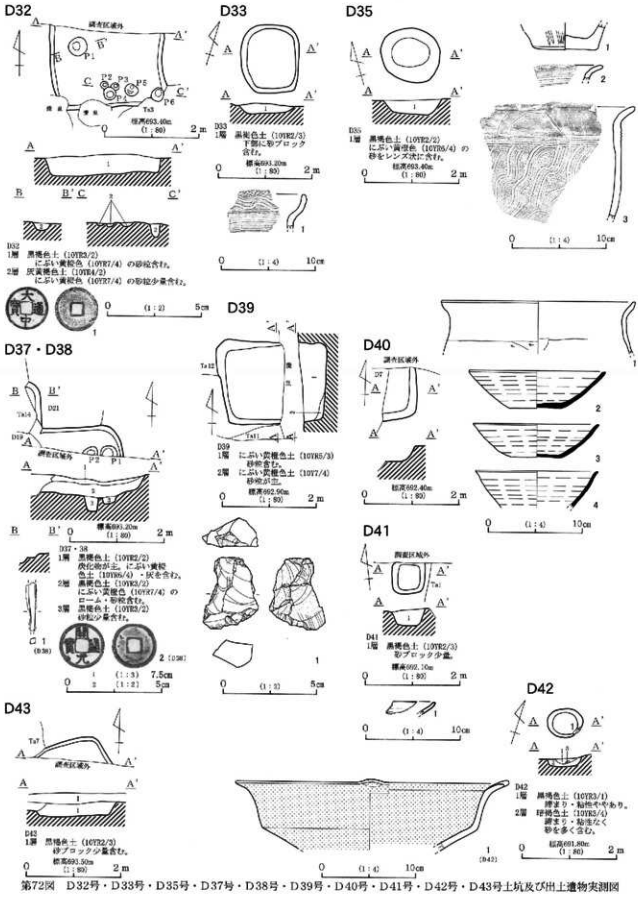
第69図　D10・D14・D16・D17・D19号土坑実測図及び出土遺物実測図



第70図　D10号・D18号・D20号・D23号・D24号土坑実測図及び出土遺物実測図



第71図　D21号・D22号・D25号・D26号・D27号・D30号・D34号土坑実測図及び出土遺物実測図



第72図　D32号・D33号・D35号・D37号・D38号・D39号・D40号・D41号・D42号・D43号土坑及び出土遺物実測図

ろう。

D3号土坑 Ⅳい-8 Grで検出され、M1に切られる。東西長100cm検出南北長44cm壁高60cm、断面逆梯形の形態である。時期は、古墳時代後期M1より以前である。

D4号土坑 Ⅴう-2 Gr検出され、M5を切る。検出長軸長92cm短軸長72cm壁高は13cm、長軸方位は真北を示す。弥生中期土器・平安時代土師器・須恵器小片、馬の臼歯が出土したが、時期は不明である。

D5号土坑 Ⅳう-10Grで検出され、H30・31を切る。長軸長124cm短軸長80cm壁高41cm、平面楕円形、断面逆梯形、西寄りにピット1個を有す。長軸方位はN-88°-Wを示す。遺物は土師器鉢・弥生中期壺があり、時期は古墳時代後期以降であろう。

D6号土坑 Ⅳえ-1 Gr検出され、H35を切る。長軸長240cm短軸長216cm壁高88cm、平面円形、断面穀を持つ逆梯形。長軸方位はN-45°-Wを示す。覆土は人為的埋土で、1m超の大礫と5～10cmの礫が多量にみられた。遺物は弥生中期・須恵器・土師器小片、敲石・台石、角釘がある。時期は不明である。

D7号土坑 Ⅳい・う-7・8 Grで検出され、H30・H34・H36・D40を切っていて本址が一番新しい。東西長628cm、検出南北長280cm検出壁高は290cmを測り、西側に張り出し部を持つ。軸方位は真北を示す。平面方形気味、断面テラスを有する逆梯形である。本址は井戸であり、2～4層が井戸使用面である。井戸枠はみられなかったが、テラス面から下部の一辺80mで方形の掘方が井戸枠の規模と思われる。5～8層が井戸掘方の埋土である。北側が調査区外に伸び地山軟弱で危険なため、底面には至っていない。遺物は、弥生中期土器・土師器・須恵器、青磁碗龍泉・13C(4)、壺か甕常滑・中世(1)、碗瀬戸美濃・近世(3)、不明陶器(2)、刺片、鉄釘があるが、時期の特定は難しい。

D8号土坑 Ⅲう-8・9 Grで検出され、P85を切る。東西長180cm検出南北長136cm壁高22cm、断面逆梯形の形態である。軸方位はN-2°-Wを示す。遺物は、弥生中期土器、須恵器小片、壺か甕常滑・15C(1)、須恵質土器鉢在地・13C(2)、壺常滑・中世(3)、瓦質土器火鉢在地・時期不明(5)、甕珠洲・13C前半(6)、鉄瓶(12)、角釘(7・8・10)、鎌(9)、台石(11)、弥生土器、土師器、須恵器がある。12の鉄瓶(巻頭図版)は、井戸枠内の検出面下50cmから出土した。三足手取釜といわれ16世紀中頃には、茶の湯の釜として認識されていたという。本址の時期は、15世紀である。

D12号土坑(第61・62図) Ⅳう・え-6 Grで検出され、Ta1の付属なのか、重複していたのか不明である。検出長軸長110cm短軸長80cm壁高19cm、平面楕円形、断面逆梯形の形態で、長軸方位はN-2°-Eを示す。遺物は、第62図31の角釘と骨片(人骨?)が出土した。

D13号土坑 Ⅳう-4 Grで検出され、H37・H40を切る。東西長148cm検出南北長72cm壁高64cm、断面逆梯形。遺物は、土師器壺、須恵器・弥生土器小片が出土した。時期は古墳時代後期以降であろう。

D14号土坑 Ⅳう-5 Grで検出され、Ta1に切られH37を切る。検出長軸長120cm短軸長110cm壁高76cm、平面形楕円形、テラスを有す断面逆梯形の形態である。長軸方位はN-20°-Wを示す。覆土1～6層は人為的埋土。遺物は、土師器鉢が出土した。時期は古墳時代後期以降15～16世紀以前である。

D16号土坑 Ⅲえ-2・3 Grで検出され、D17・M8を切る。検出東西長172cm検出南北長112cm壁高48cm、断面逆梯形。遺物は剥皿古瀬戸・13C、弥生土器・須恵器・土師器片が出土した。時期は、13世紀である。

D17号土坑 Ⅲえ-3 Grで検出され、D16に切られる。残存東西長184cm検出南北長86cm壁高30cm、平面円形、断面逆梯形の形態である。時期は13世紀のD16以前である。

D18号土坑 Ⅳえ-2 Grで検出され、H35を切る。東西長144cm検出南北長136cm壁高88cm、平面円

形、断面逆梯形の形態である。長軸方位はN-25°-Wを示す。覆土1・2層は人為的埋土である。時期は、角釘が出土しているが、不明である。

D19号土坑　Ⅲお-3 Grで検出され、Ta14・D37・M9を切る。検出東西長132cm検出南北長64cm壁高86cm、断面逆梯形の形態である。覆土2・3層は、礫を多量に含む人為的な埋土である。弥生土器・土師器片があるが、時期は不明である。

D20号土坑　Ⅲえ-5 Grで検出され、H44に切られる。検出東西長98cm南北長92cm壁高27cm、平面円形、断面逆梯形の形態である。主軸方位はN-77°-Wを示す。時期は不明である

D21号土坑　Ⅲえ・お-2・3 Grで検出され、Ta14・D37に切られ、H47・D38を切る。残存東西長174cm南北長220cm壁高26cm、断面逆梯形の形態である。遺物は平碗古瀬戸・15C（1・2）、洪武通宝、弥生土器・土師器・須恵器がある。時期は15世紀である。

D22号土坑　Ⅲえ-2 Grで検出され、H47を切る。東西長160cm検出南北長160cm壁高30cm、平面方形、断面逆梯形の形態である。2層は礫・灰・炭・焼土を多量に含む、1・2層は人為的な埋土である。台石（1）、凹石（2）、弥生土器・土師器片があるが、時期は不明である。

D23号土坑　Ⅲえ-1 Grで検出され、D27・P157を切る。検出東西長100cm検出南北長70cm壁高は70cm、断面逆梯形の形態である。軸方位はN-30°-Wを示す。覆土2層は人為的な埋土である。遺物は壺か甕常滑・中世、弥生土器・土師器・須恵器がある。時期は中世である。

D24号土坑　Ⅲお-1 Grで検出され、H47・D26を切る。長軸長120cm残存短軸長80cm壁高は19cm、平面楕円形、断面逆梯形の形態である。長軸方位はEを示す。遺物は皇宋通宝、石皿、内耳土鍋片、弥生土器片が出土した。時期は中世である。

D25号土坑　Ⅲえ-1 Grで検出、H47・H50・P154を切る東西長200cm南北長200cm壁高は36cm、平面方形、断面逆梯形の形態である。主軸方位はN-20°-Wを示す。覆土1～5層は人為的埋土で、5層は炭と灰が主。遺物は、内耳土鍋片、弥生土器片、土師器・須恵器片等が出土した。時期は中世である。

D26号土坑　Ⅲお-1 Grで検出され、D24に切られ、H47を切る。東西長120cm検出南北長136cm壁高は40cm、平面楕円形？断面逆梯形の形態である。軸方位はNを示す。覆土1～3層は人為的埋土である。遺物は、内耳土鍋片、鎌、弥生土器片、土師器が出土した。時期は中世である。

D27号土坑　Ⅲえ-1 Grで検出されD23に切られP160を切る。東西長136cm検出南北長90cm壁高は36cm断面逆梯形、軸方位はN-25°-W。遺物は、弥生土器・土師器小片が出土した。時期は中世以前である。

D30号土坑　Ⅱお-9・10Grで検出され、Ta3を切る。東西長164cm検出南北長160cm壁高は66cmを測る。テラスを有する。遺物はなく、時期は不明である。

D32号土坑　Ⅱえ-10・Ⅲえ-1 Grで検出、Ta3・D25に切られ、H51を切る。東西長240cm検出南北長160cm壁高は40cm、軸方位はN-2°-W、平面方形？断面逆梯形の形態である。6個のピットは本址に伴うか不明確。遺物は、大中通宝、内耳土鍋片、弥生土器・土師器片が出土した。時期は中世である。

D33号土坑　Ⅱお-6 Grで検出され、東西長144cm南北長122cm壁高は22cm、平面長方形、断面逆梯形、主軸方位はN-22°-Wを示す。遺物は弥生土器小片で、本址の時期は不明である

D34号土坑　Ⅱあ-5 Grで検出され、Ta8・Ta9を切る。長軸長176cm短軸長156cm壁高は32cm、平面長方形、断面逆梯形、主軸方位はN-70°-Eを示す。遺物は、内耳土鍋片、土師器・須恵器片が出土した。時期は中世である。

D35号土坑　Ⅱう・え-6Gr検出され、長軸長128cm短軸長112cm壁高は34cm、平面円形、断面逆梯形。長軸方位はN-72°-Wを示す。遺物は、壺・甕・鉢で、本址の時期は弥生時代中期後半栗林期である。

D37号土坑　Ⅲえ・お-3 Grで検出されH47を切り、Ta14・D19・D21に切られる。D38との関係は把握できなかった。遺物なく遺構の依存状態も悪いが、時期は重複関係から15～16世紀である。

D38号土坑　Ⅲお-2 Grで検出、Ta14・D19・D21に切られ、H47を切る。残存東西長168cm検出南北長60cm壁高は46cm、断面逆梯形、ピット2個ある。開元通宝、角釘が出土し、時期は15～16世紀である。

D39号土坑　Ⅲえ-4・5 Grで検出され、Ta11・Ta12に切られる。残存東西長130cm南北長174cm壁高は48cm、軸方位はN、平面方形？断面逆梯形の形態である。遺物は弥生土器・須恵器・土師器小片で、本址の時期は不明である。

D40号土坑　Ⅳい・う-7 Grで検出され、D 7に切られる。残存東西長64検出南北長112cm壁高は24cm、断面逆梯形の形態である。遺物は、口縁部「コ」の字の土師器武蔵甕（1）、須恵器坏（2～4）、2・3は底部回転糸切り、これらから本址は、9世紀前半に位置づけられる。

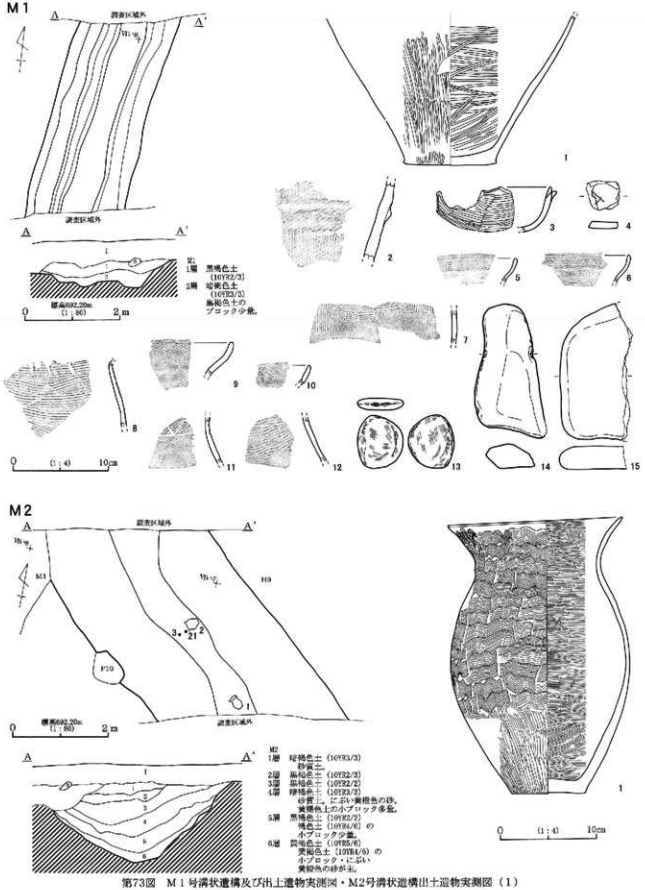
D41号土坑　Ⅳい・う-7 Grで検出された。東西長70cm検出南北長66cm壁高は38cm、平面方形、断面逆梯形の形態である。遺物は皿前山・18世紀末～19世紀前半、弥生土器小片が出土、時期は近世末である。

D42号土坑　Ⅲえ-7 Grで検出され、H41・M 8に切られる。長軸長76cm短軸長64cm壁高は13cm、平面楕円形、断面逆梯形の形態である。主軸方位はN-72°-Eを示す。遺物は、弥生土器の赤彩された高坏(1)・壺・甕片が出土、時期は弥生時代後期。

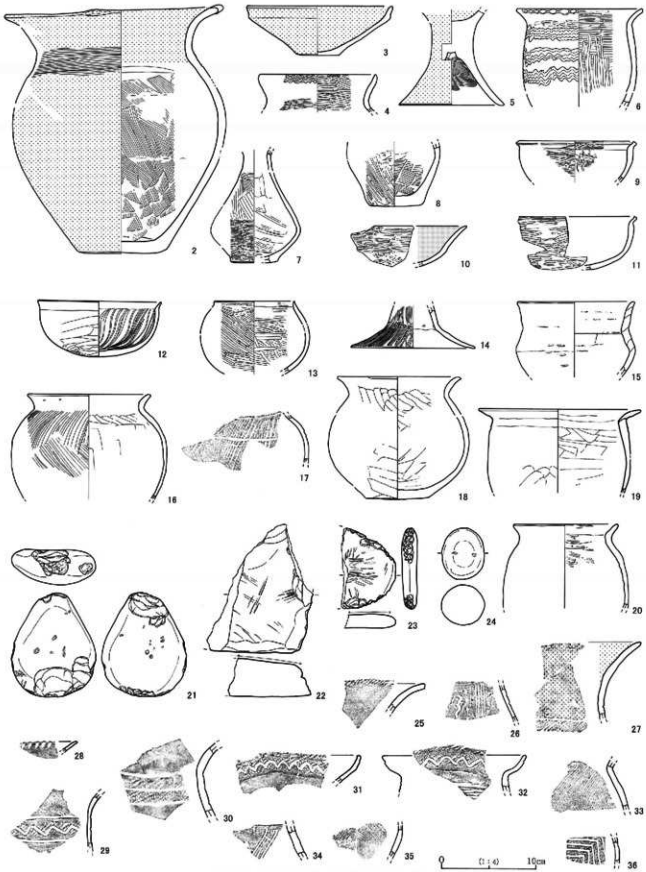
D43号土坑　Ⅱお-6 Grで検出され、Ta 7に切られる。検出東西長126検出南北長80cm壁高は32cm、断面逆梯形。遺物はなく、時期は不明である。

第3表　土坑一覧表　　(残存長)　<検出長>　cm

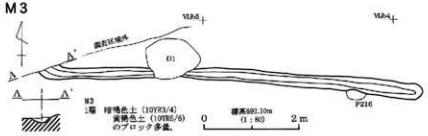
遺構名	検出位置	平面形	長軸方位	長軸長 東西長	短軸長 南北長	壁高	備考（重複関係　出土遺物）
D1	Ⅵあ5	長方形	N-89°-W	116	84	20	M3に切られる。弥生時代後期の土器片
D2							P217に変更
D3	Ⅵい8	不明		100	(44)	60	M1に切られる
D4	Ⅴう2	長方形	N	(92)	72	13	M5を切る。弥生中期土器、馬骨（臼歯）
D5	Ⅳう10	楕円形	N-88°-W	124	80	41	H30・H31を切る。土師器・弥生中期土器
D6	Ⅳえ1	円形	N-45°-W	240	216	88	H35を切る。弥生中期土器・土師器、敲石・砥石、角釘
D7	Ⅳい・う7・8	不明	N	(616)	(280)	(290)	H30・H31・H34・D40を切る。青磁（13C）、灰釉？、鉄釉（近世）、常滑（15C）、弥生中期土器・土師器・須恵器
D8	Ⅲう8・9	不明	N-2°-W	180	(136)	22	P85を切る。常滑（15C）、弥生中期土器・須恵器
D9							欠番
D10	Ⅲう10	円形	N	460	434	(320)	H38・H43を切る。珠洲（13C前）、須恵質（13C）、須恵器、瓦質、常滑（中世）、鉄鍋、鎌、角釘、弥生土器・須恵器、土師器
D11							欠番
D12	Ⅳう・え6	楕円形	N-2°-E	(110)	80	19	Ta1との重複関係不明。骨（人骨？）、角釘
D13	Ⅳう4	不明	N-76°-W	148	(72)	64	H37・H40を切る。弥生土器・土師器・須恵器
D14	Ⅳう5	不明	N-20°-W	(120)	110	76	Ta1に切られH37を切る。土師器鉢
D15							Ta10に変更
D16	Ⅲえ2・3	不明		172	(112)	48	D17・M8を切る。古瀬戸（13C）、弥生土器・土師器・須恵器
D17	Ⅲえ3	円形		(184)	(86)	30	D16に切られM8を切る。
D18	Ⅳえ2	円形	N-25°-W	144	(136)	88	H35を切る。角釘
D19	Ⅲお3	不明		(132)	(64)	86	Ta14・D37・M9を切る。
D20	Ⅲえ5	円形	N-77°-W	(92)	(92)	27	H44に切られる。
D21	Ⅲえ・お2・3	長方形	N	(174)	220	26	Ta14・D37に切られ、H47・D38を切る。古瀬戸（15C頃）、洪武通宝、弥生土器・土師器・須恵器
D22	Ⅲえ2	方形	N	160	160	30	①20×4　②32×22　H47を切る。台石・凹石、弥生土器・土師器
D23	Ⅲえ1	不明	N-30°-W	(100)	(70)	70	D27・P157を切る。常滑（中世）、弥生土器・土師器・須恵器
D24	Ⅲお1	楕円形	E	120	(80)	19	H47・D26を切る。内耳土鍋、皇宋通宝、石皿、弥生土器
D25	Ⅲえ1	方形	N-20°-W	200	200	36	H47・H50を切る。内耳土鍋、弥生土器・土師器・須恵器
D26	Ⅲお1	不明	N	<120>	132	8	D24に切られ、H47を切る。内耳土鍋、鎌、弥生土器・土師器
D27	Ⅲえ1	不明	N-25°-W	136	<68>	10	D23に切られ、P160を切る。弥生土器・土師器
D28							撹乱
D29							Ta11に変更
D30	Ⅱお9・10	不明		164	<160>	66	Ta3を切る。テラスを有する。
D31							Ta12に変更
D32	Ⅲえ1	方形？	N-2°-W	240	<160>	40	①40・21②16×7③20×10④24×18⑤30×10⑥32×33　Ta3に切られ、H51を切る。大中通宝、内耳土鍋、弥生土器・土師器
D33	Ⅱお6	長方形	N-22°-W	144	122	22	弥生土器
D34	Ⅱあ5	円形	N-33°-E	176	156	32	Ta8・Ta9を切る。内耳土鍋、土師器・須恵器
D35	Ⅱうえ6	円形	N-72°-W	128	112	34	弥生土器
D36							Ta13に変更
D37	Ⅲうお3	不明		<24>	<100>	10	Ta14・D19・D21に切られ、H47を切る。
D38	Ⅲお2	不明		(168)	<60>	46	①36×32②28×12　Ta14・D19・D21に切られ、H47を切る。開元通宝、角釘
D39	Ⅲえ4・5	方形？	N	(130)	<174>	48	Ta11・Ta12に切られる。弥生土器・土師器・須恵器
D40	Ⅳい・う7	不明		(64)	<112>	24	D7に切られる。土師器・須恵器
D41	Ⅳい・う6	方形	N-7°-W	70	<66>	38	前山（近世）、弥生土器
D42	Ⅲえ7	楕円形	N-72°-E	76	64	13	H41に切られる。弥生土器
D43	Ⅱお6			<126>	<80>	32	Ta7に切られる。

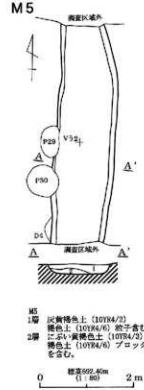


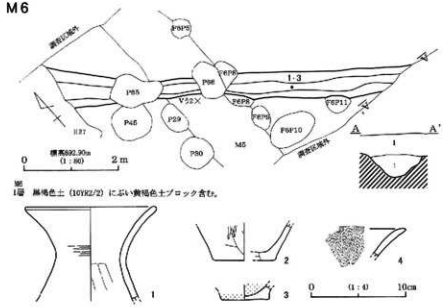
第73図　M1号溝状遺構及び出土遺物実測図・M2号溝状遺構出土遺物実測図（1）



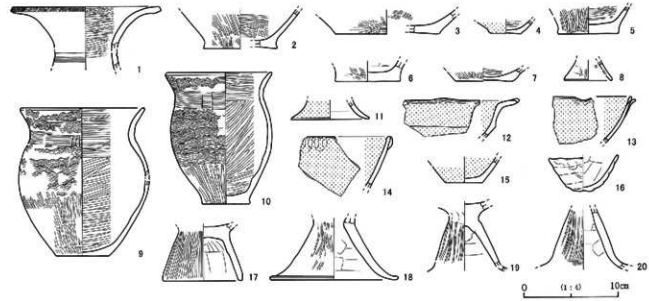
第74図　M2号溝状遺構出土遺物実測図（2）



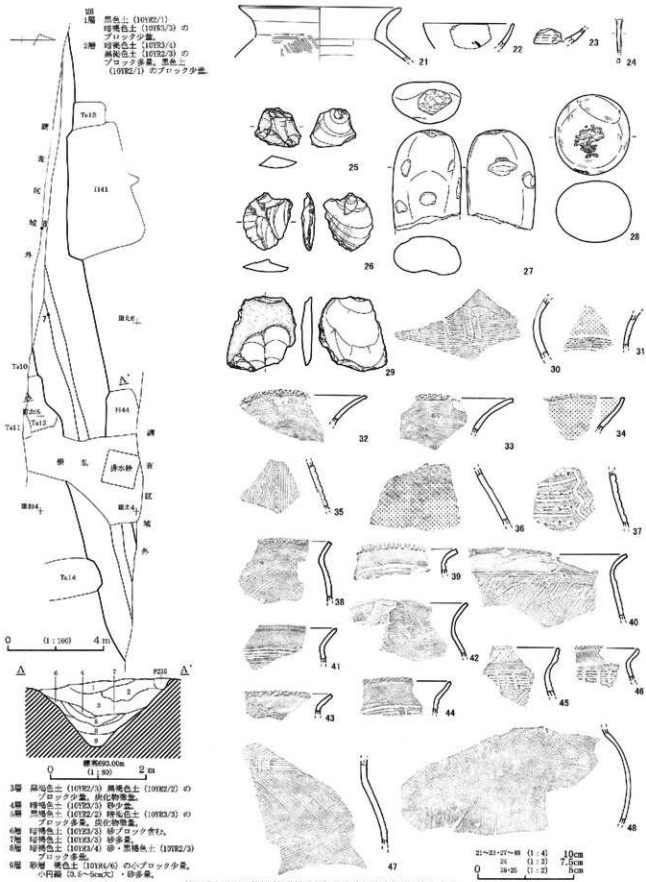




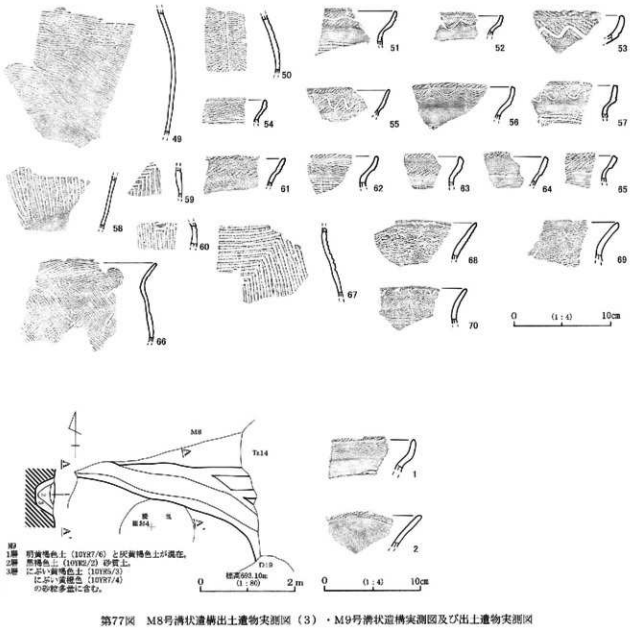
M8（1）



第75図　M３号・M５号溝状遺構実測図・M６号溝状遺構実測図・M8溝状遺構実測図及び出土遺物実測図(1)



第76図　M８号溝状遺構実測図及び出土遺物実測図（２）



第77図　M8号溝状遺構出土遺物実測図（3）・M9号溝状遺構実測図及び出土遺物実測図

5.溝状遺構

M1号溝状遺構　Ⅵあ・い-8 Grで検出され、H6・H7・M2・D3・P11を切る。南北調査区域外に伸び、検出長4.3m・幅2m・深さ0.6m、溝底中央と西側にテラスがある。中央テラス両側に、深さ2～15cmの溝状凹みがみられる。溝底は堅くない。弥生時代甕・片口鉢、赤彩の土製品(土師器？)、円筒埴輪、磨石・編み物石・台石、弥生時代中期土器片が出土。時期は重複関係から7世紀前半以降である。

M2号溝状遺構　Ⅵあ・い-8 Grで検出されM1・P10に切られH9を切る。南北調査区域外に伸び検出長4.8m・幅3.2m・深さ1.7m、断面は「V」に近い「U」字形で溝底幅は狭い。遺物は下層の5層から弥生時代後期箱清水期(1の甕、2の赤彩深鉢、3の鉢、4の甕、5の高坏)、上層の2・3層から弥生時代中期栗林期（6の甕、7・8の壺）や古墳時代の土師器（9～12坏、13の碗、14の高坏、15の鉢、16～20の甕）、敲石・磨石・台石が出土した。粗いハケメ調整され、胴上部にヘラによる一条の沈線がある17は、東海地方の宇田型甕の特徴を持つ。本址の時期は、弥生時代後期箱清水期であろう。

M3号溝状遺構　Ⅵあ-3～5Grで検出、D1・P216に切られ、東西に伸び西側は調査区域外にある。検出長8.0m・幅0.2～0.36m・深さ5～13cm、断面逆梯形、溝底は水平である。出土遺物無いが、時期は重複する弥生時代後期のD1以前である。

M4号溝状遺構　F2へ名称変更した。

M5号溝状遺構　Ⅴい・う-1・2Grで検出、D4・P29・P30に切られ、M6を切る。南北調査区域外に伸び、検出長4.7m・幅0.9～1.3m・深さ15～21cm、断面「U」字形、溝底は水平である。弥生時代中期と後期甕・壺小片、土師器・須恵器片が出土したが、時期は不明である。

M6号溝状遺構　Ⅴい・う-1・2Grで検出、H27・F6・M5・P65・P66に切られる。東側は調査区域外、西側はH27に切られ、検出長7.76m・幅0.36～0.72m・深さ34～41cm、断面逆梯形、溝底は水平。弥生時代中期と後期甕・壺片多量、上層から土師器小片少量が出土した。時期は6世紀のH27以前である。

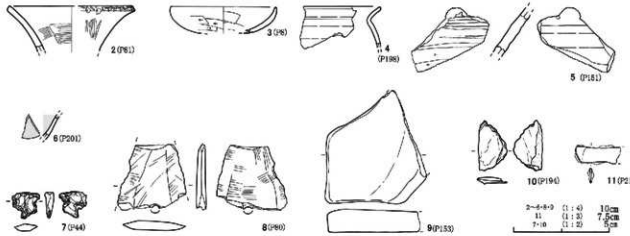
M7号溝状遺構　Ⅳう-3・4Grにあり、近現代の畑境であった。

M8号溝状遺構　Ⅲえ-2～9Grで検出、H41・H44・Ta3・Ta10・Ta12・Ta14に切られ、M9を切る。D41との新旧関係は不明瞭。南北調査区域外に伸びる。検出長22m・幅2.08～2.8m・深さ1.42～1.60m、断面は「V」に近い「U」字形で溝底幅は狭く、西方がやや低い。流水か？最下層の9層には、小円礫と砂層がみられた。遺物は下層の5・8層から弥生時代後期箱清水期(9・10の甕等)、上層の1層から古墳時代の土師器（17～21）・近世の磁器が出土した。本址の時期は弥生時代後期箱清水期であろう。

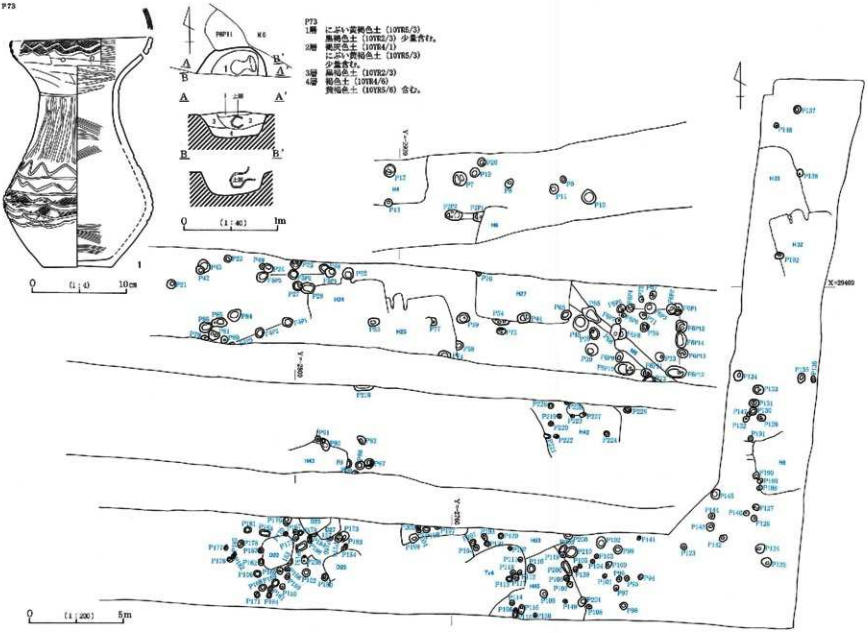
M9号溝状遺構　Ⅲえ・お-3・4Grで検出、Ta14・D19・M8に切られ、H49を切る。2条の溝にも見えるが、重複関係は明らかでない。岩村田高校グランドの排水溝以西Ta14以東には伸びない。検出長4.3m・幅0.6～0.8m・深さ32～42cm、断面は「U」字形で溝底は西方に緩く傾斜する。遺物は弥生時代中期と後期甕・壺片、上層から土師器小片が出土した。時期は弥生時代後期M8以前である。

6.ピット

ピットは227基が検出され、ほとんどが柱穴である。大半が中世竪穴状遺構・土坑周辺に位置する。明確な建物址は、捉えられなかった。弥生時代中期・後期、古墳～平安時代土師器・須恵器、青磁、石鏃、刀子等が出土した。F6に切られるP73からは、弥生時代中期栗林期の壺が出土した。(第79図)



第78図　ピット出土遺物実測図



第79図 ピット実測図及び出土遺物実測図

第4表 ピット一覧表（1）

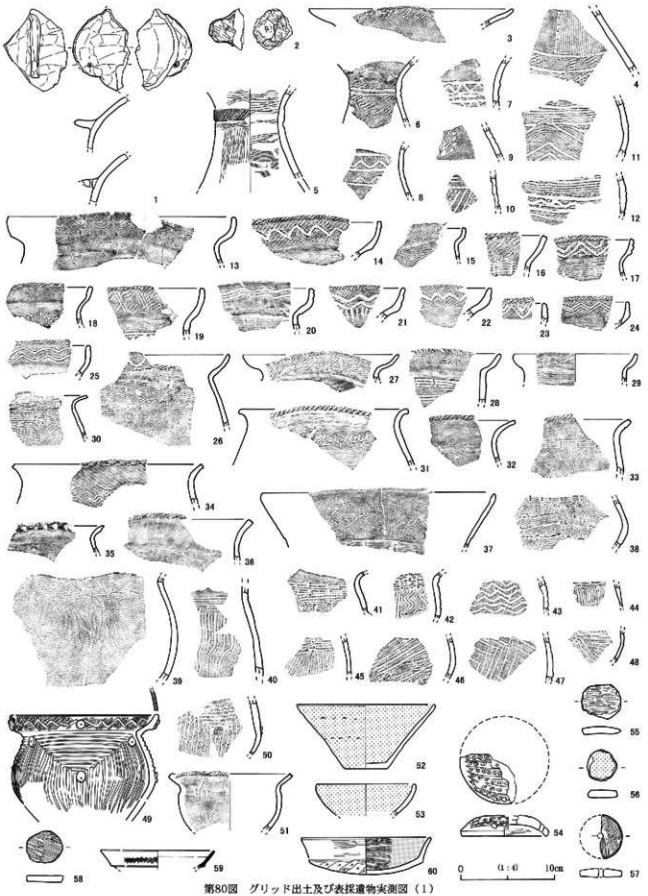
(cm)

番号	位置	長径×深さ	備考
1	Ⅵい10	58×50	10YR2/3 H4を切る F1P1へ名称変更 弥生土器・土師器
2	Ⅵい10	45×25	10YR2/3 H4を切る F1P2へ名称変更
3	Ⅵい1	48×30	10YR2/3 H4を切る F1P3へ名称変更
4	Ⅵい1	52×27	10YR2/3 H4を切る F1P6へ名称変更
5	Ⅵい10	60×40	10YR2/3 H4を切る F1P7へ名称変更
6	Ⅵい10	63×67	10YR2/3 H4を切る F1P8へ名称変更 弥生土器・土師器
7	Ⅵい9	70×32	弥生土器・土師器
8	Ⅵい8	44×37	土師器
9	Ⅵい7	33×25	弥生土器
10	Ⅴい7	78×34	弥生土器・土師器・須恵器
11	Ⅵい7	50×31	10YR3/3 M1に切られる 土師器
12			欠
13	Ⅵい10	4×22	弥生土器
14	Ⅵい1	65×36	F3P4へ名称変更 弥生土器・土師器
15	Ⅵい1	77×39	F3P3へ名称変更 弥生土器・土師器・石製円板・磨石
16	Ⅴい10	70×47	F3P2へ名称変更 弥生土器
17	Ⅴい10	68×49	F3P1へ名称変更 弥生土器・土師器
18	Ⅴい10	60×35	①10YR2/3②10YR3/4(10YR4/6多量) H13を切る 弥生土器・土師器・須恵器
19	Ⅵい8	50×28	10YR3/4(10YR4/6) 土師器
20	Ⅵい8	40×21	10YR3/4(10YR4/6)
21	Ⅴい7	65×42	H20を切る 弥生土器・土師器
22	Ⅴあ6	37×28	10YR2/3 H21を切る 弥生土器・土師器・須恵器
23	Ⅴい6	58×49	10YR2/3 F5P3へ名称変更 弥生土器・土師器
24	Ⅴい6	55×23	10YR2/3(10YR5/6) P49を切る
25	Ⅴい6	60×38	10YR2/3(10YR5/6) 弥生土器・土師器
26	Ⅴい6	50×48	10YR2/3(10YR5/6) F5P2へ名称変更 弥生土器・土師器
27	Ⅴい6	50×29	10YR2/3(10YR5/6) P28を切る
28	Ⅴい5	75×34	10YR2/3 P27に切られ、H24を切る
29	Ⅴう2	60×28	M5を切る 10YR2/3(10YR5/6多量) 弥生土器・土師器
30	Ⅴう2	67×36	M5を切る 10YR2/3(10YR5/6多量) 弥生土器・土師器
31	Ⅴう1	102×36	①10YR2/3②10YR4/4(10YR5/6多量) F6P10へ名称変更
32	Ⅴう1	50×38	①10YR2/3②10YR4/4(10YR5/6多量) 柱痕φ20cm F6P11へ名称変更
33	Ⅴう1	47×30	①10YR2/3②10YR4/4(砂多量) 須恵器
34	Ⅴう1	107×40	①10YR2/3②10YR4/4(10YR5/6多量) F6P12へ名称変更
35	Ⅴい1	52×14	10YR2/3(10YR5/6多量)
36	Ⅴい1	54×36	①10YR2/3②10YR4/4(10YR5/6) F6P2へ名称変更
37	Ⅴい1	58×40	10YR2/3(10YR5/6多量)F6P3へ名称変更
38	Ⅴい1	47×31	10YR2/3 F6P4へ名称変更
39	Ⅵい8	57×52	F2P1へ名称変更 弥生土器・土師器・須恵器
40	Ⅵい9	88×41	F2P2へ名称変更 H6に切られる 弥生土器・土師器
41	Ⅴい5	57×55	①10YR2/3②10YR3/3 P48を切る F5P1へ名称変更 弥生土器・土師器
42	Ⅴい7	44×25	①10YR2/3 H21・P43を切る 土師器
43	Ⅴい7	68×27	①10YR2/3 P42に切られる 弥生土器・土師器
44	Ⅴう3	75×36	10YR2/3(10YR5/6多量) 弥生土器・土師器・須恵器
45	Ⅴう1	92×16	10YR2/3(10YR5/6多量) P65に切られる 弥生土器・土師器
46	Ⅴい1	45×21	10YR2/3(10YR5/6多量) F6P5へ名称変更
47	Ⅴい1	38×26	10YR4/4(10YR5/6多量)
48	Ⅴい5	50×41	①10YR2/3 F5P1に切られる 土師器
49	Ⅴい6	35×28	①10YR2/3 P24に切られる
50	Ⅴう1	84×41	10YR2/3 F6P14へ名称変更
51	Ⅴう1	55×54	10YR2/3 F6P13へ名称変更
52	Ⅴい5	66×41	H24を切る
53	Ⅴい5	62×26	10YR2/3 H25を切る 弥生土器・土師器
54	Ⅴい3	87×30	10YR2/3 H26を切る 弥生土器・土師器
55			欠
56	Ⅴい1	68×61	F6P15へ名称変更
57	Ⅴい1	64×41	F6P1へ名称変更
58	Ⅴう4	−×57	10YR2/3 H26を切る 弥生土器・土師器
59	Ⅴい3	55×−	10YR2/3 H26を切る 弥生土器・土師器
60	Ⅴい2	44×−	10YR2/3(10YR5/6(砂) H27を切る
61	Ⅵい2	46×28	①10YR2/2②10YR3/4(砂多量) H1を切る F1P4へ名称変更
62	Ⅵい2	46×17	①10YR2/2②10YR3/4(砂多量) H1を切る F1P5へ名称変更

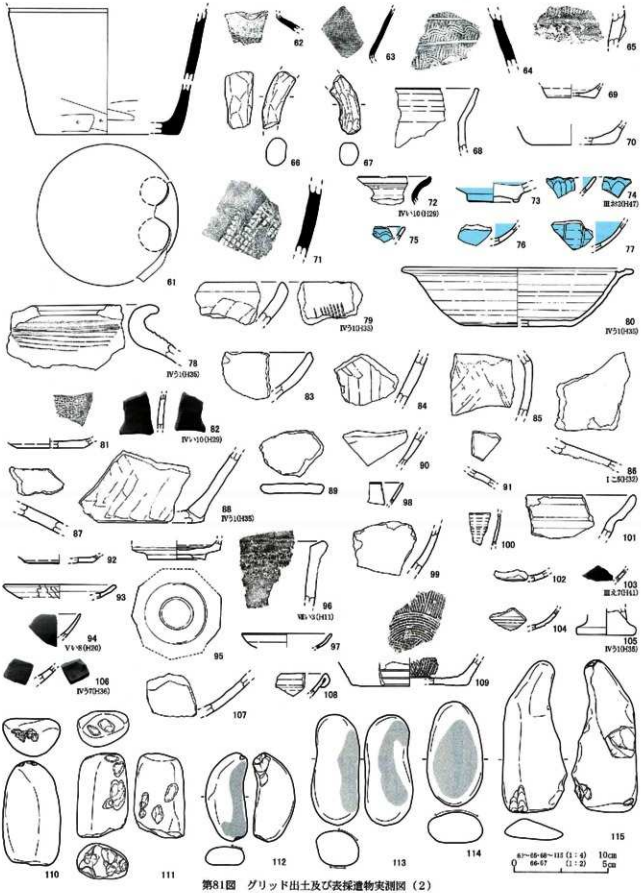
番号	位置	長径×深さ	備考
63			欠
64	Ⅵい4	50×29	10YR2/3 H14を切る 弥生土器・須恵器
65	Ⅴい2	115×48	M6を切る
66	Ⅴいう1	85×41	M6・F6P8を切る
67	Ⅴいう1	115×41	F6P8へ名称変更
68	Ⅴう1	64×40	F6P9へ名称変更 弥生土器・土師器
69	Ⅴい1	28×22	F6P7へ名称変更
70	Ⅴい1	25×15	F6P6へ名称変更
71	Ⅴい1	38×36	
72	Ⅴい1	25×24	
73	Ⅴう1	66×18	①10YR5/3②10YR4/1③10YR2/3 ④10YR4/6 F6P11に切られ 2層から弥生中期壺出土
74	Ⅴう1	65×16	H25・H26に切られる
75	Ⅴい3	43×37	10YR3/3 H26に切られる
76	Ⅴい3	23×32	H27に切られる
77	Ⅴい4	43×32	H23P2へ名称変更
78			欠
79	Ⅴう7	37×34	10YR3/4 弥生土器
80	Ⅴう7	40×60	10YR3/4 弥生土器・土師器
81	Ⅴう7	57×24	10YR2/3(砂多量) 弥生土器
82	Ⅴい6	55×27	10YR2/3 H22を切る F4P2へ名称変更
83	Ⅴい6	65×34	10YR2/3 H22を切る F4P1へ名称変更 弥生土器・土師器
84	Ⅴい6	72×29	10YR3/4 H22を切る 弥生土器・土師器
85	Ⅲう9	105×29	10YR3/4 H22を切る 弥生土器
86	Ⅳえ6	66×19	10YR3/4 弥生土器・土師器
87	Ⅱえ9	50×9	10YR3/2 H38を切る 弥生土器
88	Ⅱえ9	50×18	10YR3/2 H38P3へ名称変更
89	Ⅱえ9	47×28	10YR2/3 H43に切られH38を切る 弥生土器
90	Ⅱえ9	−×19	10YR2/3 H38を切る
91	Ⅱえ9	28×17	10YR2/3 H38を切る
92	Ⅱえ9	72×27	10YR2/3 H38を切る H43に切られる
93	Ⅱえ9	53×14	10YR2/3 H38を切る
94	Ⅱえ7	24×11	10YR2/2
95	Ⅱえ7	30×38	10YR2/2
96	Ⅱえ7	27×22	10YR2/2
97	Ⅱお7	27×20	10YR2/2(砂含む)
98	Ⅱお7	35×10	10YR2/2(砂含む)
99	Ⅱえ7	42×27	10YR2/1(下部に砂)
100	Ⅱえ7	40×29	10YR2/2
101	Ⅱえ7	21×12	10YR2/2(炭少量)
102	Ⅱえ8	58×39	10YR2/1
103	Ⅱえ8	20×17	10YR2/2
104	Ⅱえ8	22×16	10YR2/2
105	Ⅱえ8	22×10	10YR2/2
106	Ⅱえ8	32×25	10YR2/2(砂含む) H45を切る
107	Ⅱえ8	30×37	10YR2/2(砂含む) H45を切る
108	Ⅱお8	30×21	10YR2/2(砂含む)
109	Ⅱお8	42×37	10YR2/2(砂含む) H45を切る
110	Ⅱえ8	43×20	10YR2/2(砂含む) H45を切る
108	Ⅱお8	30×21	10YR2/2(砂含む)
109	Ⅱお8	42×37	10YR2/2(砂含む) H45を切る
110	Ⅱえ8	43×20	10YR2/2(砂含む) H45を切る
111	Ⅱえ10	23×25	10YR2/2(砂含む) H45・Ta4を切る
112	Ⅱえ9	25×25	10YR2/2(砂含む) H45・Ta4を切る
113	Ⅱえ9	35×26	10YR2/2(砂含む) H45・Ta4を切る
114	Ⅱお9	28×31	10YR2/2(砂含む) H45を切る
115	Ⅱお9	35×16	10YR2/2 H45・P196を切る 弥生土器・内耳土鍋
116	Ⅱお9	47×17	10YR2/2(砂含む) H45を切る
117	Ⅱえ9	40×24	10YR2/2(砂含む) H45・Ta4を切る
118	Ⅱえ9	27×29	10YR2/2(砂含む) H45・Ta4を切る
119	Ⅱえ8	34×27	10YR2/2(砂含む) H45を切る
120	Ⅱえ9	27×27	10YR2/2(砂含む) H48を切る
121	Ⅱえ9	30×24	10YR2/2(砂含む) H48を切る
122	Ⅱえ9	30×20	H48P2へ名称変更
123	Ⅱえ6	31×19	10YR2/1(下部に砂)

第5表　ピット一覧表（2）　(cm)

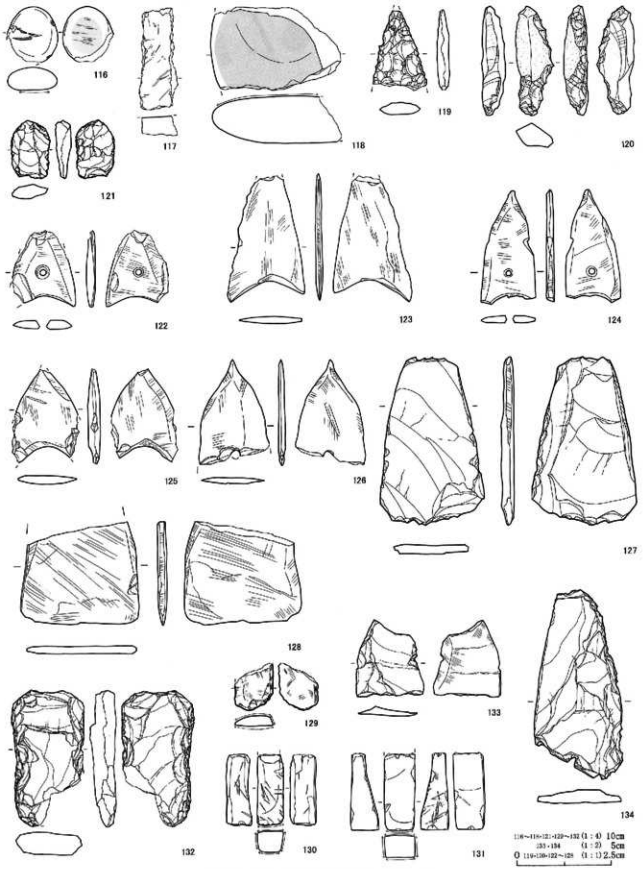
番号	位置	長径×短径	備考	番号	位置	長径×短径	備考
124	I-K5	51×32	10YR2/2(砂含む)	189	I-S3	37×37	10YR3/1 H8を切る
125	I-K3	50×32	10YR2/2(砂・粗石含む)	190	I-S6	38×32	10YR3/1 H8を切る
126	I-K6	29×17	10YR2/2(砂含む)	191	I-S6	33×13	10YR3/1
127	I-L5	36×31	10YR2/2(砂含む)	192	I-L5	44×16	10YR3/1 H33を切る
128			欠	193	I-E9	38×15	10YR3/2 H38を切る
129	I-H5	40×27	10YR2/3	194	I-E9	33×4.8	10YR4/2 H48を切る
130	I-H6	40×28	10YR2/3	195			欠
131	I-H6	50×29	10YR2/3	196	I-E9	28×9	10YR4/2 P113に切られる
132	I-H6	34×.6	10YR2/3	197	I-L10	35×35	10YR3/2
133	I-H5	54×21	10YR2/3	198	I-K10	35×17	10YR3/2 土師器・須恵器
134	I-H6	56×20	10YR2/2	199	I-L10	54×20	10YR3/2 Ta3を切る
135	I-H5	49×20	10YR2/3	200	I-L8	47×32	10YR3/2 H48を切る
136	I-H5	33×17	10YR2/3	201	I-H8	47×39	10YR3/2 H45を切る
137	I-G3	41×13	10YR2/3	202			欠
138	I-I3	40×18	10YR2/3 H53を切る	203	I-L5	46×23	10YR3/2 P119に切られ,P210を切る
139	I-L8	28×19	10YR2/2 砂を含む	204	I-K10	25×18	10YR3/2
140	I-L6	25×9	10YR3/2	205	I-K10	23×35	10YR3/2
141	I-L7	22×11	10YR2/2 砂を含む	206	I-L8	50×21	10YR3/2 H45を切る
142	I-L6	90×19	10YR2/2	207	I-K9	37×不明	10YR3/2 H48を切る
143	I-L6	45×25	10YR2/2	208			欠
144	I-L6	36×.9	10YR2/2	209			欠
145	I-L6	54×28	10YR2/2	210	I-L8	68×26	10YR3/2 P119・P203に切られる
146			欠	211	I-N7	25×18	H36を切る
147	I-M6	21×6	10YR2/3	212	I-N8	27×12	H36を切る
148	I-G3	24×9	10YR2/2	213	I-N8	35×45	H36を切る
149	I-J8	20×11	10YR2/2 H45を切る	214	I-N7	25×不明	H36を切る
150	I-J8	20×16	10YR2/2 H45を切る	215	I-M4	30×16	H10を切る
151	II-A1	70×16	10YR4/2 土師器	216	I-M4	42×13	M3を切る
152	II-A1	42×29	10YR3/3 弥生土器・土師器	217	I-M4	69×38	D2から6条変更
153	II-A2	39×28	10YR4/2 D22に切られる 土師器・台石	218	I-N9	103×29	D8に切られる
154	II-A1	40×20	10YR4/2 D25に切られる	219	I-M6	24×17	H42を切る
155	II-B2	28×24	10YR4/2	220	I-M6	25×12	H42を切る
156	II-A2	42×29	10YR4/2 弥生土器・土師器	216	I-M4	42×13	M3を切る
157	II-A1	40×37	10YR5/3 D23に切られる	217	I-M4	69×38	D2から6条変更
158	II-A2	28×24	10YR4/2	218	I-N9	105×29	D8に切られる
159	II-A2	32×18	10YR4/2	219	I-M6	24×17	H42を切る
160	II-A1	25×41	10YR4/2 D27に切られる 弥生土器・土師器	220	I-M6	25×12	H42を切る
161	II-B2	32×7	10YR4/3	221	I-M6	35×13	H42を切る
162	II-A2	34×20	10YR4/2 D22に切られる 弥生土器・土師器	222	I-M6	24×14	H42を切る
163	II-A2	37×22	10YR4/2 D22に切られる	223	I-M6	19×19	H42を切る
164	II-B2	27×27	10YR4/2	224	I-M6	30×19	H42を切る
165	II-A2	57×10	10YR4/2 弥生土器	225	I-M6	39×14	H42を切る
166	II-A2	35×20	10YR4/2	226	I-N6	28×20	H42を切る 弥生土器
167	II-A2	33×20	10YR4/2 P172に切られる	227	I-M6	34×15	H42を切る
168	II-B2	46×10	10YR4/2	228	I-N6	18×44	H42を切る
169	II-A2	43×13	10YR4/2	229	I-M4	28×31	H16を切る
170	II-A2	22×10	10YR4/2(焼化物) D22を切る	230	I-N8	97×48	①10YR3/4②10YR3/2 D12に切られる
171	II-B2	30×23	10YR2/2	231	II-A7	50×9	F4P3へ名称変更
172	II-A2	35×27	10YR4/2 P167を切る	232	I-N4	45×22	H40に切られる
173	II-A1	57×33	10YR4/2 P174に切られ、P183を切る	233	I-N4	49×33	
174	II-A1	38×44	10YR3/2 P173を切る	234			欠
175	II-A1	38×14	10YR3/2	235	II-A5	35×22	10YR2/1(10YR3/3多量) M8を切る
176	II-A2	28×34	10YR4/2 D21に切られる	236	I-N10	26×28	①10YR2/3②10YR3/3 H13を切る
177	II-A2	22×13	10YR4/2	237	II-A10	50×54	10YR2/3 H43を切る
178	II-A2	35×20	10YR4/2	238	II-A10	44×36	II51を切る
179	II-A2	32×34	10YR3/2	239	II-A6	25×12	I142を切る
180	II-A1	37×39	10YR3/2	240	I-N6	97×48	①10YR3/4②10YR3/2 D12に切られる
181	II-A2	35×.1	10YR3/2	241	II-A7	50×9	F4P3へ名称変更
182	II-A2	22×11	10YR3/2 P185を切る	242	I-N4	45×22	H40に切られる
183	II-A1	—×18	10YR4/2 P173に切られる	243	I-N4	49×33	
184	II-A1	24×11	10YR4/2 P167に切られP186を切る	244			欠
185	II-A2	18×12	10YR3/2 P182に切られる	245	II-A5	35×22	10YR2/1(10YR3/3多量) M8を切る
186	II-A1	48×16	10YR4/2 P184に切られる	246	I-N10	26×28	③10YR2/3②10YR3/3 H13を切る
187	II-A9	20×8	10YR2/2 Ta1を切る	247	II-A10	50×54	10YR2/3 H43を切る
188	II-B5	37×26	10YR3/1 H8を切る	248	II-A10	44×26	II51を切る



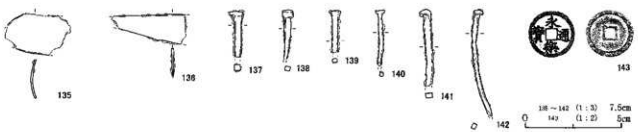
第80図　グリッド出土及び表採遺物実測図（1）



第81図　グリッド出土及び表採遺物実測図（2）



第82図　グリッド出土及び表採遺物実測図（3）



第83図　グリッド出土及び表採遺物実測図（4）

7.グリッド出土・表採遺物

遺構外出土遺物には、弥生時代中期栗林式期・後期箱清水式期土器、土師器、須恵器、埴輪、青磁、陶器、石器、鉄器、古銭がある。

1～54は弥生時代中期栗林式期・後期箱清水式期で、中期栗林式期が大半である。1は人面付土器の右顔部分である（人面部分ほぼ完形が50m北方の西一本柳遺跡Ⅰから出上）。54は蓋、55・56は土製円板、57は土製紡錘車である。

須恵器は、59・62・63のハソウ、61の甕、甕・短頸壺がある。埴輪は65の円筒埴輪、66・67の人物埴輪の腕がある。

68は土鍋、69・70・92はかわらけである。青磁は龍泉窯産の73が碗13C、74が輪花皿13～14C、中国産の75～77碗15C前半がある。78は須恵質褒珠洲13C、79は須恵質擂鉢在地13C後半。陶器は中世の古瀬戸・常滑・中津川・中国産がある。近世は瀬戸美濃・伊万里・京焼・在地産・前山焼等がある。石器・石製品は、敲石・磨石・砥石・台石・打製石鏃・磨製石鏃・打製石斧・二次加工ある剥片・磨製石鏃未製品・石器原材、鉄器は刀子・角釘がある。古銭は永楽通宝がある。

8.まとめ

本調査の結果は、数多く調査されている周辺遺跡と同様に弥生時代中期～中世に及ぶ遺構・遺物が検出された。

多くの遺構の中で、溝状遺構が注目される。西一本柳遺跡Ⅲ・ⅣのM1、西一本柳遺跡ⅦのM1、西一本柳遺跡Ⅲ・ⅣのM1、西一本柳遺跡ⅥのM2、西一本柳遺跡ⅩⅠのM1、西一本柳遺跡ⅩⅣのM12と、本遺跡のM2・M8号溝状遺構であり、弥生時代環濠の一部とみられる。第2図でみると、南北200m東西280mの楕円形に結ばれそうである。いずれも弥生時代後期の土器が多量に出土している。岩村田高校第2グランドから国道141号バイパスにかけて展開する総面積5万㎡を超える弥生時代後期の環濠である。（遺構・遺物の詳細な検証はなされていないが。）

これらの東方100mの位置にも各遺跡の調査結果を図上で復元すると、南北200m東西350mの楕円形になる溝状遺構が検出されている。北一本柳遺跡ⅢのM1、西一本柳遺跡ⅨのM1、東一本柳遺跡ⅡのM1、北一本柳遺跡ⅢのM26、東大門遺跡のM1等で、弥生時代後期土器が主に出土している。

佐久地方の弥生時代環濠は、後家山遺跡（弥生時代中期）、和田上遺跡（弥生時代後期）、戸坂遺跡（弥生時代後期）、西一里塚遺跡・餅出遺跡（弥生時代後期）等で検出されている。

中世（15世紀を中心とした）の竪穴状遺構・井戸址などの遺構が調査区東半部をから密集して検出され、陶磁器・鉄器・古銭等が出上した。

井戸址（D10号上坑）から出土した三足手取釜といわれる鉄瓶は、16世紀中頃にはこの形状のものが茶の湯の釜と認識されていたとされる。北隣の西一本柳遺跡ⅩⅣでは、火鉢・内耳土鍋・かわらけ等の日常品と共に、漆製品や漆刷毛などを伴う漆上房関連と見られる遺構群、青磁玉縁碗・古瀬戸天目茶碗・古瀬戸灰釉直縁鉢・茶釜・茶臼などがみられる。同じ岩村田遺跡群の柳堂遺跡・観音堂遺跡から西一本柳遺跡一帯は、大井氏の城下町賑わい「国府にまされり」と江戸時代の書物『四隣譚藪』に表されている。

報告書抄録

書名	岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅧ
ふりがな	いわむらだ にしいっぽんやなぎ
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第190集
編著者名	林 幸彦
編集・発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2011．3．31
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市志賀5953
遺跡名	岩村田遺跡群西一本柳遺跡ⅩⅧ（ＩＮＰⅩⅧ）
遺跡所在地	佐久市岩村田字西一本柳2338-4外
遺跡番号	５２
経度	138° -28′ -07.″ （世界測地系）
緯度	36° -15′ -53.″ （世界測地系）
調査期間	2009.12.22～2010.3.26 （現場） 2010.4.16～2011.3.25 （整理）
調査面積	1,017㎡
調査原因	市道工事
種別	集落址
主な時代	古墳時代～平安時代
遺跡概要	弥生中期/弥生後期/古墳後期/奈良/平安/中世 集落－弥生中期＋弥生後期＋古墳後期＋奈良＋平安＋中世－竪穴住居址＋竪穴状遺構＋ 掘立柱建物址＋土坑＋溝状遺構＋ピット－弥生土器＋土師器＋須恵器＋陶磁器＋鉄器 石器＋石製品＋石製模造品＋土製品＋獣骨
特記事項	弥生時代中期人面付土器・中世鉄瓶など貴重な資料となった。

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第190集
岩村田遺跡群
西一本柳遺跡ⅩⅧ
2011年３月
編集・発行　佐久市教育委員会
〒385-8501 長野県佐久市中込3056
文化財課
〒385-0006 長野県佐久市志賀5953
TEL 0267-68-7321
印刷所　キクハラインク有限会社